古歌

一　水底の、色さへふかき松が枝に、千歳をかけて、咲ける藤なみ。（後撰集讀人不知）

二　緑なる、松にかゝれる藤なれど、おのが頃とぞ、花は咲きける。（新古今集貫之）

三　松風の、吹かん限りは打たえて、絶ゆべくもあらず、咲ける藤浪。（拾遺集貫之）

【フジアワセ】　不仕合　〔参照〕（ウンメイ）

【フシギ】　不思議　〔参照〕（ユウレイ）

古句

一　黒雲俄かに立ち來り、猛火を放ち、劍を降らす。（謡曲胡蝶）

二　空より四種の花降り下り、天人雲に連り、微妙の音樂を奏す。（謡曲大

三　山風荒く吹き落ちて、空かき曇り、岩屋も俄かに搖ぐと見えしが、磐石四方に破れ碎けて、諸龍の姿は顯れたり。（謡曲一角仙人）

四　皷は自ら磯打つ波の聲。松風は琴の調。心耳を澄す折からに、天つ御空の雲居かゞやき渡り、湖水の面鳴動す。（謡曲白髭）

五　不思議や、南の方より吹き來る風に、異香薫じて瑞雲たな引き、金色の光かゞやき渡る。（謡曲嵐山）

六　山河も震動し、大地も動きて、寒風しきりに肝をつゞむ。

七　取らんとすれども、陽炎稻妻水の月かや、姿は見れども手に取られず。（謡曲熊坂）

八　虚空に花降り、音樂聞こえ、靈香四方に薫ずゝ。（謡曲羽衣）

九　不思議や、異香薫じつゝ、「和光垂跡」の姿を現し、玉の簪羅綾の袂風にたな引く瑞雲に乘ず。（謡曲室君）

【フジュウブン】　不十分　〔参照〕（フソク）（ミジュク）

【九】▲神佛の、形を現して、人間界に交る意。

【一】▲大なる水は、きたなき水をも含む。△山林草莽には、害毒となる陰氣あり。×美玉も瑕を含む。物は、完全なるが難し、となり。

【二】▲眼の（ひとみ）なり。事を成して、肝要なる一部の、未だ成らざるに言ふ。

【三】口もとに掛りて、未だ、奥深きに達せず、となり。

【四】うつくしき織物も、ずたずたに裂けたるは。まつてりしたる、丈夫の木綿に劣る、となり。

【五】▲純黑なり。未だ、十分の黑に至らず、となり。

【一】項羽の故事。人心の、離散せるに言ふ。

古句

一 ▲「川澤は汗を納れ」、△「山藪は疾を藏し」、×「瑾瑜は瑕を匿す」。（左傳）

二 龍を畫きて、▲睛を點ぜず。

三 堂に升りて、未だ室に入らず。（論語）

四 寸裂の錦襴は、堅完の常布に若かず、（抱朴子）

五 ▲玄、尙黑し。（楊雄）

【フシン】 曽請 〔參照〕（タテモノ）

【フシン】 婦人 〔參照〕（オンナ）

【フジンボウ】 不人望 〔參照〕（フシンヨウ）

古句

一 四面、楚歌を聞く。

【フシンヨウ】 不信用 〔參照〕（シンヨウ）（フジンボウ）

古句

【二】蟻の一種。

【三】▲縣令の意。

【四】▲（ヤスデ）、小虫の名。△黃河の意。

一 公には人に信ぜられず。私には友に助けられず。（韓愈）

西諺

一 靜かなる水と、默したる人とは、油斷する勿れ。（丁抹）

【フセグ】 防 〔參照〕（マモリ）（シロ）

【フソウオウ】 不相應 〔參照〕（オロカ）（コッケイ）

古句

一 夏を以て爐を進め、冬を以て扇を奏む。（王充）

二 ▲蚍蜉の、大樹を動かさんとするが如し。

三 枳棘は、▲鸞鳳の棲む所にあらず。百里は、豈大賢の道ならんや。（後漢書）

四 蚊をして山を負はしめ、▲商蚯をして河に馳せしむ。（莊子）

【フソク】 不足 〔參照〕（フジュウブン）（フヘイ）

古句

【一】天道の、盈滿を嫉ふを言へり。

【三】眼には映ずれども、深く心にとめぬ意。

【二】よそ見するなり。

一　滿は損を招き、謙は益を受く。（書經）

【フタゴコロ】二心　〔參照〕（ウタガイ）

【フチュウイ】不注意　〔參照〕（ユダン）（ツワノソラ）（フヨウイ）（マヌケ）

古句

一　心焉に在らざれば、視れども見えず、聽けども聞こへず、食べども其の味を知らず。（大學）

二　天下の難事は、必ず易より作り、天下の大事は、必ず細より起る。（老子）

三　雲烟の、眼を過ぐるが如し。

古歌

一　大井川岩波高し、いかたしよ、
　　岸の紅葉に「あからめ」なせそ。（金葉集經信）

【フデ】筆　〔參照〕（ショモツ）（ガクモン）（ショ）

【一】千里を走る駿馬。

【フトクギ】不德義　〔參照〕（フニンジョウ）（ニンビニン）（アク）

古句

一　不義にして富み、且貴きは、我に於いて浮雲の如し。（論語）

二　言は、悖りて出づる者は、亦悖りて入り、貨は、悖りて入る者は、亦悖りて出づ。（大學）

西諺

一　人は、不德を口にすることを恥ぢて、これを行ふことを恥ぢず。（英吉利）

【フドウリ】不道理　〔參照〕（ムリ）

【フトン】布團　〔參照〕（ヤグ）

【フニアイ】不似合　〔參照〕（ツカイカタ）（フケンシキ）（コッケイ）

古句

一　驥をして鼠を捕らしむ。

【二】▲小虫の名。△黄河なり。

【三】長所をすて、短所を行へば、智者も愚人に及ばず、となり。

【一】殘忍なること、猛虎の如き心をもちながら、表面は、君子の如くよそふなり。

【四】▲親子兄弟などの間柄なり。△小前の者供は、陰にありて、そしり合ふなり。

【五】▲人意を迎へて、逆はぬ者を、皆、其の人の類により異なり、となり。

【七】過失は、皆、其の人の類により異なり、となり。

二　蚊をして山を負はしめ、▲商蚅をして河に馳せしむ。（莊子）

三　猴と獼猴と、木を措きて水に據れば、則ち魚鼈に若かず。險を經、危きに乘ずるには、騏驥も狐狸に如かず。（戰國策）

【フニンジョウ】不人情　〔參照〕（フトクギ）（ニンピニン）

古句

一　虎にして冠す。（史記）

二　狡兎死して走狗烹られ、飛鳥盡きて良弓藏めらる。（史記）

三　棺を鬻く者は、歲の疫せんことを欲す。（漢書）

四　▲骨肉は家に怨望し、「細人は道に謗讟す」。（王符）

五　骨肉を疎んじて便辟に親しみ、知友に薄くして犬馬に厚くす。（王符）

六　腹に一寸の腸なきも、面皮の厚きこと斯の如し。（南史）

七　人の過や、各其の黨に於てす。仁者は厚きに失し、不仁者は薄きに失す。（論語）

【一】▲鶏のこと。

【一】▲遠き帆影の、水と空との間に消えて、見えずなる意。

【二】▲客船の、曉に出帆し去るなり。

【三】▲月影の、のどかに見ゆる形容。

【四】▲林の陰なり。

【五】▲遠く荆門（地名）のあたりを見渡せば、樹木は、あをあをとしげりてあり、となり。△巴水（川名）に浮んでありあるる舟は、ありありと見えて、數へ得る程なり、との意。

【六】▲一の小舟。△大

古歌

一　あさるとて、己が友よぶ▲「庭つ鳥」、
　　とりにも若かず、人の心は。（毅吟集契沖）

【フネ】船　〔參照〕（ウミ）（ミズ）（リョコウ）

古句

一　▲「孤帆の遠影は碧空に盡き」、惟長江ノ天際に流るゝを見る。（李太白）

二　江路の▲「征帆盡く去り」て、遠岸蒼々たり。（朗詠集謝觀）

三　秋水漲り來りて、船の去ること速かなり。夜雲收り盡きて、▲「月の行くこと遲し」。（郢展）

四　扁舟岸に繫いで▲林樾に依る。（李太白）

五　▲蒼々たる「遠樹は、荆門を圍み」、△「歷々たる行舟は、巴水に汎ぶ」。（李太白）

六　▲一葦の如く所に縱せて、△「萬頃の茫然たるを凌け」ば、浩々乎として、虛

に馮り風に御して、其の止まる所を知らざるが如く、飄々乎として、世を遺て、、獨立「羽化して、登仙する」が如し。（蘇軾）

七　▲「舳艫千里」、旌旗空を蔽ふ。（蘇軾）

八　孤帆水に連りて、雲と與に消ゆ。（朗詠集菅三品）

九　月の出潮の冲つ浪、霞の小舟漕がれ來て、海人の呼聲里近し。（謠曲八島）

一〇　一葉萬里の舟の道、唯一帆の風に任す。（謠曲八島）

古歌

一　河舟に、のりて心の行く時は、
　▲「沈める身」とも、思ほえぬかな。（後拾遺集匡衡）

二　須磨の浦のなぎたる朝は、▲「目もはるに」、
　霞にまがふ、海士の釣舟。（新古今集孝善）

三　和歌の浦を、まつの葉越しに眺むれば、
　梢によする、海士の釣舟。（新古今集寂蓮）

四　ほの〴〵と明石の浦の、朝ぎりに
　島がくれ行く、舟をしぞ思ふ。（古今集人丸）

【フネッシン】　不熟心　〔參照〕（オコタリ）

古句

一　外を慕ひて業を徒す者は、「る」者なり。（韓愈）

二　心焉に在らざれば、視れども見えず、聽けども聞こえず、食ひても其の味を知らず。（大學）

三　心、鴻鵠にあり。

【フヒンコウ】　不品行　〔參照〕（ジョウヨク）（ミダリガワシイ）（ミッツウ）（イロゴト）（ウワキ）

古句

一　酒色に是耽るは、雙斧して孤樹を伐るが如し。（故事成語考）

海原に、進み出づるなり。×羽のつきたる仙人となりて、空中に飛び上るが如し、となり。

【七】▲幾千艘の船艦の、連り進む形容。

【一】▲愛に沈みてある身なり。

【二】▲遙かに、見渡しのきく意。

【一】▲奥儀に達せざるなり。△眞の趣味を知らざる意。

【三】孟子中、突秋、突を欲へし故事。心の一事に專ならずして、他事に向ふに言ふ。

【三】男女、正當の媒介によらずして、相通ずるなり。
【四】身代をこはして、一家の生計を顧みざるなり。
【五】▲おもしろき音樂等。△美人のこと。
【六】▲だらしなく、幾日も酒宴を懶くるなり。△しまりなく、打解けて遊び戯るゝことの害毒は、何に基きて起るかと言へば、皆美人のまよはしに溺るればなり。
【七】閨中の、亂るゝことを言へり。
【八】男女の、密に通じ合ふなり。
【三】▲我が妻以外の婦人に、戯るゝことをすな、となり。

二　淫佚は、無禮より生ず。（司馬遷）
三　牆を越えて相從ふ。（孟子）
四　產を破りて家を爲めず。
五　聲耳に絕えず、色目に絕えず。（蘇軾）
六　由來流連は多く國を喪ふ。△「宴安の鴆毒は奢惑に因る」。（蘇軾）
七　帷薄修らず。（漢書）
八　穴隙を鑽りて、慇懃を通ず。

古歌

一　思へたゞ、心なぎさの鴛鴦だにも、
　　よその妻には、流れ過ふかは。（越前）
二　咲く花に、思ひつく身のあぢきなき、
　　身にいたつきの、いるも知らずて。（古今集讀人不知）
三　さらぬだに、重きが上のさよごろも、
　　▲「我がつまならぬ、つまな重ねそ」。（新古今集寂然）

【ブフウリュウ】　不風流　〔參照〕（ブコツ）

古句

一　殺風景とは、清泉に足を濯ぐ、花上に褌を曝す、山に背きて樓を起す、琴を燒きて鶴を煮る、花に對して茶を啜る、▲「松下の唱道」を謂ふ。（李磯山）
二　▲「文字の飲」を解せずして、唯能く△「紅裙に醉ふ」。

古歌

一　春霞、たつを見すてゝ行く雁は、
　　花なき里に、すみや習へる。（古今集伊勢）

【フヘイ】　不平　〔參照〕（イカリ）（ウラミ）（フユカイ）

古句

一　其の歌ふや思あり。其の哭するや懷あり。凡そ口より出でて聲を爲す

【一】▲松下、風佳の景を知らずして、人を追拂ひて、權勢を示す。
【二】▲詩歌を詠じながらに、酒を飲むにて、風流事なり。△美人に戯れながら、酒に醉ふにて、俗なり。

者は、其れ皆平かならざる者あり。（韓愈）

二　水の性は清を欲すれども、沙石これを濁し、人の性は平を欲すれども、嗜欲これを害す。（文子）

三　物其の平を得ざれば、則ち鳴る。（韓愈）

【フベンキョウ】　不勉強　〔参照〕（オコタリ）（フネッシン）

古句

一　父母教ふれども學ばざるは、是子の、其の身を愛せざるなり。學ぶと雖も勤めざるは、是亦其の身を愛せざるなり。（柳屯田）

二　一日これを暴めて、十日これを寒す。（孟子）

【フマンゾク】　不滿足　〔参照〕（フヘイ）

【フメイヨ】　不名譽　〔参照〕（ハジ）（フメンモク）

古句

一　好事門を出でず。惡事千里に傳はる。（事文類聚）

二　斯の恥を念ふ毎に、汗未だ背て背に發して、衣を霑さずんばあらず。（司馬遷）

三　偶〻この禍に遭うて、深く▲「鄉黨に戮笑せられ」、以て先人を汚辱す。（司馬遷）

西諺

一　惡瘡は、尙治すべし。惡名は、遂に癒えず（西班牙）

古歌

一　水上の清めるを受けて、行く水の末にも濁る、名をば流さじ。（風雅集廣秀）

【フメンモク】　不面目　〔参照〕（ハジ）（フメイヨ）

古句

一　深く▲「鄉黨に戮笑せられ」、以て先人を汚辱す。（司馬遷）

二　何の面目ありて、復父母の丘墓に上らんや。（司馬遷）

【三】▲我が住みある里人に、あざけり笑はるゝなり。△亡父のこと。

【二】世の中は、次第に、人情浮薄になり行くとも、我のみは、名譽にかゝはる行はすまじ、となり。

【一】▲我が住む里人の爲に、嘲り笑はるるなり。△亡父のこと。

【三】▲極寒の窓。

【四】▲（かげろふ）なり。

【フユ】冬〔参照〕（サムサ）（ユキ）（カゼ）（アラシ）

古句

一　雪晴れ雲散じて、北風寒し。（賈至）

二　▲窮陰凝閉し、積雪脛を沒し、堅氷鬚に在り。（李華）

三　冬嶺に孤松秀づ。（陶潛）

四　看るに野馬なく、聽くに鶩なし。（朗詠集雪三品）

五　雪降りつらゝゐて、谷の小川も音もせず。峯の嵐吹き氷り、瀧の白糸亟氷となりて、皆白妙に押並べて、四方の梢も見え別かず。（平家物語）

古歌

一　山川の、岩ゆく水も氷りして、
　　獨りくだくる、峯のまづかせ。（新古今集讀人不知）

【フユカイ】不愉快

古句

一　目を擧げて言笑するも、誰と與にか歡を爲さん。（李陵）

【三】▲いくさの道具なり。

【四】▲花の咲きたる木。

【五】古あとの、荒野となれる形容なり。

【フヨウイ】不用意〔参照〕（フチュウイ）（ユダン）（マヌケ）

古句

一　軍を見て矢を作ぐ。

二　盜を捕へて繩を糾ふ。

三　渴して井を穿ち、難に臨みて▲兵を鑄る。（說苑）

四　大寒にして裘を求む。

五　難に臨みて兵を鑄、嗟して井を掘る。（晏氏春秋）

【フルアト】古趾〔参照〕（アレル）（フルサト）（アレヤ）

古句

一　▲芳樹人無うして、花自ら落ち、春山の一路には、鳥空しく啼く。（李華）

二　只今惟鴟鴞つ飛ぶあり。（李太白）

三　庭樹は知らず、人の去りて盡きぬることを。春來れば還發く、舊時の花。（岑參）

四　桃李は言はず、春幾たびか暮れにし。烟霞跡無し、昔誰か栖みけん。（朗詠集菅三時）

五　悠々たり一千年。陳迹は惟高臺のみ。（高適）

六　社稷墟となる。（淮南子）

七　梁園の日暮、亂飛の鴉。極目蕭條たり、三兩家。（岑參）

八　七寶散り失せて、珠の扉風に破れ、黄金の柱霜雪に朽ちて、頽廢空虛の叢となる。（松尾芭蕉）

九　氣疎き秋の野らとなりて、池は水草に埋れて、古りたる松の陰暗く、又鳴き噪ぐ鳥のから聲。（謠曲夕顔）

一〇　楊柳桃李の梢こそ、折しり顔に色々なれ。昔の主人はなけれども、春を忘れぬ花なれや。（平家物語）

【四】古人榮華の跡、煙霞と共に消滅し、昔時花に向ひて、昔時を問へど、花は答へず、となり。

【五】一千年の昔のあとかたの遺れるものとては、只高き建物のみ、となり。

【六】國亡びて、社稷の古墟のみ、獨り存するなり。

【七】昔、梁の孝王の築かれし竹園も、今は荒廢して、鴉のぐらとなり、見渡すかぎり、ひつそりと寂びれて、只二三軒の家の、ぽつ〳〵見ゆるのみ、となり。

一一　國破れて山河在り、城春にして草木深し。（杜甫）

古歌

一　無き人の、跡をだにとて來て見れば、「あらぬ里」にも、なりにける哉。（新古今集慶運）

二　人住まぬ、不破の關屋の板びさし、荒にし後は、たゝ秋のかぜ。（新古今集攝政太政大臣）

三　影やどす、露のみしげく成り果てし、草にやつるゝ、故里の月。（新古今集雅經）

四　古の人に我があれや、「さゞ浪の舊き都」を、見ればかなしき。（萬葉集古人）

五　古里の、花の物いふ世なりせば、如何に昔の、ことを問はまし。（後拾遺集出羽辨）

六　年を經て、見る人もなき古里に、

【一一】國民散亂して、昔時の繁昌なく、只昔なからのものは、山河の風景と、春時に至れば、草木の茂るのみ、となり。

【一】▲全く變り果てたる里の意。

【四】▲天智帝の、近江滋賀の都のこと。

變らぬ松ぞ、あるじならまし。（後拾遺集左衛門督北方）

【フルイ】舊〔參照〕（アタラシイとフルイ）

【フルイタツ】奮起〔參照〕（フンバツ）

古句

一　飛ばずんば則ち已まん。一たび飛ばゞ天に冲らん。鳴かずんば則ち已まん。一たび鳴かば人を驚かさん。（史記）

二　袂を投じて起つ。（淮南子）

【フルイとアタラシイ】新舊〔參照〕（アタラシイとフルイ）

【フルサト】故鄉〔參照〕（フルアト）（アレル）

古句

一　張翰は、蓴を思ひて官を捨つ。

二　「翠嶺を踏んで西顧すれば、「家鄉悉く烟樹の深きに沒す」。（詠朗集會歌）

【一】張翰が、古鄉の蓴菜の美味を慕ひし故事。

【二】▲高山に登り立つ意。△鄉里は、雲烟樹木の爲にへだてられて、見えざる形容。

【二】奮起の形容。

三　▲鵲鳥は舊林を戀ひ、池魚は故淵を思ふ。（陶潛）

四　某の木は、吾が先人の種ゑし所なり。某の水、某の丘は、吾が童子の時に釣遊せし所なり。（韓愈）

五　一たび故國を辭してより、十たび秋を經ぬ。秋瓜を見る毎に、▲故丘を憶ふ。（杜甫）

六　▲胡馬は北風に依り、△越鳥は南枝に巢ふ。（文選）

七　鄉國は知らず、何處か是なるを。雲山漫々として、人をして愁ひしむ。（張祜）

【三】▲遠方より、渡り來る鳥なり。

【四】▲亡父のこと。

【五】▲故鄉のこと。

【六】▲北方、胡國産の馬なり。△南方、越國産の鳥なり。鳥獸、なほ故國を慕ふ情ある喩。

古歌

一　故鄉の、花の匂ひやまさるらん、
　　しづ心なく、歸るかりがね。（詞花集贈左大臣母）

古句

【フルマイ】振舞〔參照〕（タチイ）（レイギ）（サホウ）

【一】起居ふるまひの、武骨なる形容。
【二】起居ふるまひの、高くして、氣持の、しつとりと落ちつく深の形容。
【三】▲起居ふるまひの、人の模範たるに足るなり。△禮儀の正しく、貴きなり。×◎共に、起居作法の規律あるを言へるなり。
【四】▲帶の結び目なり。△着座の場處外に、聞こえぬ様に言ふなり。
【五】▲背をかゞむるなり。△兩手をこまぬきて、太鼓を抱けるが如くするなり。
【六】▲ぐるりと、丸くめぐるなり。△かつきりと、折れ目正しくめぐるなり。

一　舉止生硬。（附掌錄）
二　顧視清高にして、氣深穩なり。（杜甫）
三　▲「俯仰宗とすべく」、▲「揖讓貴ぶべく」、×「作事方あり」、◎「動靜常有り」、禮帥ひて荒まず。（徐偉長）
四　視は結褌の間を離れず。△「言は表著の位を越えず」。（徐偉長）
五　立ちては以て▲磬折し、坐しては以て▲抱鼓す。（徐偉長）
六　周旋規に中り、△折旋矩に中る。（徐偉長）
七　動容周旋禮に中る者は、盛德の至なり。（孟子）

【ブレイ】　無禮　〔參照〕（プエンリョ）（ムトンジャク）

古句

一　淫佚は、無禮より生ず。（司馬遷）

【フワ】　不和　〔參照〕（ナカタガエ）（アラソイ）（ショウトツ）

古句

【一】▲圓き孔に、角なる柄。

【五】▲苦菜と甘菜となり。君子は、小人と、肩を並べざるに喩ふ。
【六】▲父子、兄弟、夫婦のこと。
【七】文帝の故事。兄弟の不和なるに言ふ。

一　方圓氷炭の、相容れざるが如し。（蘇軾）
二　▲柄鑿は相容れず。
三　氷炭相容れず。
四　氷炭は、器を同じくせず、日月は、明を並べず。（鹽鐵論）
五　▲茶齊は、畝を同じくせず。（楚辭）
六　▲六親和せずして、孝慈あり。（老子）
七　尺布縫はず、斗粟舂かず。

【ブンガク】　文學　〔參照〕（シイカ）（ブンショウ）（ブンショウカ）

【ブンガクシャ】　文學者　〔參照〕（ブンショウカ）

【ブンゲン】　分限　〔參照〕（ミブン）（ホンブン）（マンゾク）

古句

一　冠は、敝ると雖も必ず首に加へ、履は、新しと雖も必ず足に關る。何となれば、上下の分なればなり。（史記）

【二】▲神主。△供物。人、各其の本分を守るべき戒なり。

【三】▲（どふれづみ）のこと。△黄河のこと。物、各其の分あり。敢て、多きを貪らざれ、となり。

【一】巧みなる者も、成すこと遲ければ、拙者の、速かに成すに劣る、となり。

【二】▲不實用的の文章なり。△自己の意見を發表するなり。

【三】▲深く、作文の道を研究せずして、上手に至る者はなし、となり。

【四】▲他人の文章中の文句を、ぬすみ取りて用ひ、或は、その形をまぬるなり。

【五】▲情實を、十分に探し窮むるなり。△十分に思考するなり。×形の、色色樣々なるなり。

【七】詩文などの、勢力ある形容。

【八】意、上に同じ。

【一〇】ふるき書籍の中の文句を、盜みとるなり。

【一一】文章の簡短にして、意味のおくふかきなり。

【一二】意、上に同じ。

【一三】手近なる例を引いて、其の道理を、廣きに亘る樣に說くなり。

【一四】文章の美なるを形容せるなり。

【一五】文章の旨意の、おく深き形容。

二　庖人庖を治めずと雖も、▲尸祝樽俎を越へて、これに代らず。（莊子）

三　鷦鷯は深林に巢へども、一枝に過ぎず。▲偃鼠は河に飲めども、滿腹に過ぎず。（莊子）

四　貧しくして、分を知らざれば盜み、力衰へて、分を知らざれば病を受く。（然徒草）

【ブンショウ】文章　〔參照〕（シイカ）（ブンショウカ）（ギロン）

古句

一　巧遲なるは、拙速に若かず。（謝枋得）

二　論じて以て其の憤思を舒べ、▲空文を垂れて以て▲「自ら見す」。（司馬遷）

三　文は、道を貫くの器なり。▲「斯道に深からずして、至る有る者はあらず」。（李漢）

四　▲「剽掠潛竊」を工と爲す。（李漢）

五　詭然として蚊龍翔り、蔚然として虎鳳躍り、鏘然として韶鈞鳴り、日の如く光り、▲玉の如く潔く、周情に孔思に、×「千態萬貌なり」。（李漢）

六　人聲の精なる者を言と爲す。文辭の言に於ける、又其の精なる者なり。（韓愈）

七　光燄萬丈。

八　氣燄萬丈。

九　文奇なりと雖も、用を濟さず。（韓愈）

一〇　陳編を窺ひて、以て盜竊す。（韓愈）

一一　其の文約にして、其の辭微なり。（司馬遷）

一二　其の文を稱すること小にして、其の旨極めて大なり。（司馬遷）

一三　類を擧ぐること邇くして、義を見はすこと遠し。（司馬遷）

一四　錦帳曉に開く、雲母の殿。白珠秋寫す、水精の盤。（朗詠集章孝標）

一五　沈詞拂悅として、遊魚の鈎を銜んで、深淵の底より出づるが若し。（陸士衡）

【一六】▲曹操、孔璋が草せし檄文を見て、病愈えし故事。△漢武帝、司馬相如が上林賦を見て、凌雲の勢ありと賞せられし故事。

【一八】▲口の開かぬ樣に、はむる器械。讀まんとするも、讀み難き形容。

【一九】▲高尚にして、厠しきなり。

【二〇】▲社界の人心を、敎育するなり。

【二二】▲崑崙のこと。玉の產地なり。文章美にして、言々句々、皆玉の如し、となり。

【二三】文詞の花やかにして、意味のおくふかき形容。

【二三】▲司馬遷のこと。

【二四】よく味ふれば、誠に而白く、粗末に味ふれば、うまみなし、との意。

【二六】思ふがまゝに、筆のまはる形容。

一六　▲「陳孔璋が詞ば、空しく病を愈し」、△「馬相如が賦は、只空を凌ぐ」。（朗詠集橘尊敬）

一七　辭　嚴かに、義密にして、讀めども曉り難し。（韓愈）

一八　讀まんと欲すれども、▲箝の口に在るが如くなるを嗟く。（蘇軾）

一九　議論は古今に證據し、經史百子に出入し、▲踔厲にして風發る。（韓愈）

二〇　文章の、▲世敎に關らざるは、工なりと雖も益無し。（葉氷心）

二二　玄圃積玉の如く、夜光に非るはなし。（晉書）

二三　文は春華の如く、思は湧泉の如し。（曹植）

二三　文は當に▲遷を學ぶべし。詩は當に杜子美を學ぶべし。（唐詩）

二四　熟喫すれば羊肉、生喫すれば菜羹。

二五　氣力雄健にして、光燄長く遠し。（謝枋得）

二六　意の到る所には、則ち筆力曲折してこれに隨ひ、意を盡さゞる無し。（春渚記聞）

【二七】△判斷の、はつきりするなり。△すらりとして、活氣ある形容。×むき出しならず、甘く言ひまはすなり。

【二八】思ふ存分に、文に變化あらしむるなり。

【三一】思ふ存分に議論して、少しも筆のとゞこほらぬなり。

【三三】文章の、巧妙なる形容。

【三四】詩文なとの、瑕なきに言ふ。

【三六】文章に、勢力ある形容なり。

【三七】晉書中、左思、三都賦を作りし故事。著述の、世にもて囃さるゝに言ふ。

二七　議論精明にして、▲「斷制に」、文勢圓活にして、×婉曲なり。（謝枋得）

二八　抑揚あり、頓挫あり、波瀾檎縱、意の如くならざるなし。（謝枋得）

二九　誕設にして、信ずるに足らず。（蘇洵）

三〇　筆勢敵なく、光燄天を燭く。（謝枋得）

三一　放言高論して、筆端窘束せず。（謝枋得）

三二　語高らして、旨深し。（韓愈）

三三　筆は造化を補ひて、天も功無し。（李長吉）

三四　天衣縫なし。

三五　雪を繪く者は、其の淸を繪く能はず。月を繪く者は、其の明を繪く能はず。花を繪く者は、其の馨を繪く能はず。泉を繪く者は、其の情を繪く能はず。（韓愈）

三六　筆力、鼎を扛ぐ。（鶴林玉露）

三七　洛陽の紙價を貴くす。

【三八】文章の澎烈にして、人の心を刺す如き感ある形容。

【四〇】詩文添削の、効ある形容。

【四一】文學者に、薄命なるが多きを言へり。

【四二】文詞のはなやかにして、意味のおく深き形容。

【四三】佳語名句を諳誦して、作文の材料とする意。

【四四】口に任せて唱へ出す所、悉く佳句妙文たる意。

【四五】隙く、書を讀みて文章の、神速自在なる形容。

【四六】作文の、神速自在なる形容。

【四七】文學思想の、豊富なる形容。

三八　字中、皆風霜の氣を挾む。

三九　文章は、經國の大業、不朽の盛事なり。（魏文帝）

四〇　靈丹一粒、鐵に點じて金と成す。（傳習錄）

【ブンショウカ】　文章家　〔參照〕（ブンショウ）（シイカ）

古句

四一　文章は命達を憎む。（杜牧）

四二　文は春華の如く、思は泉の如し。（曹植）

四三　英を含み、華を咀ふ。（嵇康）

四四　咳唾も、自ら珠を爲す。

四五　書を讀みては、萬卷を破り、筆を下しては、神有るが如し。（杜甫）

四六　筆を下せば、章を成す。（魏志）

四七　錦心繡腸。

【ブンとブ】　文武　〔參照〕（ガクモン）（トウケン）（シイカ）

【一】文と武とは、偏廢すべからず、となり。

【二】武人の家からは、よき武人出て文官の家からは、よき文官を出すの意。

【三】國家に盡す方面とは、武官の、國家に盡す方面とは、名異なれども、結局の勳功に至りては、同一となり。

【五】▲人道に反する意。△武を以て仕ふる家。

【七】危難を冒さゞれば、大なる功名は得難し、となり。

【二】人は、安きに居て心怠り、危きに在れば、自ら戒めて奮勵す。

古句

一　文事ある者は、必ず武備あり。（史記）

二　文武兼ね備はる。（唐書）

三　將門には必ず將あり。相門には必ず相あり。（史記）

四　文官錢を愛せず、武臣死を惜まずんば、天下太平ならん。（宋史）

五　文武は途を異にすれども、勳烈は同歸なり。（魏志）

六　夫戰勝を務め、武事を窮めて、未だ悔いざる者は有らず。（主父偃）

七　生けらん程は、武に誇るべからず。▲「人倫に遊く」、禽獸に近きふるまひ、△「其の家」にあらずは、好みて益なきなり。（徒然草）

【フンパツ】　奮發　〔參照〕（イッシン）（シュッセ）（ネッシン）

古句

一　虎穴に入らざれば、虎子を得ず。（後漢書）

二　これを死地に陷れて、然る後に生く。（孫子）

【五】極點に達して、更に進歩の工夫するなり。

【六】▲千里を走る馬なり。▲十日も、打續けてのるなり。凡人も、勉めて止まざれば、賢者に及ぶことを得、となり。

【七】王侯となり、將となり、相となるは、生れつきたる運命にあらず。奮發次第にて、誰にも得らる、との意。

【八】交通機關の完備すれば、遠隔の地も、隣りの如く、近く感ぜらる、となり。

三　憤を發しては、食を忘る。（論語）

四　少壯にして努力せずんば、老大にして徒に傷悲せん、（沈休文）

五　百尺竿頭、一歩を進む。

六　▲驥は、一日にして千里す。駑馬も、十駕すれば亦これに及ぶ。（荀子）

七　王侯將相、寧ぞ種あらん。（史記）

八　善く事を制する者は、禍を轉じて福となし、敗に因りて功と爲す。（史記）

【ブンメイ】文明

古句

一　天下の所謂、禮樂刑政教化の具、皆已に修理す。（韓愈）

二　萬里も比隣の如し。（曹植）

三　海内に知己を存し、天涯も比隣の如し。（王勃）

邊の部

【ヘイ】兵

古句

一　兵強きときは滅び木強き時は折る。（淮南子）

【ヘイタイ】兵隊〔參照〕（グンタイ）

【ヘイキ】平氣

古句

一　旁に人なきが如し。（世說）

二　眼中に人なきが如し。（世說）

三　雲煙の、眼を過ぐるが如し、

四　意氣自如たり。（漢書）

五　恬として怪まず。

六　恬として顧ず。

【ヘイホウ】兵法〔參照〕（イクサ）

【一】少しも、遠慮のなき形容。

【二】意、上に同じ。

【三】眼に映ずれども、深く心に止めぬを言ふ。

【一】▲流るべき方向を定むるなり。△勝つべき方法を定むるなり。×きまり切つたる形。

【三】▲虚勢を張るなり。

【一】戰爭を止むる意。

【一】上手も、事を爲すこと遲ければ、下手の、速かなるに劣る、となり。

古句

一　水は、地に因りて「▲流を制し」、兵は、敵に因りて「△勝を制す」。故に兵に×常勢無く、水に常形なし。能く敵に因りて變化し、勝を取る者、これを神といふ。（孫子）

二　勇を貴ばずして、忍を貴ぶ。これ實に一字千金の兵法なり。（晉書）

三　兵には、故らに「▲聲を先にして、實を後にす」る者あり。（漢書）

【ヘイワ】平和　〔參照〕（タイ（イ））

古句

一　甲を卷き、旗を韜む。（晉書）

【ヘタ】下手　〔參照〕（チョウショとタンショ）

古句

一　巧遲も、拙速に如かず。

【ヘダタリ】隔　〔參照〕（マワリドウイ）（リョコウ）

【二】▲外國に葬らるゝ意。

【三】▲（さかり）のつくなり。遠隔なる形容に用ふ。

【四】甚しく懸隔する意。

【一】▲角製の指はめなり。强弦を引くに用ふ。

【二】富貴に追從し、權勢にへつらふ者の形容。

【三】面前にありては服從し、陰にありては不平を鳴らす意。

古句

一　道里遼遠にして、山川阻深なり。（司馬相如）

二　相去る萬里、人絶へ路殊ゆ。生きては別世の人と爲り、死しては「▲異域の鬼」と爲らん。（李陵）

三　▲風する馬牛も、相及ばず。（左傳）

四　日を同じくして論ぜられず。（史記）

【ヘツジウ】諛　〔參照〕（ツイショウ）（ショウジン）

古句

一　君射れば、臣則ち▲決す。楚の莊王細腰を好む。故に朝に餓人あり。（荀子）

二　朝には富兒の門を控き、暮には肥馬の塵に隨ふ。（杜甫）

三　面從して、後言す。

四　林中には疾風多く、富貴には諛言多し。（鹽鐵論）

【ヘリクダル】 謙 〔参照〕（ケンソン）（ウヤマウ）（ウヤウヤシイ）

【ヘンカ】 變化 〔参照〕（ウツリカワリ）

古句

一 天に三日の晴なく、地に三尺の平なし。（明詩綜）

二 變動すること、猶鬼神の端倪すべからざるが如し。（韓愈）

三 千變萬化、窮極すべからず。（列子）

四 天翻り、地覆る。（中庸）

五 千態萬狀、形容すべからず。

【ベンキョウ】 勉強 〔参照〕（ガクモン）（トクショ）（イッシン）

古句

一 蹞歩して休まざれば、跛鼈も千里す。累積して輟まざれば、丘阜を成すべし。（淮南子）

二 小壯にして努力せずんば、老大にして徒に悲傷せん。（文選）

【一】▲半歩なり。小股に歩む意。

【二】▲山の端と、川の岸なり。見て、見極めのつけ難きなり。

【三】終日、これを行ひて、尚行ひ切れぬなり。

【四】孔子を指せり。學に終極なし。晝夜勉勵すべし、となり。

【五】▲日に、千里を馳する馬。ムのろき馬。×十日も、休まずにのるなり。

【六】聖人の教を記せる經書や、諸大家の著書か集めたる書冊室内に起臥して、勉強する意。

【一〇】▲すり切れたる鈎瓶の繩も、遂に斷ち切るに至る。小も積れば、侮り難き喩。

【一一】冬は、晨の餘なり。夜は、日の餘なり。陰雨は時の餘なり。

【一二】死に至るまで、勉勵撓まざる意。

【一三】王侯の尊も、將相の貴も、家がらに依らず。奮勵努力の結果なり、となり。

三 孜々として、維日も足らず。

四 ▲子河上に在りて曰はく、逝く者は斯の如きか。晝夜を舍かずと。（論語）

五 ▲驥は一日にして千里す。駑馬も×十駕すれば、亦これに及ぶ。（荀子）

六 經を枕にし、書を藉く。（班固）

七 人一たびしてこれを能くすれば、己はこれを百たびし、人十たびしてこれを能くすれば、己はこれを千たびす。（中庸）

八 勤は無價の寶、愼は、是身を護るの符なり。（明心寶鑑）

九 十讀は、一寫に如かず。

一〇 泰山の雷は石を穿ち、▲「殫極の綆は輪を斷つ」。（枚乘）

一一 三餘に書を讀む。

一二 俛として、日に孳々たるあり。斃れて後に已む。（史記）

一三 王侯將相、寧ぞ種あらん。（史記）

一四 膏油を焚いて、以て晷に繼ぎ、恒に兀々として、以て年を窮む。（韓

【一四】年中、晝夜の別なく、勉強する意。

【一六】▲勤勉の樣の形容。〈困難の樣の形容。

【一七】燈火の下にて、勉強するに適する季節となりたり、となり。

【一八】風雨に身をさらして、勤勞する意。

【一九】後漢書中、高鳳の故事、勉學の爲に、他事に放心なるに喩ふ。

【二〇】未だ明けざるに起き出でゝ、夜に入りて歸る意。

【二三】風雨に身をさらして、勤勞する意。

【二四】▲以て睡眠をさましゝなり。

【二五】▲身を苦しむるなり。

（意）

一五　蚤に起きて夜に思ひ、力を勤めて心を勞す。（柳柳洲）

一六　▲孜々▲矻々として、死して後に已む。（韓愈）

一七　燈火稍親しむべく、簡編舒すべし。（韓愈）

一八　甚雨に沐し、疾風に櫛る。（莊子）

一九　書を讀みて、麥を漂はす。

二〇　星を戴きて出で、星を戴きて入る。（呂氏春秋）

二一　朝には星を戴きて出で、夕には月を踏んで歸る。

二二　九層の臺も、累土より起り、千里の行も、足下より始まる。（老子）

二三　露雨に沐浴し、扶風に櫛る。（淮南子）

二四　蘇秦は、▲錐を以て股を刺し、匡衡は、壁を穿ちて隣家の燭光を竊み、車胤は、螢を集め、孫康は月に映じき。

二五　▲鞠躬盡力して、死して後に已む。（諸葛亮）

西洋

一　天は、自ら助くる者を祐く。（英吉利）

二　楽しき夕は、苦しき朝に伴ふ。（英吉利）

三　無益の勉強は、多忙なる怠惰なり。（英吉利）

四　働くのみにして遊ばしめざれば、太郎をして痴鈍ならしむ。（英吉利）

【ベンゴシ】辯護士　〔參照〕（ホウリツカ）

【ヘンゲ】變化　〔參照〕（ユウレイ）

【ヘンジ】返事　〔參照〕（コタエ）

【ベンシャ】辯者　〔參照〕（ベンゼツ）

古句

一　高談雄辯、四筵を驚かす。（杜甫）

二　三寸の舌を掉ひて、不拔の策を建つ。（楊雄）

三　辯舌流るゝが如し。

【四】能辯の、滔々としてよどみなき形容。

【五】▲口巧者は、とかく、口にまかせて言ひ過ごすを以て、實行し難きことあり。

【六】▲佞を惡むは、其の義を亂るを恐れてなり。（孟子）

【七】▲顏色をやはらげて、人の機嫌をとる如き類。

【九】口の上手は、其の君王を暗惑して、國家を危くすることあり。

四　河を懸け、水を瀉ぎて、渦きざるが如し。（晉書）

五　大巧は拙なるが如く、大辯は訥なるが如し。（老子）

六　佞を惡むは、其の義を亂るを恐れてなり。▲「利口」を惡むは、其の信を亂るを恐れてなり。（孟子）

七　巧言令色には、鮮し仁。（論語）

八　巧言は德を亂る、小を忍ばざれば大謀を亂る。（論語）

九　利口の、邦家を覆すを惡む。（論語）

西諺

一　吠ゆる犬は、人を咬まず。（英吉利）

【ヘンシン】 變心　〔參照〕（ココロガワリ）（ケイハク）（ハクジョウ）

【ベンゼツ】 辯舌　〔參照〕（ベンシャ）

古句

一　辯舌流るゝが如し。

【二】▲巳の惡しきを、辯舌をふるひて、善なるが如くに、言ひくるむるなり。

【三】言語の危險にして、鬼神をも怖れしむるなり。

【三】よく辯する者は、よく行はず、の意。

二　智は▲「非を飾る」に足り、辯は說を行ふに足る。これ讒臣なり。（說苑）

三　險語して鬼膽を破る。

西諺

一　女子の魔力は、其の舌にあり。（英吉利）

二　多辯は、知識の證據にあらず。（英吉利）

三　舌の長き人は、其の手短し。（英吉利）

【ヘンセン】 變遷　〔參照〕（ウツリカワリ）

【ベンリ】 便利　〔參照〕（タヤスイ）

古句

一　高屋の上に居て、瓶水を建すが如し。（史記）

保の部

【ボウガイ】 妨害　〔參照〕（サマタゲ）（ガイ）

【ボウキュウ】 俸給　〔參照〕（ホウシュウ）（ヤクニン）

【一】俸給の爲に、身の自由を束縛せらるゝ意。

【二】危險を冒さゞれば、大功をたて難きに喩ふ。

【三】危難を冒さゞれば、大功をたて難きに喩ふ。

【一】風俗のかはれるが爲に、人意に背反して、世に通用し難き樣なる一時的の事は、君子の法則とするに足らず、となり。

古句

一　五斗米の爲に腰を折る。（晋書）

【ボウケン】　冒險　〔參照〕（シゴト）

古句

一　虎穴に入らざれば、虎子を得ず。（後漢書）

【ボウコン】　亡魂　〔參照〕（ユウレイ）

【ホウシュウ】　報酬　〔參照〕（ヤクニン）（ムクイ）

古句

一　利は天より來らず。地より出でず。（鹽鐵論）

二　虎穴に入らざれば、虎子を得ず。（後漢書）

【ホウソク】　法則　〔參照〕（ホウリツ）

古句

一　風移り俗易れば、乖忤して通ずべからざるは、君子の法に非るなり。

【一】天の、民に幸福を降し與ふる意。

【二】貪獸艸木に至るまで、皆天幸を得て繁榮する意。

【一】方法を誤れるに喩ふ。

（孟子）

【ホウトウ】　放蕩　〔參照〕（フヒンコウ）

【ホウネン】　豐年　〔參照〕（タイヘイ）

古句

一　「天康を降し」、豐年穰々たり。（詩經）

二　雨順に風調うて、百穀登る。（蘇軾）

三　動植の物、風雨霜露の沾被する所の者、皆已に宜しきを得たり。

四　太平の世は、五日に一たび風ふき、十日に一たび雨ふり、風は枝を鳴らさず、雨は塊を破らず。（論語）

【ホウビ】　褒美　〔參照〕（ショウとバツ）

【ホウホウ】　方法　〔參照〕（フケンシキ）（オロカ）（ハカリゴト）（コッケイ）

古句

一　木に緣りて魚を求む。（孟子）

【二】▲千里の馬なり。大人物に譬ふ。大人物を、使用する方法をあやまるに喩ふ。

【三】昔、その道を誤れるなり。

【六】其の根本の方法を誤りて、姑息の手段をとるに喩ふ。

【一〇】▲荒馬のこと。△押へかゝへのならぬ人物。

二　▲驥をして鼠を捕らしむ。

三　荷を山上に植ゑ、火を井中に畜へ、釣を操りて山に上り、斧を揚げて淵に入る。（淮南子）

四　湯を以て沸に沃げば、亂乃ち逾〻甚し。（淮南子）

五　善く釣る者は、魚を千仞の下に引く。餌香しければなり。（呂氏春秋）

六　江河の源を決して、これを障ぐに手を以てす。（淮南子）

七　其の源を壓して、其の瀆を開かば、江河も竭しつべし。（荀子）

八　山に上りて魚を求め、水に入りて兎を捕ふ。（易林）

九　湯を以て沸を止む、沸乃ち止まず。誠に其の本を知らば、火を去らんのみ。（淮南子）

一〇　▲泛駕の馬、△跅弛の士も、亦これを御するに在るのみ。（漢書）

一一　累卵の危きに居て、泰山の安きを圖る。（王符）

一二　肉を以て蟻を去れば、蟻愈多く、魚を以て蠅を驅れば、蠅愈至る。

【一三】蘖林伐山の故事なり。伯樂の子、父の書により、駿馬を索め、却りて、悍馬を得し故事。

【一四】容易なる方法を用ひて、安穩なる結果を得んとせず。又、危險なる方法により、至難の業を果さんとす、との意。

【一八】比較の方法を誤り、本末を考へざれば、低きも、高しと見らる、となり。

（韓非子）

一三　圖を按して駿を索む。

一四　反掌の易きに出でゝ、泰山の安きに居ず。累卵の危きに乘じて、上天の難きに走らんと欲す。（枚乘）

一五　盆を戴きて天を望む。

一六　夏を以て爐を進め、冬を以て扇を奏む。（王充）

一七　夏至に長夜を欲し、天を指して魚を射る。

一八　方寸の木も、岑樓より高からしむべし。（孟子）

一九　股を割きて、腹に啖はしむ。（貞觀政要）

二〇　耳を掩ひて鈴を盜む。

西諺

一　鳥を捕へんと欲せば、決してこれを嚇すべからず。（英吉利）

二　火は、火を以て消すべきにあらず。（以太利）

【二】刑罰亂るゝ時は、民は、一日も、安心し得ず、となり。

【四】法令、器物は、みだりに變更すべきにあらず、となり。

【六】法令は、天下を治むる爲の道具にして、政治の根源にあらず、となり。

【七】法律を以て、人民を苦むれば、惡報必ず來る、となり。

【八】法律を濫用すること嚴酷なる者には、抵抗し難し、となり。

【ホウユウ】 朋友 〔參照〕（トモ）

【ホウリツ】 法律 〔參照〕（サイバン）（ホウリツカ）（ゼンとアク）（アク）

古句

一 法の生ずるや、以て仁義を輔く。今法を重んじて義を棄つ。是冠履を貴びて、頭足を忘るゝなり。（淮南子）

二 刑罰當らざれば、民、手足を措く所なし。

三 禮は、未だ然らざるの前に禁じ、法は、已に然るの後に施す。（史記）

四 利百ならざれば、法を變ぜず。功十ならざれば、器を易へず。（史記）

五 水濁れば、則ち魚喁し、令苛なれば、則ち民亂る。（韓詩外傳）

六 法令は治の具にして、治を制し、濁を清むるの源に非ず。（司馬遷）

七 夫れ法を以て天下に毒する者は、未だ反て其の身、及其の子孫に中らざるは有らず。（蘇軾）

八 夫れ法を持すること太だ急なる者は、其の鋒犯すべからず。其の勢乘ずべからず。（蘇軾）

西諺

一 童謠を纂めて國法を作れ。其の立法者の誰たるは、敢て問ふ所にあらず。（英吉利）

二 法網は蠅を捕ふれども、蜂をして横行せしむ。（英吉利）

三 無辜の一人を罰せんはより、寧ろ有罪の十人を赦せ。（英吉利）

四 法はこれを勵行せざれば、寧ろなきに若かず。（丁抹）

【ホウリツカ】 法律家 〔參照〕（サイバン）（ホウリツ）

西諺

五 最良の法律家は、最大の惡德者なり。（和蘭）

六 法律家の家屋は、愚人の頭腦を以て造らる。（佛蘭西）

七 法律家と軍人とは、惡魔の親友なり。（英吉利）

【ホコル】 誇 〔參照〕（タカブル）（ワザワイ）

【一】▲世間に流行するうたなり。これ、人情に基けるものなり。法律は、人情に基きて作れ、となり。

【二】法律は、その運用を誤れば、無勞力の施し、容易に得れども、世の害兒なるに暴にしてその束縛を逃れしむ、となり。

【三】なき者を爵するは、極めて重大なる過惡なるを言へり。

【五】惡人は、法律の網より逃れんとして、其の研究を怠らず。

【六】法律家は、愚人を相手にして、生活すとなり。

【七】法律家は、紛擾のあらんことを希ひ、軍人は、兵亂の起らんことを望む。

【ホシイママ】恣〔參照〕（キママ）（アンラク）

古句

一　顚越して恭ならず。（書經）

二　▲「欲度を敗り、縱禮を敗り」、以て戾を厥の躬に速ぐ。（書經）

【ホシガル】欲

古句

一　口、涎を流す。（八遷歌）

【ホソイ】細〔參照〕（コマカ）（チイサイ）

古句

一　絶えざること▲綫の如し。

二　絶えざること縷の如し。

三　絶えざること髮の如し。

【ホタル】螢〔參照〕（ナツ）（ヨル）（ムシ）

【一】行爲、分を越えて、長上の命令を輕んずるに甘ふ。

【二】▲慾望を恣にし、氣まゝの行をなして、禮儀にかゝはらぬなり。

【一】▲線に同じ。

古句

一　夕殿に螢飛んで、思悄然たり。（白居易）

二　▲「一聲の山鳥は、曙雲の外」。萬點の水螢は、秋草の中。（許渾）

三　螢火亂れ飛んで、秋已に近く、▲「辰星早く沒れ」て、夜初めて長し。（元稹）

古歌

一　澤水に、空なる星の映るかと、
　　見ゆるは夜半の、ほたるなりけり。（後撰集良經）

二　鳴くこゑも聞こえぬものゝ、悲しきは
　　忍びに燃ゆる、螢なりけり。（詞花集高遠）

三　物思へば澤の螢も、わが身より
　　あくがれ出づる、魂かとぞ見る。（後拾遺集和泉式部）

四　つゝめども隱れぬものは、夏蟲の

【二】▲雲井はるかに、郭公（ホト、ギス）の一聲の聞ゆる意。

【三】▲北斗星なり。夏間には、光輝暇く、秋に入れば、光輝散ず。

【四】▲螢のこと。

【ホドアイ】　程合

古句

一　過ぎたるは猶及ばざる如し。（論語）

身よりあまれる、思なりけり。（新古今集良經）

【ホドドギス】　郭公　〔參照〕（ナツ）（ウのハナ）（トリ）

古句

一　子規夜月に啼いて、空山に愁ふ。（李太白）

二　▲「一聲の山鳥は、曙雲の外」。萬點の水螢は、秋草の中。（許渾）

三　杜鵑血に啼いて、猿哀鳴す。（白居易）

四　岸の山吹咲き亂れ、八重たつ雲の絶間より、山時鳥の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。（謠曲大原御幸）

【一】▲時鳥よ、そなたの悲しげなる一聲も、我が思ふ君に、告げてくれ、との意。

【二】▲雲井はるかに、ほとゝぎすの一聲が聞こゆ、となり。

【三】▲人々は、郭公のこゑを聞きかれて、殘念がりあるは、寢て待つ故なるべし。

【四】▲郭公の鳴くを聞かんとして、山里に來てはあれど、一向に鳴かれば、來てあるかひもなし、となり。

【五】郭公の鳴くを聞かんとて、待ち居たる人は、その鳴くこゑの、餘りに遲く、きが故に、待ちくたびれて、寢てしまひ、初めより聞かんとはせずして寢れたる人は、曉に、思ひがけなく聞くこゑ、とならん、との意。

【六】郭公は、鳴きながら飛び行く鳥なれ

古歌

一　▲「一聲は君に告げなん、時鳥」、

二　我が如く物や悲しき、郭公、

時ぞともなく、よたゝ鳴くらん。（古今集敏行）

このさみだれは、暗にまよふと。（千載集上東門院）

三　▲「寢てのみや人は待つらん」、郭公、

もの思ふ宿に、聞かぬ夜ぞなき。（後拾遺集小辨）

四　▲「山里のかひこそ無けれ、」郭公、

みやこの人も、斯くやまつらん。（詞花集道命）

五　郭公、あかつきかけて鳴くこゑを、

待たぬ寢覺の、人や聞くらん。（詞花集伊家）

六　郭公、鳴きつる方をながむれば、

たゞ有明の、月ぞのこれる。（千載集實定）

七　常よりも睦じきかな、郭公、

▲「しての山路」の、ともとおもへば。（千載集鳥羽院）

ば、今鳴きたる方を見ても、其の影なし。

【七】▲死して、冥途に行く間にありといふ。假空の說なり。又、郭公は、冥途に通ふ鳥と言ひなされたり。

【一】風雨に身をさらして、勤勞する形容。

【二】他人の爲に骨折ることを、謙遜して言ふなり。

【四】死に至るまで、勉勵止まざるに言ふ。

【五】造作もなき骨折、の意。

【六】勞苦しての後の逸樂、憂苦しての上の快樂は、危險の患なし、となり。

八　昔思ふ艸のいほりの、夜の雨に
　　涙な添へそ、やまほとゝぎす。（新古今集後成）

九　ほのかにも鳴きわたるかな、郭公
　　み山を出づる、今朝の初こゑ。（拾遺集詠人不知）

【ホネヲリ】骨折〔參照〕（ハタラキ）（ロウドウ）（ベンキョウ）

古訓

一　霖雨に沐浴し、扶風に櫛る。（淮南子）

二　犬馬の勞を執る。

三　君子は心を勞し、小人は力を勞す。（國語）

四　俛として日に孳々たるあり。斃れて後に已む。（禮記）

五　一擧手一投足の勞のみ。（韓愈）

六　逸は、勞より出て、常に休く、樂は、憂に生じて厭くことなし。（明心寶鑑）

【八】有らん限りの精力を出すなり。

【一】高くかまへて、世の譏譽を、心にかけぬに喩ふ。

【一】▲社壇と稷壇とは、上古、支那の俗、帝王國を建つるには、必ず先この二壇を築き、土地の神と、穀の神とを祀りしなり。國亡びて、今は、只其の壇のあとのみ存す、と

七　勞して功なし。（管子）

八　全幅の精神を注ぐ。

【ホマレ】譽〔參照〕（メイヨ）

【ホマレとソシリ】譏譽〔參照〕（メイヨ）（ソシリ）

西諺

一　天月は、犬吠を顧みず。（英吉利）

【ホメル】賞〔參照〕（ショウとバツ）

【ホメルとバツ】賞罰〔參照〕（ショウとバツ）

【ホリ】濠〔參照〕（ミズ）（ウミ）（ナミ）

【ホロビル】亡〔參照〕（ノコルとホロビル）（オチブレル）（オトロエル）（アレル）

古訓

一　▲社稷墟となる。（淮南子）

二　大廈の將に顚らんとするは、一木の支ふる所にあらず。（文中子）

なり。

【二】國家の滅亡せんとするには、一忠臣の維持すべきにあらず、となり。

【三】▲河中渉るべき淺慮。△亡滅せんとする者は、他人に事を謀らず、となり。

【六】何もかも、一所に亡ぶるを言ふ。

【八】善惡共に、亡滅する意。

【一〇】▲遊興に耽りて、歸ることを忘るゝなり。△酒宴に耽り、安逸を貪る等の大害の原因は、美人のまよはしなり。△呉王の築きし所。△桀の國都。帝王たる者、民の疾苦を顧ずして、金殿玉樓などを築けば、遂に亡滅を免れず、となり。

【一二】▲女の、男をしのぐ意。

【一三】強剛の者の亡びんとするには、必ず亂暴を逞くす、となり。

三　迷ふ者は路を問はず。溺るゝ者は遂を問はず。「亡人は獨を好む」。（荀子）

四　天の國を亡ぼすには、其の禍敗、必ず智の及ばざる所に出づ。（蘇軾）

五　湮滅して見れず。（司馬遷）

六　玉石、同じく碎く。（袁宏）

七　亡滅して救はれず。壞亂して收められず。（韓愈）

八　玉石俱に焚く。（書經）

九　身を殺し、家を亡ぼし、世を絶ち、後を滅して、功名立たず。

一〇　由來流連は、多く國を喪ふ。「宴安の鴆毒は、奢惑に因る」。（蘇軾）

一一　强吳滅びて荆棘あり。姑蘇臺の露瀼々たり。暴秦衰へて虎狼なし。咸陽宮の煙片々たり。（朗詠集源順）

一二　▲「牝鷄の晨する」は、惟家の索くるなり。（書經）

一三　長木の斃るゝ、標たざるなく、國狗の斃ふ、噬まざるなし。（左傳）

【一四】人の、滅亡せんとするには、一時、その勢を增すことあるに喩ふ。

【一五】▲銅製の駱駝の型。支那にては、これを宮城門外に飾る、といふ。

【一七】▲權威を弄する者なり。

【一】▲日に千里を走る馬。△のろき馬。×十日も、やすまずに乘るなり。

【二】▲衆人に連れて、退退するなり。

【三】凡人は、大人物の心中を知ること能はず、となり。

一四　燈火滅せんとして、光を增す。

一五　▲銅駝、荆棘に埋る。

一六　驕る者は久しからず。偏に風前の燈火の如し。（平家物語）

一七　▲攫拏は亡び、默々は存し、位極る者は高く危く、自ら守る者は身全し。（楊雄）

【ボン】本〔參照〕（ショモツ）

【ホンキ】本氣〔參照〕（ネッシン）（イッシン）（ベンキョウ）

【ボンニン】凡人〔參照〕（ショウジン）（オロガ）

古句

一　▲驥は、一日にして千里す。△駑馬も十駕すれば、亦これに及ぶ。（荀子）

二　毀なく譽なく、▲「旅進旅退」し、位を竊んで祿を苟し、員に備りて身を全うす。（王禹偁）

三　燕雀、豈鴻鵠の志を知らんや。（史記）

【モンバツ】門閥〔参照〕（イエガラ）

【ホンブン】本分〔参照〕（シュギ）（ブンゲン）（ミブン）

古句

一 ▲漆者は斲かず。△鑿者は剉らず。（淮南子）

二 庖人庖を治めずと雖も、▲尸祝樽俎を越えてこれに代らず。（莊子）

三 君となりては惠、臣となりては忠、父となりては慈、子となりては順、この四者は人の大節なり。（孔安國）

四 歩を邯鄲に學ぶ。

五 行を邯鄲に學ぶ。（漢書）

六 君君たらずとも、臣臣たらずんばあるべからず。（孔安國）

七 芝蘭は深林に生ず。人無きを以て芳しからざらんや。君子、德を修めて身を立つ。困窮の爲に節を改めず。（孔子家語）

八 君辱めらるれば、臣死す。（國語）

【一】▲ぬり物師。△（のみ）にて、木に、孔をほる者。各、其の本分を守り、業を專門にする意。

【二】▲神主のこと。△神前の供物なり。

【四】莊子中の故事。他人の長所を學ばんとして、己の本分を忘るゝに喩ふ。

【六】臣たる者は、其の君の、德の有無にかゝはらず、臣たるの本分をつくすべし、となり。

古歌

一 「年を經て」、深山がくれの郭公、
　　きく人もなき、音をのみぞ鳴く。（拾遺集實方）

二 大堰川、かへらぬ水に影見えて、
　　今年も咲ける、山ざくらかな。（桂園一枝景樹）

【ボンヤリ】漠然〔参照〕（フチュウイ）（ユダン）

麻の部

【マイ】舞〔参照〕（ウタ）（オンガク）

古句

一 皓齒歌ひ、細腰舞ふ。（李長吉）

二 舞殿の冷袖は、風雨凄々たり。（杜牧之）

三 櫻の花をかざして、青海波を舞ひ出づれば、露に媚びたる花の姿、風に翻る舞の袖、地を照らし、天も輝くばかりなり。（平家物語）

【一】▲多く、年月を經過するなり。（鳴く）にかゝる句なり。

【二】紐の柚をひるがへして舞ふ音は、風雨の、さら〳〵とそゝぐに似たり、となり。

【一】美人の歌舞する形容。

【五】▲高尚なる音樂の調べにて、心の、りんと改まる意。△上に同じき意。×音頭を取る場の笛。即、音樂の方の相圖をする笛、ⓒよきにほひなり。（に）（おしろひ）みらかすなり。に化粧するなり。

【六】△（神）にかゝる枕詞。△心の底まで感動する意。

【七】▲月界中の、天人の衣のこと。△月界中の天人を指す。×舞曲の名。

四　樂屋の幕には、纈纈を張り、天蓋の幕は、金襴なれば、片々と風に散滿して、炎を揚ぐるに異ならず。（太平記）

五　▲「律雅の調冷しく」、△「颯聲耳を澄ます」所に、×「音取の笛」を吹き立てたれば、ⓒ「匂ひ薫蘭を凝らし」、「粧ひ紅粉を盡したる」美麗の童、練り出したり。（太平記）

六　▲「千早ぶる」神樂の鼓こゑ澄みて、羅綾の袂を飜しひるがへす、舞樂の秘曲も度重りて、△「感應肝に銘ず」。（謠曲嵐山）

七　▲「月宮殿の白衣の袂」の、色々妙なる花の袖、秋は時雨の紅葉の羽袖、多はさえ行く雪の袂を、飜す衣も薄紫の、△「雲の上人」の舞樂の聲々に、×「電裳羽衣の曲」を爲す。（謠曲鵜飼）

八　天つ御空の綠の衣。または春立つ霞の衣。色香も妙なり乙女の裳裾。（謠曲羽衣）

古歌

【一】▲天つ乙女の舞姿のあまりに面白ければ、今暫く止めて見たし、となり。

【二】▲鳥の名。洪水の前兆と言ふ。

【三】國君、劍難に遇ふ前兆と言ふ。

【三】男子を生む前兆。

【三】有道の君子、不遇に終り、邪曲の者、却りて富貴を得、との意。

一　天津風、くもの通路吹きとぢよ、▲「乙女の姿、しばし止めむ」。（古今集遍照）

【マエジラセ】前兆

古句

一　▲商羊鼓舞す。（孔子家語）

二　白虹、日を貫く。（史記）

三　熊羆、夢に入る。

四　山雨來らんとして、風樓に滿つ。（許渾）

【マガルとナオイ】曲直　〔參照〕（マスグ）

古句

一　形枉かれば、則ち影曲り、直ければ影正し。（列子）

二　影は、曲物の爲に直からず。響は、清音の爲に濁らず。（淮南子）

三　直絃の如きは、道邊に死し、曲鉤の如きは、侯に封ぜらる。（後漢書）

【一】孫楚の故事。負け惜しみの喩とす。

【二】▲勢強き者は、時として、天理に背きて、意を逆することあり。となり。

【三】弱者の、強者の爲に、凌かるゝに喩ふ。

【マケオシミ】負惜〔参照〕（ゴウジョウ）

古句

一　石に嗽ぎ、流に枕す。

【アケギライ】負嫌〔参照〕（マケオシミ）

【マケルこカツ】勝負〔参照〕（ショウリ）

古句

一　▲「人衆き時は、天に勝つ」。天定りては、亦人に勝つ。（史記）

二　松柏の下には、其の草殖せず。（左傳）

三　高山の巓には美木なく、大樹の下には美草なし。（說苑）

四　萬の遊にも、勝負を好む人は、勝ちて興あらん爲なり。己が藝の優りたることを喜ぶは、負けて興なく覺ゆべきこと、又知られたり。人に本意なく思はせて、我が心を慰まんこと、德に背けり。（徒然草）

【マゴコロ】眞心〔参照〕（マコト）（ショウジキ）

【一】▲物事を傷害するなり。

【二】僞る者は、巧なりとも、いつしか顯るゝの期あるべし。誠なる者は、拙なりとも、其の誠たるを失はず。

【四】互に信用して、まごゝろを打明くるなり。

【五】▲禮儀の、十分に備はる意。

【六】▲智情意の三者を、總括していふ名なり。▲意志なして、良心の示す所に從はしむるなり。

【七】至誠の心を以て、物を判別すれば、その妙神に通ず、となり。

【八】▲鏡に映する所、美なるも、惡なる

【マゴツク】迷付〔参照〕（チュウチョ）

【マコト】誠。信〔参照〕（ショウジキ）（シンヨウ）

古句

一　信を好みて學を好まざれば、其の蔽や賊。（論語）

二　巧僞も、拙誠に若かず。（說苑）

三　內に誠あれば、外に形はる。（大學）

四　肝膽、相照らす。

五　▲「禮豊かなれ」ども、以て愛を效すに足らず。誠心、以て遠きを懷くべし。（淮南子）

六　其の心を正しうせんと欲する者は、先其の▲「意を誠にす」。（大學）

七　至誠、神の如し。

八　鏡は清明を以て、▲「美惡自ら服し」衡は平かにして私なく、輕重自ら得。（說苑）

も、鏡を咎めずして、それを眞と信ずるなり。

【九】極めて信實なる者の形容。

【一〇】鬼神を祭るに、誠と敬とだにあれば、二種の供物にても、鬼神は、喜びて受くべし、となり。

【一二】▲水源に向ひて、逆流するなり▲名譽を全うし難き意。

【一】むき出しの信實には味なければ人には多少の修飾を要すとなり。

九　信、豚魚に及ぶ。（易經）

一〇　二簋、以て享すべし。（易經）

一一　利に臨みて後に、以て信を見る可く、財に臨みて後に、以て仁を見るべし。（鶡冠子）

一二　水▲「源」に倍け」ば、則ち川竭き、人、信に倍けば、則ち▲「名達せず」。（說苑）

一三　誠は天の道なり。誠にするは人の道なり。（中庸）

一四　正直を好んで回ならざれ。精誠は神明に通ず。（曹大家）

西諺

一　信實も、風味あらしむるには、多少の調理を要す。（丁抹）

二　信實も、非難を受くることなきにあらず。然れども、決して恥辱を受くることなし。（英吉利）

古歌

【一】心中には、一點邪惡の念をもたず、となり。

【二】友の情の有無は、己の逆境に立てる時にあらざれば、知り難し、との意にも例しつべし。

【一】偽を言ふものは、その信ぜられざらんことを恐れて、つとめて、これを辯明す。

【一】交りの、極めて親密なるに喩ふ。

一　天津空、てる日の下にありながら、▲「曇る心の、隈を持ためや」。（風雅集伏見天皇）

二　さかりをば訪ふ人多し、散る花の跡をとふこそ、情ありけれ。（正覺）

【マコトこイツワリ】　眞僞　〔參照〕（マコト）（イツワリ）（アザムク）

西諺

一　眞實の答は簡單なり。虛僞は反覆す。（日耳曼）

【マサル】　勝　〔參照〕（スグレル）

【マジワリ】　交　〔參照〕（トモ）

古句

一　生きては志を同じうし、死しては傳を同じうす。（邵氏錄）

二　己に如かざるものを、友とすること勿れ。（論語）

三　情好、日に密なり。

【四】▲鋭利にして、事に當りて、折れくじくることなし、となり。△極めて睦しき間の忠告は、愛すべく、喜ぶべし、となり。

【五】意氣投合せざれば交りて白頭に至るも、尚新交の如く、意氣投合すれば、道途に相逢ふ者も、舊交の如し、となり。

【六】陳重と甯嬰と、親交の密なりし故事。

【八】▲貧賤の間に處して、艱難を共にせし妻のこと。

【九】▲懇篤の樣の形容。△相勵ます樣の形容。×和樂の樣の形容。

【一二】▲（あまさけ）なり。一夜にして成る。濃厚なれども、腥じ易し。

【一三】▲齊國の、管仲と鮑叔との交情の、極めて親密なりし故事。

【一六】▲勢力あるを當てにして、交るなり。

【一七】これ、三益友といふ。▲信なり。

【一八】▲芝蘭は、其の植花、芳香を放つ物。これをかざりある室は、馥郁として、心を喜ばしむべし。△花魚を商ふ店は、惡臭紛ふべ紛として、腐臭紛として、

四　二人心を同じうすれば、▲「其の利金を斷つ」。△「同心の言は、其の臭蘭の如し」。（易經繫辭上傳）

五　白頭も新の如く、傾蓋も故の如し。（史記）

六　膠漆は自ら堅しと雖も、陳と雷とに如かず。（後漢書）

七　交り、管に膠漆のみならず。

八　貧賤の交りは、忘るべからず。▲「糟糠の妻」は、堂より下さず。（後漢書）

九　朋友には▲切々偲々たり。兄弟には怡々たり。（論語）

一〇　君子は、淡くして以て親しみ、小人は、甘くして以て絶つ。彼の故なくして合ぶ者は、則ち故無くして離る。（莊子）

一一　君子、敬して失なく、人に與して恭にして禮あらば、四海の内皆兄弟たるべし。（論語）

一二　君子の交りは水の如く、小人の交りは▲醴の如し。君子は、淡くして以て成り、小人は、甘くして以て壞る。（禮記）

一三　君見ずや、▲「管鮑貧時の交り」を。此の道、今人は棄てゝ土の如し。（杜甫）

一四　世人、交りを結ぶに黃金を以てす。黃金多からざれば、交り深からず。（張謂）

一五　君子の人に交るや、歡んで媟れず。和して同せず。好みして佞詐せず。學んで虛行せず。親しみ易くして媚び難く、恕すること多くして、非とすること寡し。故に交を絶つことなく、朋に畔くこと無し。（徐偉長）

一六　▲「勢」を以て交る」者は、勢傾けば則ち絶え、利を以て交る者は、利窮すれば則ち散ず。（中說）

一七　直を友とし、▲諒を友とし、多聞を友とす。（論語）

一八　善人と居るは、▲「芝蘭の室」に入るが如く、久しからずして其の香を聞かず。不善人と居るは、△「鮑魚の肆」に入るが如く、久しくして其の臭を聞かず。（孔子家語）

【一九】▲言深入りして、皮肉を言ふなり。

【二〇】交情の深淺、眞偽は艱難貧賤の際に於いて、明かに知るを得、となり。

【一】人は、其の交る友の感化を受くるを言へり。

一九　交り淺くして、▲「言深き者」は怠なり。（後漢書）

二〇　一死一生、乃ち交情を知り、一貧一富、乃ち交態を知り、一貴一賤、交情乃ち見はる。（漢書）

二一　さしたる事なくて、人の許行くことは、善からぬことなり。用ありて行きたりとも、其の事はてなば、疾く歸るべし。（徒然草）

西諺

一　大人も小兒と交れば、永く小兒たるべく、小兒も大人と交れば、忽にして大人たるべし。（英吉利）

【マスグ】眞直〔參照〕（マガルとナオイ）

古句

一　大直は曲るが如く、大巧は拙きが如く、大辯は訥なるが如し。（老子）

【マズシイ】貧〔參照〕（アレヤ）（シャッキン）

古句

【一】▲帝王の政を助くること。良き大臣のこと。

【三】貧の、極端に達する窓。

【五】荒れたる屋敷の形容。

【七】▲愚鈍の者と、（つんぼ）。△（おし）なり。共に、（かたわ）の類を言へり。

【八】生命の貴きを知れば、富貴と雖も、淫樂に耽ることなく、貧賤と雖も、外形のやつれきに至らず。

【九】錢の、皆無なる形容。

【一〇】外形により判斷する者は、其の眞實を誤り易しとなり。

一　家貧しければ良妻を思ひ、國亂るれば良相を思ふ。（史記）

二　貧は士の常なり。死は人の終なり。（列子）

三　貧、骨に到る。（杜甫）

四　富貴なれば他人も合し、貧賤なれば親戚も離る。（曹植）

五　梟は松桂の枝に鳴き、狐は蘭菊の叢に藏る。（白居易）

六　富貴なれば驕奢を生じ、驕奢なれば淫亂を生じ、淫亂なれば貧賤を生じ、貧賤なれば勤儉を生じ、勤儉なれば富貴を生ず。（寶鑑）

七　▲痴聾瘖瘂は、家富豪なり。智慧聰明は、却て貧を受く。（列子）

八　能く生を尊ぶ者は、富貴と雖も、以て身を傷らず。貧賤と雖も。以て形を累はさず。（莊子）

九　囊中、一物なし。

一〇　馬を相しては、これを瘦に失し、人を相しては、これを貧に失す。（史記）

【一一】▲智力の活動せぬなり。

【一二】極貧にして、粗食粗衣にも、尙事缺く意。

【一四】赤貧にして、炊くに物なき形容。

【一五】運命の何たるを知り、分に安ずるの念あれば、貧賤の中にも、心の樂を失はず、となり。

【一六】▲（よもぎ）の屬。荒艸なり。貧家の形容。

【一七】▲道德の、身に備はらざるを憂ふるなり。

【一八】來訪者もなく、物さびしき形容。

【一一】貧窮も、天命なるを知りて、心の和樂を失はず。富裕も跨るに足らざるを知りて、禮儀を慎むなり。

一一　人貧しければ「▲智短く」、馬疲るれば毛長し。（朝野僉載）

一二　糠豆も贍らず、葅褐も完からず。（漢書）

一三　赤貧洗ふが如し。

一四　甑中、塵を生ず。（後漢書）

一五　疏食を飯ひて水を飲み、肱を曲げてこれを枕とするも、樂亦其の中にあり。（論語）

一六　▲蓬蒿、室に滿つ。

一七　▲「道を憂ひ」て、貧を憂へず。（陶潛）

一八　門前、雀羅を設くべし。（漢書）

一九　任重くして道遠き者は、地を擇ばずして息ひ、家貧しくして親老いたる者は、官を擇ばずして仕ふ。（韓詩外傳）

二〇　飽暖は淫欲を生じ、飢寒は善心を發す。（事林廣記）

二一　貧にして樂み、富みて禮を知る。（論語）

【二二】困窮すれば、刑罰の長るべきを考ふるに暇あらずして、惡を行ふに至るとなり。

【二三】民の、惡事を行ふは、好んでこれを行ふにあらず。貧窮して、止むことを得ざればなり。

【二五】▲方丈の室、といふが如し。小さやかなる室なり。

【二六】朝夕、飲食の粗を極むることの形容。

【二七】貧極りて、室內、一物なき形容。

【二八】赤貧、父母を養ふこと難く、丈、祖先を祭り難き意。

【二九】▲室內に人氣なく、ひつそりとして、風も吹き入り、日もさし込むなり。△身にはつゞれをまとひ、飲食に事かくことも、度々なり、となり。

【三二】▲飲食を容る、△雜艸の意器物。×◎共に、孔門の

二二　疲馬は鞭箠を畏れず、弊民は刑法を畏れず。（鹽鐵論）

二三　民貧しければ、則ち姦邪生ず。（漢書）

二四　禮義は富足に生じ、盜竊は貧窮に起る。（潛夫論）

二五　▲「環堵の室」、これに茨くに生茅を以てす。（淮南子）

二六　朝に薺し、暮に鹽す。（韓愈）

二七　室は、懸磬の如し。（左傳）

二八　生きては以て養を爲すなく、死しては以て禮を爲すなし。（禮記）

二九　▲「環堵蕭然として、風日を蔽はず」、△「短褐穿結して、簞瓢屢空し」。（陶潛）

三〇　君見ずや、今人交態の薄きを。黃金用ひ盡せば、還疎索たり。（高適）

三一　一たびに千金を擲つも、渾べて是膳なり。家には四壁無けれども、貧を知らず。（吳象之）

三二　▲瓢簞屢空し、草顏淵が巷に滋し。×黎藿深く鎖せり、雨原憲が樞

高弟。家貧にして、道を樂みし人なり。

【三五】▲衣の裾は、ざらざらに裂けて、下りあるなり。

【三七】▲（あかざ）と（豆の葉）。共に、支那賤民の食ふ所。

【三八】人の欲望の最大なるは、生存の欲と、色欲となり。此の欲望を達せんが爲めには、如何なる惡をも、犯すことあり。

【三九】衣食に窮する者は、其の美醜を擇ぶに暇あらず、となり。

【四〇】人民困窮の餘り、よるべなき者は、生活し難し、となり。

三三　僮僕盡く飢ゑて、筋力少し。（張毅）

三四　冬暖かなれども、兒は寒に號び、年豊かなれども、妻は饑に啼く。（韓愈）

三五　床床屋漏りて、乾處なく、▲「兩脚は麻の如くにして、未だ斷絶せず」。（杜甫）

三六　農は耕收せずして、財粟殫亡す。（韓愈）

三七　彼の藜藿の食に甘んじ、是の蓬蒿の廬を樂む。（阮籍）

三八　飲食男女は、人の大慾存し、死亡貧苦は、人の大惡存す。（禮記）

三九　糟糠にだにも飽かざる者は、梁肉を務めず。短褐だに全からざる者は、文繡を待たず。（韓非子）

四〇　百姓靡蔽し、孤寡老弱、相養ふこと能はず。（孝經）

四一　腹饑ゑて食を得ず。膚寒うして衣を得ず。（屈錯）

【四三】家貧しくして、室内には、一物もなき形容。

【四四】夜具布團の垢じみて、ひやひやする程の貧困なるに、寢株の惡しき兒の爲に、其の裏を踏み裂かれて、形さへ全からず、となり。

【四五】交際上、金錢を以ての禮儀にあづからずして、さしつかへなし、となり。

【二】人、貧極れば、刑罰の、恐るべきをも忘るゝに至る。

四二　民貧しければ、則ち姦邪生ず。貧は不足に生じ、不足は農せざるに生ず。（鼂錯）

四三　室は、徒四壁のみ。（漢書）

四四　布衾多年、鐵より冷かなり。嬌兒惡臥して、裏を踏んで裂く。（杜甫）

四五　貧しき者は、▲「貨財を以て禮と爲さず」。老いたる者は、筋力を以て禮と爲さず。（禮記）

西諺

一　無錢者は、たとひ健康なりとも、半病人に等し。（以太利）

二　無錢者には、恐ろしき者なし。（日耳曼）

三　無錢者は、翼なき鳥の如し。飛べども、忽ち地に落ちて死す。（ルーマニヤ）

四　無錢者には朋友なく、又信用なし。（英吉利）

五　人に金なきは、船に帆なきが如し。（英吉利）

六　貧窮は健康の母なり。（以太利）

七　貧窮は、藝術の母なり。（以太利）

八　貧困は、懶惰の産める娘なり。（日耳曼）

九　貧に二種あり。曰く神の貧、曰く惡魔の貧、是なり。前者は天命、後者は罪惡より來る。（英吉利）

一〇　錦を著て地獄に赴かんよりは、襤褸を纒ひて天國に行くに若かず。（英吉利）

一一　貧人は、愚人の中に數へらる。（英吉利）

一二　時冬なれば五穀なく、人貧なれば朋友なし。（西班牙）

一三　自助の決心だにあれば、貧窮も深く恥づるに足らず。（英吉利）

一四　貧もこれに安んずれば、富めるに等し。（和蘭）

古歌

一　「ひとへなる、人もぞあると世を知れば」、

薄き衾も、冴えぬ夜半かな。（拾塵集政弘）

【一〇】不義にして富貴ならんよりは、正義を守りて、貧賤に甘するが優れり、となり。

【一一】▲世上には、寒中にも、單衣一枚にて過ごす者あるを知れば、との意。

【マゼル】混

古句

一　玉石混淆す。

二　玉石、匱を同じくす。

【マチガイ】間違　〔參照〕（アヤマリ）（アヤマチ）

古句

一　之を毫釐に失すれば、差ふに千里を以てす。（漢書）

二　毫釐の差は、千里の謬を致す。

【マチウケ】待受　〔參照〕（キャク）（モテナシ）（オウセツ）（マチドウイ）

古句

一　▲逸を以て勞を待つ。（孫子）

【マチドウイ】待遠　〔參照〕（キャク）（モテナシ）

【一】善惡を、一所に混合するなり。

【二】意、上に同じ。

【一】根本に於ての微細のあやまりは、其の末に至れば、極めて大なるあやまりとなる、となり。

【二】意、上に同じ。

【一】▲休息して、疲を去るなり。

【一】▲黄河の水は、百年にして、一度清むと言へり。はかなき辞命を以て、百年の後に望を、無益のことぞ、となり。

【二】燕の太子丹の故事。得難きを望む。

【四】首を延べて、望みに喩ふ。

【五】▲群魚の、水面に浮ぶ様の形容。待つなり。

【六】▲九萬月なり。暮ひ待つ心の、切なる意なり。

【七】黄河の水は、百年に一度清む、と言へり。遥ひ難きを望む。を懐くに喩ふ。

古句

一 ▲河清を俟つも、人壽幾何ぞ。（周詩）

二 烏の頭白く、馬の角を生ずるを待つ。

三 門に倚りて望む。（戰國策）

四 頸を引いて望む。（孟子）

五 頸を延べ踵を擧げて、▲喁々然として皆風に鄉ふ。（司馬相如）

六 一日三秋の思あり。（詩經）

七 黄河の清を俟つ。

古歌

一 久しくもなりにける哉、住の江の
まつは苦しき、物にぞありける。（古今集讀人不知）

二 大空を眺めぞ暮す、吹く風の
音はすれども、目にし見ねば。（拾遺集躬恒）

【一】▲△共に、伏兵のこと。

【二】▲松の字を、分解して言へるなり。△雪にたわまぬ松の緑をしれば、千年の齢を保つべき勢力も著し、との意。

【四】▲春夏秋冬の季なり。△緑の色なる形容。

【五】松は、千年の齢を保つと雖も、遂には枯朽を免れず。（あさがほ）は、一朝にしてしぼめども、其の艶美、亦愛すべし。

【七】▲春夏秋冬共に、緑の葉色を改めずして、千年の長壽を保つ、となり。

【マチブセ】待伏〔参照〕（イクサ）（ハカリゴト）（ヘイホウ）

古句

一 鳥起つ者は伏なり。獸駭く者は覆なり。（孫子）

【マツ】待〔参照〕（マチドウイ）

【マツ】松〔参照〕（キ）（ナガメ）

一 ▲十八公の榮は、霜後に露はれ、「一千年の色は、雪中に深し」。（朗詠集源頊）

二 勁松は、歳寒に彰はる。（文選）

三 歳寒くして、松柏の、凋に後るゝを知る。（論語）

四 松柏の心有るや、▲四時を貫いて、「柯を改め葉を易へず」。（蘆肥）

五 松樹千年、終にこれ朽ち、槿花一日、自ら榮たり。（白樂天）

六 冬嶺に孤松秀づ。（陶潛）

七 松柏の山林に生ずるや、其の始めは蓬蒿に困み、牛羊に厄せらるれど

も、其の終りは▲「四時を貫き、千歳を閲して改めず」。（蘇軾）

八　玄冬素雪の寒さにも、▲「松は君子の德を彰す」。（朗詠集源順）

九　松は萬木に勝れて、▲「十八公の裝」、千秋の綠をなして、▲「古今の色を見ず」。（謠曲高砂）

一〇　嶺松巍々として、▲「風常樂の夢を破る」。（謠曲山姥）

一一　澗底の松の風、一聲の秋を催して、▲「上求菩提の機を見す」。（謠曲高砂）

古歌

一　雪降りて、歳の暮れぬる時にこそ、
　　遂に▲「もみぢぬ松」も見えけれ。（古今集詠人不知）

二　蔭にとて立ち隱るれば、唐衣
　　ぬれぬ雨ふる、まつのこゑかな。（新古今集貫之）

古句

【マツリ】祭〔參照〕（カミ）（テラ）

【八】▲松の、綠の葉色を變ぜざるを、君子の節操を保つに比して、言へるなり。

【九】▲△を見よ。△いつも、色かへぬ意。

【一〇】▲松に、風の吹き當れば、人の眠をさます、となり。

【一一】▲向上の心をもちて、修養を積みて、さとりを開かんとする感動を、人に與ふ、となり。

【一】▲紅葉せぬ松の意。

【二】松の木陰に立よれば、梢に、風の吹き當る音の、雨の降りそゝぐが如くに聞こゆるものなり。

一　二簋、以て享すべし。（易經）

二　祭は、豐年にも奢らず、凶年にも儉せず。（禮記）

三　跽いて、辭を陳じて酒を薦む。「魂髣髴として來り」享けよ。（韓愈）

四　▲「奠を布き」、觴を傾け、哭して天涯を望めば、天地爲に愁ひ、草木凄悲す。李華）

【マツリゴト】政〔參照〕（テンシ）（キミとタミ）

古句

一　一張一弛は、文武の道なり。

二　政簡ならず易ならざれば、民近づくあらず。平易にして民を近づくれば、民必ずこれに歸す。（史記）

三　水濁れば、則ち▲「魚喁し」、令苛なれば、則ち民亂る。韓詩外傳）

四　水濁れば、則ち▲「掉尾の魚」なく、政苛なれば、則ち逸樂の士なし。（鄧析子）

【一】鬼神を祭るに、數と誠とにあれば、二種の供物のみにても、鬼神はこれをうくべし、となり。

【二】神を祭るの式は、歲の豐凶にかゝはりて、厚薄を設けず、となり。

【三】▲靈魂の、ぼんやりと、おもかげに立ちあらはれて、來るなり。

【四】▲供物を並ぶるなり。

【一】周の文王武王は、人民を使役し、又、これを休むるに、皆時をはかりて行ひしか言へり。

【三】▲魚の、水面に浮びて、泡をふくなり。

【四】▲魚に勞あれば、よく、その尾をふるふなり。

【五】▲其の下に召使はる者共をして、恩に感ぜしむる程の慈仁の心をもつ者を言へるなり。

【六】▲民を治むるなり。△己が、政事に對する勉强に、不足なきかと顧るなり。

【七】恩威の、四方に及ぶを言へり。

【八】刑罰を行ふべき罪人をゆるして、牢屋の内を、空虛にするなり。

【九】▲無制限に、租稅をとるなり。

【一〇】▲よるべなき者、或は貧窮の者に生活の料を與ふるなり。△人民のこと。

【一一】▲くだ〳〵しき法文。△民の害。×名家の、亡びたる功臣の家の、絶えたるを立つるなり。

【一二】▲租稅を、みだりに徵收するなり。△妄りに、法令の改廢を行ふなり。

【一三】政令嚴に過ぐれば、民怨遂に破裂す、となり。

【一四】小魚を煮るには、鱗腸を去らず。小刀細工せぬ愚なり。

【一六】民の言論を束縛することの、大害あるに喩ふ。

【一一】聽じき同志の打よりて、互に語り合ふ夜は、愉快極り、なければ、立去り難し、となり。

【一一】人、學ばざれば、無智にして、己の足らざる所を知らず。人に教へて見ざれば、我が學問の、粗漏なるを知らざるなり。▲身に、反省工夫がするなり。△人に教ふるも、人より學ぶも、共に、我が智をみがき、學業を進歩せしむ、となり。

五　▲「僮僕其の恩を稱す」るは、以て政に從はしむべし。（文中子）

六　▲「治を爲すは」多言に在らず。△「力行如何にと顧る」のみ。（史記）

七　澤南治して、威北暢す。

八　囹圄を虛しくして、刑戮を免す。（賈誼）

九　賞罰當らず、▲「賦斂度無し」。（賈誼）

一〇　倉廩を發きて財幣を散じ、以て▲「弧獨窮困の士を賑はし」、賦を輕くし事を少くして、以て百姓の急を佐く。（賈誼）

一一　▲煩文を滌ひ、△民疾を除き、×「亡を存し」、「絶を繼ぎ」以て天意に應ず。

一二　急政暴虐にして、▲「賦斂時ならず」。△「朝に令して、暮に改む」。（鼂錯）

一三　大絃急なれば、小絃絕ゆ。（後漢書）

一四　大國を治むるには、小鮮を煮るが如くす。（老子）

一五　民を視ること、子の如し。

一六　民の口を防ぐは、水を防ぐよりも甚し。（史記）

一七　遠きを慕み、近きを撫で給ふ御惠、雨の條よりも繁し。（裕鏡）

【マドイ】　團欒　〔參照〕（カヲイ）

古歌

一　思ふどちまとゐせる夜は、唐錦
たゝまくをしき、物にぞありける。（古今集讀人不知）

【マドウ】　惑　〔參照〕（マヨウ）

【マナブ】　學　〔參照〕（ガクモン）（オシエ）（マネル）

古歌

一　學んで、然る後に足らざるを知り、教へて、然る後に困しむを知る。
足らざるを知りて、然る後に能く「自ら反る」なり。困しむを知りて、
然る後に能く自ら强むるなり。故に「教學相長ず」とは曰ふ。（禮記）

【マヌケ】　間抜　〔參照〕（オロカ）（フチュウイ）（ユダン）

古句

【二】桀は、夏の暴君。堯は、聖德の天子。
【三】諸侯の、天子に似るに言ふ。
【四】他人の爲すかは、これをとがめて、己は、それにならふなり。
【五】莊子中の故事。他人長所をまねんとして、己の本分を忘るゝに言ふ。▲歩行なり。▲支那の地名。其國人、歩行をよくす。
【六】【七】蒐、上に同じ。鍛冶の子は、親の業を所を眞似て、獸皮を集めて、弓を作る者の子は、親の弓を製し、弓を作る習ひて、柔を作る、軟木をためとなり。
【八】模範とする所高尚なれば、成らずとなれども、猶取るべき所あり。粗野なる時は、亡の下劣學びて成らざる時は、亡の下劣なるべ哺爽すべそとなり

一　寶の山に入りて、手を空しくして歸る。

二　宅を徙して、其の妻を忘る。（資治通鑑）

【マネル】　眞似　（參照）（ウワベカザリ）（イツワリ）

古句

一　上に好む者あれば、下にも、必ずこれより甚しき者あり。（孟子）

二　傑を以て堯を詐る。（荀子）

三　麋にして虎皮を蒙る。（史記）

四　尤めてこれに效ふ。（左傳）

五　▲歩を▲邯鄲に學ぶ。

六　行を邯鄲に學ぶ。（漢書）

七　良冶の子は、必ず裘を爲ることを學び、良弓の子は、必ず箕を爲ることを學ぶ。（禮記）

八　鵠を刻みて成らざるも、尚鶩に類す。虎を畫きて作らざれば、反りて狗に類す。（後漢書）

九　禹行して舜趨す。（荀子）

一〇　樣によりて葫蘆を畫く。（東軒筆錄）

一一　▲矮子の戲を見るが如く、人の好しと道ふを見て、他また好しと道ふ。（朱子語類）

一二　其の心を得ずして、其の跡を逐ふ。（韓愈）

一三　假にも愚を學ぶべからず。狂人の眞似とて、大路を走れば、即ち狂人なり。惡人の眞似とて、人を殺せば、惡人なり。▲驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢を學ばんを、賢と言ふべし。（徒然草）

【ママナラヌ】　不儘　（參照）（ウンメイ）（ハカナイ）（ハガユイ）

古句

一　池魚籠鳥の、江湖山藪の思あるが如し。（文選）

【九】聖人の德を修めんとはせずして、徒に、其の外形のみ眞似るなり。
【一〇】徒に、前人の爲す所に倣ひて、新の發明なきを言ふ。
【一一】▲（せむし）なり。▲侏儒なり。身體矮小なる者は、人後にありて見えざれば、前人の評かと聞きて、これに從ふなり。
【一二】其の精神を學ばずして、得んとはせず、徒に、外形を眞似るなり。
【一三】▲日に、千里を走る馬なり。人並すぐれたる人物に、譬へたり。▲舜帝に聖人なり。

【二】▲日光なり。浮雲は、日を掩ひ、秋風は、闘の花を破り、二者を全からしめず、其の美を全からしめず、小人の爲に陷れらるゝに喩ふ。

【四】求めずして、意外の名譽を得ることあり。完全を求めて、却りて、世の非難を招くことあり。

【五】力大なるも、及ばざれば、如何ともせん方なし、となり。

【七】外部に在る大敵を、挫く力ありても、内部に在る小敵を、平け難きことあるに昔ふ。

【八】▲きゝめのなきなり。無關係なる意。

【一〇】▲美人のこと。▲魏婦の意。

二　▲扶桑、豈影なからんや。浮雲掩ひて忽ちに昏し。叢蘭、豈芳しからざらんや。秋風吹きて先敗る。（兼明親王）

三　樹靜かならんと欲すれば、風止まず。子養はんと欲すれば、親待たず。（韓詩外傳）

四　虞らざるの譽あり。全きを求むるの毀あり。（孟子）

五　鞭は長しと雖も、馬腹に及ばず。（成語考）

六　天下、意の如くならざるもの、恒に十に七八に居る。（晉書）

七　牛の蝨を搏つも、以て蟣蝨を破るべからず。（史記）

八　棒を掉ひて月を打ち、靴を隔てゝ痒を搔くとも、▲「何の交渉かあらん」。（無門關）

九　日月明かならんと欲すれば、浮雲これを掩ひ、河水清まんと欲すれば、沙石これを穢し、人性平かならんと欲すれば、嗜欲これを害す。（淮南子）

一〇　魚網をこれ設けて、鴻は則ちこれに離り、▲燕婉をこれ求めて、此の▲戚施を得たり。（疏記）

一一　堯の子にも丹朱あり、舜の子にも商均あり。

古歌

一　心だに、我が思ふには適はぬを、
　人を恨みん、ことぞわりなき。（風雅集爲子）

二　郭公、あかつきかけて鳴くこゑを、
　待たぬ寢覺の、人や聞くらん。（詞花集伊家）

三　己が身の、己が心に適はぬを、
　思はゞ「物は、おもひしりなん」。（詞花集和泉式部）

四　薄く濃く、亂れて咲ける藤の花、
　ひとしき色は、あらじとぞ思ふ。（拾遺集賞觀）

古句

【マモリ】　守　〔參照〕（イクサ）（シロ）

【一一】子は、必ずしも親に似ず、となり。

【一二】郭公を聞かんとして、夜を更かしたる人の、遂に聞きかねて、寢入りたる後に、生憎に鳴きたるを、始めよりも、聞かんと、早く寢ずして、就きたる、偶然に、聞寢覺したる人の、昔へ、あることなり。

【一三】▲世の中の萬事の、まゝならぬ事は、推し量り知らる、となり。

【一】要害の地に、關門をすゑあれば、一人の武夫、これを守るには、萬人の武夫あるとも、破り難し。

【二】▲二心なき臣。一々往來の人を咎めて、取りしらぶるなり。

【三】已の頼るべき失ひて、當惑するに喩ふ。

【四】迷ひて、東西を辨じかぬる形容。

【五】進むにも進まれず、退くにも退きかぬる意。

【六】▲佛說に唱ふる所の欲界、色界、無色界、これなり。天地間の萬物を、現實の物と見るは、皆、心のあやまりなり、との意。

【七】人は、色を愛し、聲をよろこぶ。深き迷ひに陷る、となり。

一　一夫關に當れば、萬夫も開くなし。（李太白）

二　良將勁弩は、要害の處を守り、▲信臣精卒は、利兵を陳ねて誰何す。

【マヨウ】迷　〔參照〕（フイ）

古句

一　進退維谷まる。（詩經）

二　盲者杖を失ふ。

三　人、生れながらにして知る者に非ず。孰か能く惑なからん。惑ひて師に從はざれば、其の惑ひたるや、終に解けず。（韓愈）

四　五里霧中に在るが如し。

五　進退、實に狼狽たり。（李密）

六　嶺の嵐や谷の聲、夕の煙朝霞、皆これ▲三界唯心の理なり。（謠曲放下僧）

七　或時は色に染み、貪著の思淺からず。又或時は聲を聞き、愛執の心いと深し。（謠曲江口）

【一】各人の心の、まちまちなるは、其の私欲に迷へばなり。惑ひて、私欲に迷はざれば、身となれば、皆同一なり、との意。

【二】有る場合の、極めて僅少なる形容。

古歌

一　人ごとに、變るは夢のまよひにて、覺れば同じ、心なりけり。（讀人不知）

【マヨウス】使迷　〔參照〕（アザムク）（イツワリ）（ダマス）

古句

一　視すに、重利を以てす。（史記）

【マレ】稀　（參照）（メズラシイ）

古句

一　絶えて無くして、僅にあり。（蘇軾）

二　盲龜の、浮木に値へるが如し。（法華經）

【マワリドウイ】廻遠　〔參照〕（ダタリ）（ドウロ）（オロカ）

古句

【一】越人は、水を泳ぐに巧なり。

一　人を越に假りて溺子を救ふには、越人よく游ぐと雖も、子必ず生きず。火を失して水を海に取るには、海水多しと雖も、火必ず滅せず。（韓非子）

【マワル】　廻　〔参照〕（メグル）

【マンゾク】　滿足　〔参照〕（トミ）（コウフク）（ブンゲン）（ホンブン）（ミブン）

古句

一　彼の藜藿の食に甘んじて、是の蓬蒿の廬を樂しむ。（阮籍）

二　糟糠にだにも飽かざる者は、粱肉を務めず。短褐だにも完からざる者は、文繡を待たず。（韓非子）

三　我が心を得たり。（詩經）

四　疏食を飯ひて水を飲み、肱を曲げてこれを枕すれとも、樂亦その中に在り。（論語）

五　足るを知る者は富み、足るを知らざる者は、富むと雖も貧し。

六　「足ることを知れ」ば辱められず。止ることを知れば殆からず。（老子）

【一】▲（あかざ）と（まめの葉）。支那、貧賤者の食する所。

【二】衣食に事かく者は、其の美醜を擇ぶことなし、との意。

【三】我が意に合ふを言ふ。

【四】人、天命の何たるを知れば、貧賤の中に在りても、其の分に安んじて、心に快樂を感ず、となり。

【五】▲其の分にしたがひて、敢て、多きを求めざるなり。即不正の利を得んとせざるなり。△分に安んじて、越えざるなり。

【七】▲どぶ鼠なり。△黄河のこと。物には、各其の分あれは、それに滿足すべし、となり。

【一】▲支那の山名。人世に出でて、多くの人に交り接する間に、發明利益する所あるべし、となり。世間を見ることの益を言へるなり。

【二】意、上に同じ。

【一】馬の美なる所は、毛にあらず。玉の美なる所は、色にあらず。共に、其の性質にあり。

七　鷦鷯は深林に巣へども、一枝に過ぎず。▲偃鼠は河に飲めども、滿腹に過ぎず。（莊子）

西諺

一　足ることを知る者は、幸福なり。（日耳曼）

美の部

【ミガク】　磨　〔参照〕（シュウヨウ）（ガクモン）

古句

一　▲他山の石は、以て玉を攻くべし。（詩經）

二　他山の石は、錯となるべし。（詩經）

【ミカケ】　見掛　〔参照〕（ウワベカザリ）（ミタテ）（ヨウボウ）

古句

一　馬は、毛を殊にしと齊しく、玉は、色を異にして均しく美なり。（淮南子）

【二】外形によりて判斷することの、誤り易きを言へるなり。
【三】外觀の仰山にして、其の實なきに喩ふ。
【四】外觀のみえらくして、其の實なきに言ふ。
【五】聖人の德を修めんとはさずして、只、其の外形をのみ眞似んとするに言ふ。
【六】君子は、敢て、其の德あるを、外貌にあらはさんとせざるなり。故に、俗眼には、愚物ともゆるなり。
【七】▲共に、孔門の弟子。甲は言に巧にして、とは容貌に秀でき。

二　馬を相しては、これを瘦に失し、士を相しては、これを貧に失す。（史記）

三　羊質にして虎文を服し、燕翼にして鳳翔を假る。（文選）

四　外強くして、中乾く。（左傳）

五　禹行して舜趨す。（荀子）

六　良賈は、深く藏して虛しきが如く、君子は盛德あれども、容貌愚なるが若し。（史記）

七　孔子曰く、吾言を以て人を取らば、これを宰予に失せん。貌を以て人を取らば、これを子羽に失せん。（論語）

西諺

一　輝く物とても、悉く黃金にあらず。（英吉利）

【ミカタ】身方　〔參照〕（イクサ）（ドウルイ）（トモ）

古句

【一】▲我が爪となり、牙となりて、はたらく者を言ふ。

【一】艱難に際し、苦境に臨みて、初めて、人の節操の有無は知らる、となり。
【二】人の節操は、利によりて亂れ易し。
【三】至堅の者は、磨すれども薄きに至らず。純白の者は、染むれども黑きに至らず、節操ある君子の、他の誘惑の爲に、心を强迫せざるに喩ふ。
【五】▲變ぜざるに喩ふ。不易の論なり。
【六】主戮なり。逆賊の前に、禮を行はず、となり。
【七】心は、牢として動かすべからず、となり。

一　謀臣と「爪牙の士」とは、養ひて擇ばざるべからず。（國語）

【ミグルシイ】見苦　〔參照〕（ウックシイとミニクイ）

【ミコミ】見込　〔參照〕（モクテキ）

【ミサオ】操　〔參照〕（ホンブン）（シユギ）

古句

一　疾風に勁草を知る。（後漢書）

二　これに委するに利を以てして、以て其の節を觀る。（蘇軾）

三　磨すれども磷がず、涅すれども緇まず。（論語）

四　忠臣は二君に仕へず、烈女は二夫を更へず。（史記）

五　士には「一定の論」あり。女には不易の行あり。（淮南子）

六　吾が膝は鐵の如し。豈賊の爲に屈せんや。（一統志）

七　我が心は石に匪ず、轉すべからず。我が心は席にあらず、卷くべからず。（詩經）

【八】▲大木となりては春夏秋冬ともに、綠の葉色を保ちて、千年の齢に達しても變せず、となり。

【一一】▲葉色をかへぬ　常盤木のこと。

【一四】▲士、困難窮乏の間に處して、始めて節義の有無を知るべし。

【一五】▲艱難愛苦に際して、始めて節操の有無と、心の勇怯とを知るべし。

【一六】富貴なれども、心の節制を忘らず。貧賤なれども、節操を變ぜず。威力を示しておどせども、屈從せず、となり。

八　松柏の山林に生ずるや、其の始めは蓬蒿に困み、牛羊に厄せらるれども、▲「其の終りは四時を貫き、千歳を閲して改めず」。（蘇軾）

九　勁松は、歳の寒きに彰る。

一〇　歳寒くして、松柏の、凋に後るゝを知る。（論語）

一一　疾風に勁草を知り、嚴霜に▲貞木を識る。（顧凱之）

一二　芝蘭は深林に生ず。人無きを以て芳しからざらんや。君子德を修め身を立つ。困窮の爲に節を改めず。（孔子家語）

一三　歳寒からざれば、以て松柏を知るなく、事難からざれば、以て君子を知るなし。（荀子）

一四　▲「士窮して節義を見し」、世亂れて忠臣を識る。（謝良佐）

一五　手に萬鈞を提げて、後に多力見はれ、▲「難に處し患を踐みて、後に貞勇出づ」。（劉子新論）

一六　富貴も淫する能はず。貧賤も移す能はず。威武も屈する能はず。（孟子）

【一七】▲いづれの枝も、皆、ひとしく綠の葉色を保つなり。

【一八】▲埋木の如く、の意。

【三】▲浪あらき磯なり。

一七　松柏の心あるや、四時を貫いて、▲「柯を改め枝を易へず」。（禮記）

一八　▲「埋木の」、人知れぬ身と沈めども、心の花は殘りけり。（謠曲西行櫻）

西諺

一　貞操は、女子にとりて、最も美麗なる粧飾なり。（日耳曼）

古歌

一　誰とてか、荒れたる宿といひながら、
　月より外の、人を入るべき。（後拾遺集讀人不知）

二　深山木の、その梢とも見えざりし、
　櫻は花に、あらはれにけり。（詞花集頼政）

三　▲ありそ越え、他ゆく波のほか心、
　我は思はじ、いのち死ぬとも。（萬葉集讀人不知）

四　雪降りて、年の暮れぬる時にこそ、

五　さなきだに、重きが上のさ夜衣、　遂に紅葉ぬ、松も見えけれ。（古今集・讀人不知）

六　大堰川、かへらぬ水に影見えて、　わが妻ならぬ、妻なかさねそ。（新古今集・寂然）

【ミジメ】不見目　［参照］（ザンコク）

【ミジュク】未熟　［参照］（ガクモン）（ゲイ）

古句

一　▲玄、尙黑し。（楊雄）　（ミズとヒ）（ヒ）（ウミ）（カワ）（ナミ）

【ミズ】水　（ナガメ）

古句

一　人影搖動す、綠波の裏。（劉廷芝）

二　聞くならく神仙は接るべからずと。▲「心湖水に隨へば、共に悠々たり」。

【一】▲純黑なり。黑しと雖も、未だ、純黑に達せざるなり。

【二】人影の、波間に映ずる樣なり。

【三】▲舟を、湖水に浮べて、波のまにまに流れゆけば、心ましてのびゝしして、俗念全く去りて、神仙となりたる心地せらる、となり。

（張說）

三　▲「孤帆の遠影は、碧空に盡き」、惟長江の天際に流るゝを見るのみ。（李太白）

四　江碧くして、鳥逾白し。（杜甫）

五　日落ちて江湖白く。潮來りて天地青し。（王維）

六　江水春を流して、去りて盡きなんと欲し、▲「江潭の落月」は、復西に斜なり。（張若虛）

七　魚龍潛み躍りて、水に文を成す。（張若虛）

八　春江の潮水は、海に連りて平かなり。海上の明月は、潮と共に生ず。（張若虛）

九　▲蓼花隄岸に被り」、陂水寒くして更に綠なり。（柳子厚）

一〇　池色溶々として、藍水を染む。（白居易）

一一　水面に塵無くして、風池を洗ふ。（白居易）

【六】▲山の端に沒せんとする日の、ふかき淵に映じて、物すごく見ゆる樣なり。うつしたるなり。

【九】▲犬たでの花は、つゝみの岸邊一面に咲き亂れてあるなり。

【一〇】池水の、青々と泛へたる形容。

【一三】池の上は、涼しくして、夏の心地せず。松吹く秋風は、夏と雖も、心地しすずしげなり、となり。

【一四】▲夕日のさす水面の、おだやかなる。△遙の沖なる船の、風に吹かるゝ様は、如何に、心細げに、寒きに、心細げなり、との意。

【一五】▲鷺の類。

【一八】遠く、廣き海原の沖合より、霧れ、かゝる様の形容。

【一九】はてしなき海原に、波の、しげく立つ様の形容。

【二一】▲餘りに、細密のことにまで注意すれば、其の下に立つ者は、窮屈にして、堪へ難きなり。

【二二】▲安穩を愛するなり。

【二六】▲水の、深く、青くして、瑠璃の玉の、青きが如きを、昔へり。

【二七】▲浦に、霞の立ちこめて、人家のおぼろに見ゆる形容。

【二八】▲雪く、苔むしたる巖の、削り立てたるが如くにそびえゆる形容。△深き淵の、青々と見ゆる様の形容。

【二九】江岸の草葉は、一面に白露を帶び、水と空とが相合して、限界なきなり。

一二　海濶くして孤帆遲し。（李太白）

一三　池冷かにして、水に三伏の夏なし。松高くして、風に一聲の秋あり。

（朗詠集源英明）

一四　▲「日脚波平か」にして、孤島暮れぬ。△「風頭岸遠くして、客帆寒し」。

（朗詠集平佐輔）

一五　▲「蜀玉雙び飛んで、水塘に滿つ。（李太白）

一六　長淮の水は、青くして苔の如し。（馬子才）

一七　洪濤巨浪、日夕に相春撞すれども、雲消え風止めば、水鏡淨し。（歐陽修）

一八　萬里蒼茫として、煙水暮る。（韓愈）

一九　蒼煙萬頃、波粼々たり。（韓子蒼）

二〇　澄江靜にして練の如し。（李太白）

二一　水至りて清ければ則ち魚なく、▲「人至りて察なれば則ち徒なし」。

（東方朔）

二三　水の性は清けれども、土壤これを泪し、人の性は▲安けれども、嗜欲これを亂る。（孔叢子）

二三　水の性は清を欲すれども、沙石これを濁し、人の性は平を欲すれども、嗜欲これを害す。（文子）

二四　水流は先を爭はず。故に疾くして遲れず。（淮南子）

二五　碧水渺々として、雲茫々たり。（李太白）

二六　▲「碧瑠璃の水」は、淨うして風無し。（白居易）

二七　▲「江霞浦を隔て、人烟遠く」、湖水天に連りて、雁點遙かなり。（朗詠集橘直幹）

二八　山又山。何の工か▲「青巖の形を削り成せる」。水復水。誰が家か△「碧潭の色を染め出せる」。（朗詠集江澄明）

二九　白露江に横りて、水光天に接す。（蘇軾）

【三一】（かもめ）のとび、魚のおよき遊ぶ様の形容。

【三二】晴天の形容。▲一面に映れる形容。

【三三】廣きを昔へり。且くして、廣き海原の、遠く廣きに、煙と波との立ちて、見ゆる形容。

【三四】遥かの岸には、また山々相聳え、また一方よりは、長江の流れ込むなり。

【三八】▲魚、勢よければ、尾をふるふなり。△士民共に、快樂のいとまなきなり。

【三九】▲灌木と喬木との窓。

【四〇】▲邪寃物なり。人にありては、私ごの窓。

【四一】▲水面に浮ぶなり。△政令の、苛酷なるなり。

【四三】▲理にくらきなり。

【四七】▲兵陣には、定れる形なし、となり。

【四九】▲水の神なり。

三〇　清風、徐に來りて、水波興らず。（葉軾）

三一　沙鷗翔集し、錦鱗游泳す。（范仲淹）

三二　上下の天光、「一碧にして萬頃なり」。（范仲淹）

三三　煙波處々に愁ふ。（薛瑩）

三四　遠山を銜み、長江を呑む。（范仲淹）

三五　山は高きを厭はず。水は深きを厭はず。（魏武帝）

三六　山の峭しき者は崩れ。澤の滿ちたる者は溢る。（素書）

三七　山は、其の高きを致して、雲起り、水は、其の深きを致して、蛟龍生ず。（淮南子）

三八　水濁れば、則ち▲「掉尾の魚」なく、政苛なれば、則ち△「逸樂の士なし。（鄧析子）

三九　水積れば呑舟の魚を生じ、土積れば▲「梗枏豫章」を生ず。（尸子）

四〇　水は、礙を避くれば、則ち海に通じ、君子は、▲礙を避くれば、則ち理に通ず。（楊子法言）

四一　水は濕に流れ、火は燥に就き、雲は龍に從ひ、風は虎に隨ふ。（周易文言）

四二　水濁れば、則ち魚喁し、△「令苛なれ」ば、則ち民亂る。（韓詩外傳）

四三　水擊てば、則ち波興り、氣亂るれば、則ち神昏し。（淮南子）

四四　水廣き者は魚大に、山高き者は木脩し。（淮南子）

四五　水は地の血氣にして、筋脈の流通するが如し。（管子）

四六　積陰の寒氣は、水と爲る。（淮南子）

四七　水は地に因りて流を制し、兵は敵に因りて勝を制す。故に▲「兵に常勢なく」、水に常形なし。（孫子）

四八　林深ければ、則ち鳥棲み、水廣ければ、則ち魚游び、仁義積めば、物自らこれに歸す。（貞觀政要）

四九　魚鼈の遊戯するは、秋水の、▲河伯の民を養ふなり。（朗詠集江澄明）

【五〇】▲心の、ひろびろとして、何を思ふともなきなり。

【五一】國民の心は、君の心の善惡により、如何にも變化すべき、器と水とに、たとへたるなり。

【五二】意、上に同じ。

五〇 獨り江樓に上りて、▲「思渺然たり」。月光は水の如く、水は天に連る。（趙嘏）

五一 君は槃なり。槃圓なれば水圓なり。君は盂なり。盂方なれば水方なり。（荀子）

五二 人の君たる者は、猶盂の如く、民は猶水の如し。盂方なれば水方に、盂圓なれば水圓なり。（韓非子）

五三 水には四德あり。羣生を沐浴せしめ、萬物を通流するは仁なり。清を揚げ、濁を激し、滓穢を蕩去するは義なり。柔なれども犯し難く、弱なれども勝ち難きは勇なり。江を導き、河を疏し、盈を惡み、謙に流すは智なり。（尹子）

五四 水積りて川を成せば、則ち蛟龍生じ、土積りて山を爲せば、則ち豫章生じ、學積りて聖を成せば、則ち富貴尊顯至る。（說苑）

五五 巨水漫々として、碧浪天を浸す。（謠曲白樂天）

【五七】▲綠なせる樹木の、水に映じたるあたりに、魚の、遊び居る樣の形容。

【五八】▲いつにても、の意。

【一】人は、危き目、おそろしき目に遇はざれば、神佛信仰の念を起さゞるを言へり。

【二】▲海原のこと。△雲の枕詞。

五六 風歸帆を送る、萬里の程。江天渺々として、水光平かなり。舟子は解く、是明朝の雨。（謠曲白髭）

五七 ▲「綠樹影沈んでは、魚木に上り」、清波に月落ちては、兎浪を奔る。（俗白休）

五八 岩に碎けて、清く流るゝ水の景色こそ、▲「時をも別かず」めてたけれ。（徒然草）

五九 深き水は涼しげなし。淺くて流れたる、遙かに涼し。（徒然草）

西諺

一 人、若し祈禱の何たるを知らんと欲せば、須く海に行くべし。（佛蘭西）

古歌

一 ▲「わだの原」こぎ出て、見れば、△「久方の」雲居にまがふ、沖つ白浪。（詞花集關白前太政大臣）

二 わだの原、汐路はるかに見渡せば、

三　流れ來て、松の木陰となる時は、
　　雲と波とは、一つなりけり。（千載集順徳）
　　水の心も、涼しかるらん。（熊谷直好）

【ミズウミ】湖　〔參照〕（ミズ）

【ミズゼメ】水攻　〔參照〕（イクサ）

古句
一　沈竈、黿を產す。（國語）

【ミステル】見棄　〔參照〕（ハクジョウ）（ケイハク）

古句
一　炎にして附き、寒にして棄つ。（柳文）

古歌
一　佗人の、わきて立寄る木のもとは、
　　頼む陰なく、紅葉ちりけり。（古今集廻昭）

【一】久しく、水攻の難に遇ひて、籠中に蛙の產したる窓。

【一】勢力盛なるには附き、衰ふれば、棄てゝ顧みざる窓。

【ミズとヒ】水火　〔參照〕（ミズ）（ヒ）

古句
一　「涓流は寡しと雖も、浸く江河を成し」、熖火は微なりと雖も、卒に能く野を燎く。（後漢書）

【ミダス】亂之　〔參諧〕（ミダレル）

古句
一　絲を治めて、之を棼す。

【ミタテ】見立　〔參照〕（ミカケ）

古句
一　薑を採り菲を採るに、下體を以てすることなかれ。君節を取りて可なり。（詩經）
二　人を取るには、固より當に其の賢と不賢とを問ふべし。其の盲と不盲とを計るべからず。（韓愈）

【一】▲ちよろ〳〵流の小水も、多く集りては、楊子江黃河の如き巨流となる、となり。△もし火なり。

【二】▲△共に、球根植物。×根なり。人を取るに、其の短所を見て、長所を棄つる勿れ、となり。

【三】外形により て、物の眞價を判斷することの、誤り易きを言へるなり。

【四】君子の、人物を見立つるには、其の言によらずして行を以てし、又、貧賤者の言なりとも、これを棄てずとなり。

【一】老醫は經驗に富み、若手の法律家は、新學説に通ず。

【一】閨中の、みだらなるを言ふ。

【二】▲男女間の、みだりがはしき言なり。

【一】禍亂を除かんと欲すれば、姑息の手段を用ふるも益なし。其の根本を改めざるべからず、となり。

【二】窓、上に同じ。

三　馬を相しては、これを瘦に失し、士を相しては、これを貧に失す。（史記）

四　君子は、言を以て人を擧げず、人を以て言を廢せず。（論語）

西諺

一　醫師は老いたるを採り、法律家は若きを選べ。（英吉利）

【ミダリガワシイ】　猥　〔參照〕（フヒンコウ）（ジョウヨク）（イロゴト）

古句

一　帷薄修らず。

二　▲「中籌の言」は、道ふべからず。（詩經）

【ミダレル】　亂　〔參照〕（ミダス）

古句

一　湯を以て沸に沃げば、亂乃ち愈甚し。（淮南子）

二　湯を以て沸を止むれば、沸乃ち止まず。誠に其の本を知らば、火を去らんのみ。（淮南子）

三　獺多ければ魚擾れ、鷹多ければ鳥亂れ、▲「有司多ければ、百姓困む」。（抱朴子）

【ミチ】　道　〔參照〕（ドウロ）（ジンドウ）

【ミッツウ】　密通　〔參照〕（フヒンコウ）（ミダリガワシイ）（イロゴト）（ジョウヨク）

古句

一　穴隙を鑽りて、懇懃を通ず。

二　牆を越えて相從ふ。（孟子）

【ミナリ】　身形　〔參照〕（ヨウボウ）

古句

一　▲「形骸を土木にし」て、愧づる所なし。

【ミニクイ】　醜　〔參照〕（ウックシイとミニクイ）

【ミノホド】　身程　〔參照〕（ブンゲン）（ミブン）

【三】▲官吏の、多きに過ぐるは、人民の、煩累に堪へざる所なり。

【一】男女の、密に通する意。

【二】男女の、密に、手を取り合ふこと。

【一】▲外形を、修飾せざるなり。

【ミハナス】見放　〔参照〕（フジンボウ）（ミステル）

【ミブン】身分　〔参照〕（ブンゲン）（チイ）（クライ）（ハクジョウ）（ホンブン）（タットイ）

古句

一　身已に貴くして、人に驕る者は、民これを去る。位已に高くして、權を擅にする者は、君これを惡む。祿已に厚くして、足るを知らざる者は、「患これに處る」。（列子）

二　鷦鷯深林に巣へども、一枝に過ぎず。偃鼠河に飲めども、滿腹に過ぎず。（莊子）

古歌

一　位山、たかねの松もあるものを、麓も知らぬ、谷のうもれ木。（春葉集東滿）

【ミミ】耳　（参照）（キクとミル）

古句

【一】▲禍難の甚たるを言へるなり。

【二】▲（どぶねずみ）なり。△黄河のこと。物には、各、其の程度、分限あれば、多きを貪らずして、滿足せよ、となり。

一　目は、妄視すれば即ち▲淫し、耳は、妄聽すれば則ち惑ひ、口は、妄言すれば即ち亂る。（淮南子）

二　口は嘉味を貪らず。耳は逸聲を樂まず。目は色に淫せず。（國語）

三　一葉目を蔽へば、太山を見ず。兩豆耳を塞げば、雷霆を聞かず。（鶡冠子）

【ミヨイミとニクイ】美醜　〔参照〕（ウックシイとミニクイ）

【ミライ】未來　〔参照〕（カコとミライ）

古句

一　往者は諫むべからず。來者猶追ふべし。（論語）

【ミル】見　〔参照〕（メ）（キクとミル）

古句

一　目を仄て、見る。

【ミルとキク】見聞　〔参照〕（キクとミル）（ミミ）（メ）

【一】▲祝祭を誤るなり。△德を亂るの意。

【二】人の耳目の、はかなくして、軽み難きを言へるなり。

【一】過去のことは、言ふも詮なし。未來は改むべし、となり。

【一】恐れて、正面より見かねる意。

【三】實際に就きて見たる所は、他人の言にて聞きたるより確實なり。

【一】聞くより、見るが確かなり、となり。

【二】何を爲すとも無くして日を送れば、一年を經過すれども、何のかひもあるべからず、となり。

【三】列子中、夸父と云ひし者、日影を追ひ、窮めんとして、中途に、渴死せし故事。已が力量を顧らずして、大事を企つるに喩ふ。

【三】土を以て犬を形どり、鷄と作りたれども、精神なければ、其の用を爲さず、となり。

【四】失ふ所大にして、得る所の小なるに喩ふ。

【五】蹇習なれば、時勢に應ずるを知らぬなり。

【六】▲流の邪寃となる者を去りて、水はけを好くするなり。

【八】已に害ある者を助くるに喩ふ。

【九】▲小鳥の名。水石を啄み來りて、海に投ずる。勞して功なきに喩ふ。

【一〇】微力を以て、大事業に當ることの益なきに喩ふ。▲小虫なり。

【一一】勞して、損害を招くに喩ふ。

【一三】▲君子は、無益の戰爭を行はず、となり。

古句

一　古を尊びて今を卑み、聞く所を貴びて見る所を賤む。（桓子新論）

二　耳を貴びて目を賤む。（文選）

三　百聞は一見に若かず。（荀子）

西諺

一　一人の目擊者は、二人の傳聞者より確實なり。（和蘭）

【ミワケ】見分〔參照〕（クベツ）

无の部

【ムエキ】無益〔參照〕（ムダボネオリ）（コッケイ）

古句

一　日を曠しくし年を經れども、毫釐の驗有る靡し。（谷永）

二　夸父の、日影を追ふが如し。

三　陶犬は夜を守るの警なく、瓦鷄は晨を司るの益なし。（金樓子）

四　隋珠を以て、雀を彈ず。（莊子）

五　株を守りて兎を待つ。（韓非子）

六　江河の源を決して、これを障ぐに手を以てす。（淮南子）

七　其の本を修むることを事とすべきを知らずして、其の末を治むることを務むるは、是その根を釋てゝ、其の枝に灌ぐ者なり。（淮南子）

八　賊に兵を借し、盜に糧を齎す。（史記）

九　▲精衞の、海を埋むるが如し。

一〇　錐刀を以て、泰山を墮つが如し。（荀子）

一一　▲蚍蜉の、大樹を動かすが如し。

一二　卵を以て石に投じ、指を以て沸を撓すが如し。（荀子）

一三　「無功の師は、君子行らず」。無用の地は、聖王貪らず。（鹽鐵論）

一四　氷を挾んで溫を求め、炭を抱きて涼を希ふ。（魏志）

一五　盆を戴きて、天を望む。

【一六】▲火事を、消し止めんとするなり。

【一七】▲（かまきり）と言ふ小虫。怒り易き虫なり。△車の通るべき道を塞ぐなり。

【一八】△大なる車なり。

【一九】夏至の節は、極めて短し。魚は、天上に在るべきならず。

【二〇】兩手にて持つばかりの、小盆の土砂を以て、孟津の火川は、せき止むべきにあらず。勞して功なきことなり。

【二一】害ありて、益なき喩。

【二三】石田は、耕作すべからず。

【二五】害ある者を助くる意。

【二六】▲ぬひを施したる美服なり。美服を著て、夜行くは、美服を著たる甲斐なきなり。

【二九】愚人に對して、高尚なる議論を聞かしむることの、無益なる喩。

【三一】燕の太子丹の故事。待てども、甲斐なきに言ふ。

【三二】▲支那、南方の遠國なり。

【三三】揚子江、黄河は、僅少の土砂を以て、せき止むべきにあらず。

【三六】黄河の水は、百年にして、一度清むと言へり。待てども、其の甲斐なきに喩ふ。

【一】小利の爲に爭ふ者は、大損を招く。

一六　薪を抱いて、▲「火を救ふ」。（史記）

一七　▲「螳螂臂を怒らして、△「車轍に當る」。（莊子）

一八　螳螂の斧を以て隆車の隧を禦ぐ。（文選）

一九　夏至に長夜を欲し、天を指して魚を射る。

二〇　土を捧げて、孟津を塞ぐが如し。（朱浮）

二一　股を割きて、腹に啖はしむ。（貞觀政要）

二二　肉を以て蟻を去れば、蟻愈多く、魚を以て蠅を驅れば、蠅愈至る。（韓非子）

二三　石田を獲るが如し。（左傳）

二四　夏を以て爐を進め、冬を以て扇を奏む。（王充）

二五　肉を以て餓虎に委す。（史記）

二六　▲繡を衣て、夜行く。（史記）

二七　勞して功なし。（管子）

二八　山に上りて魚を求め、水に入りて兎を捕ふ。（易林）

二九　牛に對して琴を彈ず。

三〇　木に緣りて魚を求む。（孟子）

三一　烏の頭白く、馬の、角を生ずるを待つ。

三二　人を越に假りて、溺子を救ふ。越人は善く游ぐと雖も、子必ず生きず。火を失して、水を海に取る。海水多しと雖も、火必ず滅せず。（韓非子）

三三　一簣を以て、江河を障ふ。（漢書）

三四　群羊を驅りて、猛虎を攻む。（史記）

三五　錦を衣て、夜行く。（漢書）

三六　黄河の清を俟つ。

西諺

一　羊の爲に訴訟する者は、其の手を失ふ。（日耳曼）

の意。

【一】人を、尊び迎ふる意。

【二】辨當を携へて、遠くに出迎ふる意。

【三】前任者を送りて、後任者を迎ふる意。

【四】大に優待して、迎ふるに言ふ。

【一】世間を知らざる形容。

【二】▲(しまり)のなきなり。△物を、傷害するなり。×(ゆるみ)のなきなり。

【三】▲あき目くら。△ぬひを施したる禮服。無學の徒は、幽妙の美を悟り難し、となり。

【四】▲あや模樣ある美服なり。△巧妙なる音樂。×つんぼ。

【五】▲大牛なり。△衣服を著する意。學識なき者を、卑下する言なり。

【六】全く、文字を知らざる形容。

【七】▲立派なる道德あれども、これを學ばざる者は、道德の、果して善にして、貴ぶべきものなるを知らず、となり。

【八】知識のなき形容なり。

【九】(五)の解を見よ。

【一〇】見る所の、一小部分に止まる意。

【一一】△學問を、はげまぬなり。△文學のこと。×音樂なり。

【ムカエル】迎　〔參照〕(モテナシ)(キャク)

古句

一　箒を擁して迎ふ。(史記)

二　簞食壺漿して迎ふ。

三　故きを送りて、新しきを迎ふ。(漢書)

四　履を▲倒にして迎ふ。(魏志)

【ムガク】無學　〔參照〕(セケンミズ)(フケンシキ)(ムゲイ)(アキメクラ)

古句

一　眼孔小なり。

二　仁を好みて學を好まざれば、其の蔽や愚、知を好みて學を好まざれば、其の蔽や蕩、言を好みて學を好まざれば、其の蔽や賊、直を好みて學を好まざれば、其の蔽や絞、勇を好みて學を好まざれば、其の蔽や亂、剛を好みて學を好まざれば、其の蔽や狂。(論語)

三　盲者は、以て眉目顏色の好に與るなく、▲瞽者は、以て青黃黼黻の觀に與るなし。(莊子)

四　▲瞽者は、以て文章の觀に與るなく、▲聾者は、以て鐘鼓の聲に與るなし。(莊子)

五　▲馮牛にして襟裾す。

六　目、一丁字を辨せず。

七　嘉肴ありと雖も、食はざれば其の旨きを知らず。▲「至道ありと雖も、學ばざれば其の善を知らず」。(禮記)

八　腹笥虛し。

九　人古今に通せざるは、馬牛にして襟裾するなり。(韓愈)

一〇　井中にして、星を視るが如し。(尸子)

一一　▲「秋の螢の光を聚めずして、「風月の望に」暗く、春の鶯の囀りを學ばざれば、×絲竹の曲に疎し。(十訓抄)

【一】考へみても、ぼんやりとして、夢の如し、となり。
【三】過去のことは、昔ひても詮なし、將來は、改むべし、となり。

古歌

一　思ひやれ、水の心の淺ければ、
かき流すべき、言の葉もなし。（詞花集實行）

【ムカサリ】嫁　〔參照〕（ケッコン）

【ムカシ】昔　〔參照〕（ムカシとイマ）（カコとミライ）

古句

一　これを念へば、杳々として夢の如し。（李太白）
二　往事は渺茫として、都べて夢に似たり。（白居易）
三　往者は諫むべからず。來者は猶追ふべし。（論語）

西諺

一　昨日は、今日の師なり。（英吉利）

【ムカシとイマ】今昔　〔參照〕（ムカシ）（カコとミライ）

古句

【二】▲古制を以て、今に當てはむるなり。▲時世によりて、事物に、變遷ある、固陋の考なり、となり。
【三】人より傳聞する所の、過去の世の事なのみ、よしと信じて、現在の世の事を、卑しむなり。
【四】【五】上世の歴史に濫みて、當世にあてはめて、試驗するなり。
意、（三）に同じ。

【一】美にして、完全なる意。▲天人のきるてふ天の羽衣なり。これには、縫目なし、と言へり。

一　千歳を觀んと欲すれば、今日を審かにし、億萬を知らんと欲すれば、一二を審かにす。（荀子）
二　「古」を以て今を制す」る者は、「事の變に通せず」。（戰國策）
三　耳を貴びて、目を賤しむ。（文選）
四　古を尊びて、今を卑しみ、聞く所を貴びて、見る所を賤しむ。（桓子新論）
五　上古に觀て、當世に驗す。（史記）
六　何事も、古き世のみぞ慕はしき。今樣は、無下に卑しくこそなり行くめれ。（徒然草）

【ムキズ】無疵　〔參照〕（ジュウブン）

古句

一　▲天衣にして、縫無し。

【ムキョウイク】無教育　〔參照〕（オコタル）（ナマケル）（オロカ）

【一】私欲の求むる所にまかせて、衣食住に贅沢を盡して教育を受くる無ければ、人類としての價値なきものなり。

【二】無氣力を形容する語なり。

【三】善業を積みたる家には、善報子孫に及び、惡業を重ねたる家には、惡報、子孫に及ぶ、となり。

【四】▲打やり放しにすると、▲取まとめずして、放散するなり。

【四】昔國、厚酒を楚王に献ぜし趙國の爲に謀られし故事。厚意を以て、愈外惡報を得るに喩ふ。

古句

一　飽食、暖衣、逸居して教無ければ、則ち禽獸に近し。（孟子）

【ムキリョク】　無氣力　〔參照〕（ヒクツ）（オクビョウ）

古句

一　屠所に牽かるゝ羊の如し。

二　南風競はず。（左傳）

【ムクイ】　報　〔參照〕（ホウシュウ）

古句

一　善を作せば、之に百祥を下し、惡をなせば、之に百殃を下す。（商書）

二　積善の家には餘慶あり。積惡の家には餘殃あり。（易文言）

三　禾を爲むるに、これを▲鹵莽にすれば、其の實も亦鹵莽にして予に報ず。芸りてこれを▲滅裂にすれば、其の實も亦滅裂にして予に報ず。（莊子）

四　魯酒薄くして、邯鄲圍る。（淮南子）

【五】▲天網に中る意。

【六】天の、人に禍福を下す道は、公明にして、たがふことなし、となり。

【八】其の唾、たちまち我が面上に落ち來るべし。

【九】應報の、たしかなるを言へり。

【一〇】▲道理に背ける意。

【一一】人知れず、他人に恩德を施す者には、天必ずあらはに報を下す、となり。

【一二】▲我が怨むる所の者に對しては、敢て、恩德を以て報せずして可なり。但し、邪曲の念を用ひず、正當の道を以てするなり。

【一三】天道は、天網の疎なるに似たれども、善惡の應報必ず至る、との意。

五　法を以て天下に毒する者は、未だ歸りて其の身、及其の子孫に中らざること有らず。（蘇軾）

六　天道諂はず。（左傳）

七　天命諂はず。（左傳）

八　天を仰いで唾す。

九　爾に出づる者は、爾に歸る。（孟子）

一〇　言は、▲悖りて出づる者は、亦悖りて入り、貨は、悖りて入る者は、亦悖りて出づ。

一一　陰德ある者は、必ず陽報あり。（淮南子）

一二　▲「直を以て怨に報い」、德を以て德に報ゆ。（論語）

一三　天網は、恢々として疎なれども漏さず。（老子）

古句

【ムゲイ】　無藝　〔參照〕（ムガク）

【一】▲勤學勉强せざるなり。△の學、即、詩歌文章の意。×音樂のこと。

【二】實際を知らざる者に、口にて言ひ聞かすとも、共の眞實を知らしめ難し、となり。

【三】實際の經驗なく、書籍の示す所、只、にのみよりて、馬をうまく使はんとすれば、馬の性質を、十分に知り明らむること能はざれば、馬は、人の意に從はざるなり。

【三】(一)〃解に同じ。

【二】經驗なき醫師は、往々、人を殺すことあるを言へるなり。

【一】▲「秋の螢の光を聚めず」して、△「風月の望」に暗く、春の鶯の囀を學ばざれば、×絲竹の曲に疎し。(十訓抄)

【ムケイケン】 無經驗 〔參照〕(フケンシキ)(ムガク)(セケンミズ)(ムゲイ)

古句

一 井蛙には、以て海を語るべからず。夏蟲には、以て氷を語るべからず。(莊子)

二 書を以て御する者は、馬の情を盡さず。(戰國策)

三 井魚には、與に大を語るべからず。夏蟲には、與に寒を語るべからず。(淮南子)

西諺

一 知らぬ川を渉るは、危險なり。(英吉利)

二 新らしき醫師は、新しき引導師なり。(英吉利)

【ムゴイ】 殘酷 〔參照〕(ザンコク)

【二】▲牡羊なり。好んで、物に衝突す。向う見ずの所爲に喩ふ。

【三】列子中、夸父と云ひし者、日影を追ひ窮めんとして、中途にして渴死せし故事。向う見ずに、大事業を企つるに喩ふ。

【四】▲虎を、手搏にするなり。△黃河を徒渉する意。共に、危險なるに喩ふ。尚う見ずに、危險を冒して、生命を輕んずる如きは、我が取らざる所ぞ、となり。

【一】▲△共に、蟲聲の形容。

【ムコウ】 無効 〔參照〕(ムエキ)

【ムコウミズ】 向不見 〔參照〕(ケッキ)(イノチシラズ)(イカリ)(ムリ)

古句

一 蛾の、火に赴くが如し。(事文類聚)

二 羝羊、藩に觸る。(易經)

三 夸父の、日影を追ふが如し。

四 ▲暴虎馮河して、死して悔なき者には、我與せざるなり。(論語)

西諺

一 星に向ひて飛ぶ者は、泥中に陷ることあり。(英吉利)

【ムサボル】 貪 〔參照〕(ヨクバル)

【ムシ】 蟲 〔參照〕(セミ)(ホタル)(アキ)

古句

一 ▲切々たり、暗窓の下。△唧々たり、深草の裏。(白居易)

【二】▲聲の、ほのかなる形容。△（はたおり）虫の音の、さびしきなり。

【三】あたりに鳴く、蟲のこゑ〳〵は、我が悲哀の情か、助け增さしむ、となり。

【七】▲恨むるが如し、となり。

【八】▲哀を催しがほなるなり。

二　山館の雨の時には、▲「鳴くこと自ら暗く」、野亭の風の處には、△「織ると猶寒し」。（朗詠集橘直誇）

三　四壁の蟲聲の唧々たるを聞けば、歎息を助くるが如し。（歐陽修）

四　陰蟲切々として、聞くに堪へず。（皇甫冉）

五　千草にすだく虫の音の、機織る音のキリハタチャウ、つゞりさせてふ蚤、蜩、いろ〳〵の色音の中に、わきて我が忍ぶ松虫の聲、リンリンとして、夜の聲冥々たり。（謠曲松虫）

六　草茫々たる朝の原に、虫の音ばかりや殘るらん。（謠曲松虫）

七　心のまゝに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋れて、虫の音▲「かごとがましし」。（徒然草）

八　月は、入方の空、いと清う澄み渡れるに、叢の虫のこゑ〳〵▲「催し顔」なるも、いと立離れ難き草の許なり。（源氏物語）

古歌

【一】▲愁へ悲しむ心は、蟲によりて、各異なる故なるか、の意。

【二】▲（せむし）が、人陰にありて、演藝を見るなり。己見ること能はざれば、他人の評するまゝに、己も評するなり。

一　鳴く蟲の、ひとつ聲にも聞えぬは、▲「心ごゝろに、物やかなしき」。（詞花集和泉式部）

二　きり〴〵すいたくな鳴きそ、秋の夜の　ながき思は、我ぞ勝れる。（古今集忠房）

三　秋の夜の、あはれは誰も知るものを、　我のみと鳴く、きり〴〵すかな。（千載集兼宗）

四　おぼつかな何處なるらん、虫の音を　尋ねば草の、露や亂れん。（爲顯）

【ムジヒ】　無慈悲　〔參照〕（ザンコク）

【ムシユギ】　無主義　〔參照〕（ショウジン）（ケイハク）（オロカ）（フケンシキ）

古句

一　▲「矮子の戲を見る」が如く、人の好しと道ふを見て、他また好しと道ふ。

二　俗に隨ひ、富貴にして、以て生を偸む。（凡平）

【三】何人にも、如才なく交りて、一定の主義なきに言ふ。

三　往を送り、來を勞して、斯に窮り無し。（扁平）

【ムジョウ】無常　〔參照〕（ハカナイ）

【ムズカシイ】困難　〔參照〕（カタイとヤスイ）（シゴト）（ムコウ）（シッパイ）

古句

一　右手に圓を畫き、左手に方を畫く。（莊非子）

二　暗中に物を探るが如し。

三　累卵より危く、上天より難し。（枚乘）

【ムスメ】娘　〔參照〕（オンナ）

【ムダ】無駄　〔參照〕（ムエキ）（コッケイ）

【ムダボネオリ】無駄骨折　〔參照〕（ムエキ）（コッケイ）

古句

一　錐刀を以て、泰山を墮つが如し。（荀子）

二　勞しと功なし。（管子）

【一】微力を以て、大事業に當るも、勞して功なきに喩ふ。

【三】▲牡羊。好んで、物に衝突し、徒らに、其の角を疲らす。

【四】▲小鳥の名。木石を啄みて、これを海に投ず。勞して、効なきに喩ふ。

【五】物無き所にば、據るべからず。影は、ふつこと能はず。

【一】夫婦の、むつましきに喩ふ。

【二】兄弟の間、艱難相助くるに引用する句。

【三】極めて親密なる交なるに言ふ。

【一】▲正大の行爲に志す者は、こまかしき缺點に、心を留めず、となり。△禮儀の大なるを行はんとする者は、些細の辭讓を爭ずはとなり。

三　▲羝羊、藩に觸る。（易經）

四　▲精衛、海を埋む。

五　虛に據り、影を搏つ。

【ムツマシイ】睦　〔參照〕（ワゴウ）（フウフ）（シタシミ）

古句

一　琴瑟相和す。

二　鶺鴒原にあり。（詩經）

三　生きては志を同じうし、死しては傳を同じうす。（邵氏錄）

四　妻子の好合するは、琴瑟を鼓くが如し。

【ムトンジャク】無頓着　〔參照〕（ブエンリョ）（ブレイ）

古句

一　▲「大行は細瑾を顧ず」。△「大禮は小讓を辭せず」。（史記）

【ムノウ】無能　〔參照〕（ムガク）（ムゲイ）（オロカ）（ショウジン）

【二】無能の小人、爲す所なくして、厚祿を貪るに喩ふ。

【四】大臣無能にして、其の國家を覆すに喩ふ。

【五】鳩は、性拙にして、自ら巣を爲す能はずして、鵲巣に、卵を産む。女子の、無能にして、自ら家を成す能はず、夫にのみ依頼するに喩ふ。

【六】土を燒きて製したる犬と、鷄とは、形あれども、精神なければ、其の用をなさず、となり。

【七】▲大牛なり。△衣服を著するなり。無能の者を、卑下して言ふ。

【八】▲衆につれて、進退するなり。

古句

一　子は耕すことを知らず、婦は織ることを知らず。（韓愈）

二　鵜梁に在り。其の翼を濡さず。（詩經）

三　巧者は勞し、知者は憂ふ。無能の者は求むる所なく、飽食して遨遊し、汎として繫がざる舟の若し。（莊子）

四　鼎、足を折る。（易經）

五　維鵲巣あり。維鳩これに居る。（詩經）

六　陶犬は夜を守るの警なく、瓦鷄は晨を司るの益なし。（金樓子）

七　▲馮牛にして襟裾す。

八　毀なく、譽なく、▲「旅進旅退」し、位を竊んで祿を苟し、員に備りて身を全うす。（王禹偁）

古歌

【ムフンベツ】　無分別　〔參照〕（フケンシキ）（ムコウミズ）（ケッキ）（ムリ）

【一】來るさには、隈に、のみ心とまりて、路の程も知らざりしが、歸るさに、はじめて、里程の遠きを知れり、となり。

【二】楚子、周の天子の位を窺ひし故事。天子の位を窺ふ意志あるに喩ふ。

【三】政令、酸に過ぐれば、民怨、遂に破れ裂するに至るに喩ふ。

【一】朱色に、紫色を加ふれば、朱色は消されて、かひなきなり。

一　山櫻、心のまゝに尋ね來て、かへさぞ道の、ほどは知らるゝ。（後拾遺集小辨）

古句

一　鼎の輕重を問ふ。（左傳）

二　大絃急なれば、小絃絕ゆ。（後漢書）

【ムヤク】　無益　〔參照〕（ムエキ）

【ムヨク】　無慾　〔參照〕（ケッバク）

古句

一　寶の山に入りながら、手を空しくして歸る。

【ムラサキ】　紫

古句

一　紫を惡むは、其の朱を亂るを恐れてなり。（孟子）

【ムリ】無理〔参照〕（ランボウ）（ムコウミズ）（ケッキ）（イカリ）

古句

一　君は尊しと雖も、白を以て黒となせば、臣聽くこと能はず。親は親しと雖も、黒を以て白となせば、子從ふこと能はず。（呂氏春秋）

免の部

【メ】目〔参照〕（ミル）（キクとミル）

古句

一　目鏡を失へば、以て鬚眉を正すなく、身道を失へば、以て迷惑を知るなし。（韓非子）

二　目は、自ら見るに短なり。故に鏡を以て面を觀る。智は、自ら知るに短なり。故に道を以て己を正す。（韓非子）

三　目は、毫末を見れども、其の睫を見ず。（史記）

四　目光炬の如し。（南史）

【三】他人の過失は、知り易くして、自己の缺點の、知り難きに喩ふ。

五　一葉目を蔽へば、泰山を見ず。兩豆耳を塞げば、雷霆を聞かず。（鶴冠子）

六　視は、▲結繪の間を離れず。（徐偉長）

七　目は、百歩の外を見れども、其の眥を見ること能はず。（韓非子）

八　口は嘉味を貪らず、耳は逸聲を樂まず、目は色に淫せず。（國語）

【メアテ】目當〔参照〕（モクテキ）

【メイヨ】名譽〔参照〕（コウミョウ）（ヒョウバン）

古句

一　好事門を出でず。惡事千里に傳はる。（事文類聚）

二　功名、日月と光を爭ふ。

三　功成り、名遂げて身退くは、天の道なり。（老子）

四　功名を▲「竹帛に垂る」。

五　功名を青史に垂る。

【五】耳目の、はかなきを言へるなり。

【六】▲帶の結目なり。

【一】善事の、世に知れ難くして、惡事の、傳はり聞え易きを言へり。

【二】名譽の、世に、盛にかゞやく樣の形容。

【四】▲歷史の上にのこすなり。

【五】意、上に同じ。

【七】▲人民に、恩徳を施すなり。△國家に對して、功を立つるなり。×功勞を、石碑などに刻むなり。◎詩歌にうたはるしなり。

【九】▲野卑なる論議をなして、世俗の仲間となるなり。△世俗と、行動を同じくする意。

【一〇】他人の爲に、功名せられたるを、殘念がりて言ふ語。

【一二】▲一見の明ある人をいふ。

【一四】▲せま苦しき小路。△屋根のもる家。×極めて狭少の所有地。

【一五】君子の、人を識るは、天地の公道に基きて、これを爲す。故に、後世に至りても、これを否定すること能はず。

【一六】大なる名を、千萬年の後にまで傳ふる意。

【一七】古人の名譽は、今に至るも衰へずして、其の人の、生きありし時代と、かはれる所なし、となり。

【一九】其の名譽は、千萬世の後まで輝くにもせよ、そはしたる後のとなり。思へば、さびしきことかな、の意。

【二〇】たとひ、身死して、龍門原のほとりに葬られても、其の名は、後世に傳りて亡びず、となり。

【二二】▲事實なきなり。△僞善を以て、成したる名は、久しからずして亡ぶるなり。

【二三】我が面前にて、人の追從して譽むるとも、陰にて、とかくの惡評を言はて而して泯びず。（歐陽修）

一六　鴻號を無窮に熙む。（韓愈）

一七　今に至るまで、人の耳目を照らし、赫々として前日の事の若し。（韓愈）

一八　富貴は一朝にして、名は不朽なり。（蘇軾）

一九　千秋萬歲の名も、寂寞たり身後の事。（杜子美）

二〇　龍門原上の土。骨を埋むれども名を埋めず。（白樂天）

二一　功は、▲虛を以て成すべからず。名は、僞を以て立つべからず。（班孟堅）

二二　名堙滅して、稱せられず。（司馬遷）

二三　其の前に譽あらんよりは、其の後に毀なきにいづれぞや。（韓愈）

二四　但看る古來盛名の下。終日坎壈其の身に纏はる。（杜甫）

二五　聲名、寰宇に冠たり。（駱賓王）

六　仕官して將相に至り、富貴にして故郷に歸るは、これ人情の榮とする所にして、今昔の同じき所なり。（歐陽修）

七　▲「德生民に被り」て、△「功社稷に施し」、×「これを金石に勒し」、◎「これを聲詩に播き」て、以て後世に耀かし、無窮に垂る。（歐陽修）

八　勇士は死を怯れて、名を滅すことをせず。（魯仲連）

九　▲「卑論して俗に儕し」、△「世と與に浮沈し」て、榮名を取る。（司馬遷）

一〇　豎子をして、名を成さしむ。（史記）

一一　身を内に修め、名を外に成す。（漢書）

一二　▲「聖知の士」は、名成りて毀たれず。（戰國策）

一三　壯士、死せざれば即ち已む。死せば即ち大名を擧げん。（史記）

一四　彼の大儒は、▲「窮閭漏屋に隱れ、×「置錐の地」無しと雖も、王公もこれと名を爭ふこと能はず。（荀子）

一五　君子の譏は、これを簡冊に著して昭明し、これを百世に垂れて而し

るいは、心に快からぬことなり。

【二四】▲思ふにまかせぬ苦しき思。如何に盛なる名譽をに、なへる人にても、欲望度なきは、足ることを知らずして、寸時も、心の平和を保ち難きは、なさけなきことなり。

【二五】名譽は、天下第一なり。の意。

【二六】名譽の盛なること、實際の事實以上なりとの意。

【二七】支那の漢水は、東南に流るゝ川なり。此の川の、西北に流れざる限りは、功名も富貴も、決して久しく續かぬ世の中なり、となり。

【二八】▲かんばしき名。

【二九】▲とり所のある人物、の意。

【三〇】▲朝廷。△物品買の行はるゝ所。

【三一】名の、廣く、世に知れ渡る意。

【三四】▲川の、源に向ひて、逆流するなれば、△人信ならざれば、名を得難し、となり。

【三五】民間に名高き士には、それ相應の實あり、との意。

【三六】▲跡を追ひ、隨ふなり。生命を捧ぐるなり。△大名の家老。×君の家老。

【三七】名譽は、求めずして、意外の邊より來ることあり。又、全からんことを求めて、却りて、世の毀を受くることあり、となり。

【三九】人貧なれば、禮節を顧るの暇なし。生活に事かゝざるに至りて、始めて、名譽の、恥辱のといふことを知る、となり。

二六　聲聞、情に過ぐ。（孟子）

二七　功名富貴、若し長へに在らば、漢水も、亦應に西北に流るべし。（李太白）

二八　▲芳を百世に流す。（晉書）

二九　芳を千里に流す。

三〇　人の、己を知らざるを患へずして、▲人を知らざるを患へよ。

三一　事は、成り難くして敗れ易く、名は、立ち難くして廢れ易し。（淮南子）

三二　名を爭ふ者は朝に於てし、利を爭ふ者は市に於てす。（戰國策）

三三　名聲、藉甚なり。（漢書）

三四　▲「水源に倍け」ば、則ち川竭き、「人信に倍けば、則ち名達せず」。（說苑）

三五　名下に虛士なし。（晉書故事）

三六　小人は、則ち身を以て利に殉し、士は、則ち身を以て名に殉し、大夫は、則ち身を以て家に殉し、聖人は、則ち身を以て國に殉す。（莊子）

三七　虎らざるの譽あり。全きを求むるの毀あり。（孟子）

三八　豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。（歐陽修）

三九　倉廩實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る。（管子）

四〇　名利に使はれて、靜かなる暇なく、一生を苦しむること、愚かなれ。（徒然草）

西諺

一　盛名の下には、大敵あり。（日耳曼）

二　令名は、美貌より貴し。（英吉利）

三　名譽は、猶河流の如し。遠ざかるに隨ひて、益〻廣大なり。（英吉利）

四　名譽は、市場に於ては、片肉をだに購ふこと能はず。（英吉利）

五　令名は財産なり。（日耳曼）

六　名譽を失ひたる人は、生ける死人なり。（西班牙）

七　名譽は、時に故なくしてこれを得、又故なくしてこれを失ふことあり。（英吉利）

八　令名を得るの第一歩は、善良なる生活なり。然して其の第二歩は、善良なる行爲なり。（英吉利）

九　尊敬せらるゝには、愛せらるゝに若かず。（英吉利）

古歌

一　ますらをは名をし立つべし、萬代に
　　聞き繼く人も、語り繼くがね。（萬葉集家持）

二　いざ櫻われも散りなん、一盛り
　　ありなば人に、憂目みむなん。（古今集そうぐ）

三　命より名こそをしけれ、武夫の
　　道にかふべき、道しなければ。（森泊親王）

四　をのこやも空しかるべき、萬代に
　　語り繼ぐべき、名は立たずして。（萬葉集憶良）

【メイリョウ】明瞭〔參照〕（アキラカ）

【メイレイ】命令〔參照〕（テンシ）（キミ）（キミとタミ）（キミとシン）

古句

一　朝に令して、暮に改む。

【メカケ】妾〔參照〕（ツマ）（オンナ）（ビジン）（ハクジョウ）

古句

一　綠を衣として、黃を裏とす。（詩經）

【メグミ】惠〔參照〕（アワレミ）（ドウジョウ）（アイ）

古句

一　澤草木に及び、仁率土に蒙る。（王符）

二　君恩は雨露の如く、君威は雷霆の如し。（白居易）

三　陰德ある者は、必ず陽報あり。（淮南子）

【一】▲衣服の表なり。賤妾を寵して、正妻を疎んずる意。

【二】▲海内といふに同じ。

【三】君に、恩威、二つながら具はれる形容。

【三】▲人知れず施す恩德なり。△人の目

に立ちて來る善報なり。

【五】猶、再生の恩と言ふが如し。

【六】▲恩惠に感ずるは、人の常情なり。

【八】▲四方に、輝きわたる意。

【九】▲水のつきたる澤。仁惠の、大なる形容。

【一〇】▲冷えたる灰。意、（九）に同じ。

【一一】▲窮乏して、生活にさしつかふる意。

【一二】其の召使ふ所の者より、感謝せらるゝ程の慈悲ふかき人は、國政にあづかれば、能く、其の民をあはれむの人なり。

【一三】▲報謝を得んことを念ふなり。疑はしきは、爲すことなかれ、となり。

四　恩甚しければ怨生じ、愛多ければ憎至る。（元倉子）

五　死人を起し、白骨に肉す。（國語）

六　▲「情は、恩のために使はれ」、命は、義に緣りて輕し。（後漢書）

七　刑を設くる者は、輕きを厭はず。德を爲す者は、重きを厭はず。（新語）

八　聖德天地に充塞し、▲「四表に光被す」。（漢書）

九　▲窮澤をして流を生じ、枯木をして榮を發せしむ。（曹植）

一〇　煙を寒灰の上に起し、華を已枯の木に生ぜしむ。（魏志）

一一　君子は急を周ひて、富めるに繼がず。（論語）

一二　僮僕の、その恩を稱するは、以て政に從はしむべし。（文中子）

一三　人に施しては、愼んで念ふこと勿れ。施を受けては、愼んで忘るゝこと勿れ。（淮子玉）

一四　以て取るべし、以て取るなかるべしといふには。取れば廉を傷る。以て與ふべしといふには、以て與ふるなかるべし、與ふれば惠を傷る。以て死すべし、以死するなかるべしといふには、死すれば勇を傷る。（孟子）

【一五】▲恩德の、大なる者なり。人、其の大恩に感じて、小怨を忘るゝなり。

【一七】▲己の身に引きくらべて、他人の心を思ひやるなり。同情を向くなり。△士卒の氣力の、日增しに振ふなり。

【一八】恩德を、部下に施せば、部下の其の將命を重んずること深く、隨ひて、敵をにくむの情、いよ〳〵切なり。

一五　▲大德は、小怨を滅ぼす。（左傳）

一六　君となりては惠、臣となりては忠、父となりては慈、子となりては順、この四者は、人の大節なり。（孔安國）

一七　良將の軍を統ふるや、▲「己を恕し」て人を治め、惠を推して恩を施す。△「士力日に新なり」。（黃石公）

一八　良將の用兵は、常に積德を以て積怨を擊ち、積愛を以て積憎を擊つ。何か故にか勝たざらん。（淮南子）

一九　遍き御うつくしみ、秋津島の外まで及び、廣き御惠み、春の園の花よりも芳し。（千載集序）

二〇　遍きおほんうつくしみの波、八洲の外まで流れ、廣き御惠のかげ、筑波山の麓よりもしげし。（古今集序）

西諺

【一】神は、悪を罰すれども、又、温かき慈悲をもたれ給ふ、となり。

【二】他人の困窮を救はんとして、己の、貧乏に陥るを、愚も知らざるは、と謂ふべし。

【三】▲日光の、穀蔽の陰にも達する如く、其の恵の、遍く一般に及ぶなり。

【四】筑波山は、群山簇立の上に、峙立する山なり。故に、此方彼方に、日光の直射せざる、陰處多し。

【五】▲取るべき長所。▲用ふべき才能。

一　神は、双手を以て人を打たず。（以太利）

二　他人の爲に、自己の口を忘るゝは、大愚なり。（西班牙）

古歌

一　天の下誰かは漏れん、「日の如く
　　数しも別かぬ」、君がめぐみは。（風雅集宗秀）

二　筑波山、このも彼の面に蔭はあれど、
　　君がみ蔭に、増す蔭はなし。（古今集讀人不知）

【メクラ】盲〔参照〕（カタワ）

古句

一　盲目は業専らなり。藝に於ては必ず精し。（韓愈）

二　獨り目に盲なるのみ。其の心は、則ち能く是非を別つ。（韓愈）

三　▲所得なき者は、乃ち宜しく盲を以て廃せらるべし。所能ある人は、盲すと雖も、當に俗輩にこそ廃せらるべけれど、當に古人の道を行ふ者に廃せらるべけんや。（韓愈）

四　耳五聲の和を聴かざるを、聾となす。目五色の章を別たざるを、昧となす。心德義の經に則らざるを、頑となす。口忠信の言を言はざるを、闇となす。（左傳）

五　蒼天に月日の光なく、闇夜に燈暗うして、五更の雨も止むことなし。（論曲蟬丸）

【メグル】回

古句

一　釣旋り穀轉じ、周りて復巾る。（淮南子）

二　循環の、端なきが如し。（孫子）

【メグリアワセ】運合〔参照〕（ウンメイ）

【メサドイ】目敏〔参照〕（チシャ）（チエ）（ミル）（サドイ）

古句

【一】陶鈞の如く旋り、車穀の如く轉じて、又、もとに還るなり。

【五】盲目なる者の、心の形容。

一　明者は、遠く未萌に見、智者は、危きを無形に避く。（史記）

二　明、萬里の外を見る。（後漢書）

三　▲離朱の明は、毫末を百歩を外に察すれども、水を下ること尺なれば、淺深を見ること能はざるは、目の明ならざるにあらず、其の勢の見難ければなり」。（慎子）

四　離朱の明、▲公輸子の巧も、規矩を以てせざれば、方圓を成すこと能はず。（孟子）

【三】▲支那、古代の明視の人。△その見難きは、自然の理法なり、との意。

【四】▲支那、古代の技巧の人。△規（ぶんまはし）、圓をかく器械。矩（まがりがれ）、方形をかく器械なり。

【メシタ】　目下　〔参照〕（メシツカイ）（ツカイガラ）（ツカイカタ）

西諺

一　犬を打たんと欲すれば、容易に棒を見すことを得べし。（以太利）

【メシツカイ】　召使　〔参照〕（ツカイカタ）（ツカイガラ）（メシタ）

西諺

一　人若し犬をして、己に從はしめんと欲すれば、これに麵包を與へざるべ

【一】召使の者を、いちめんと思へば、何程にても、其の口實を見出すことを得、となり。

【二】召使ふ者をして、從須ならしめんには、これに、相當の利益を與へよ、となり。

からず。（和闘）

【メズラシイ】　珍　〔参照〕（シンキ）

古句

一　野物は犧牲とならず。雜學は通儒とならず。（尉繚子）

二　盲龜の、浮木に値ふが如し。（法華經）

三　鳳、▲朝陽に鳴く。

四　絶えて無くして、僅にあり。（蘇軾）

五　盲龜の浮木、優曇華の花待ち得たる心地す。（諸曲賞盛）

【メダツ】　目立　〔参照〕（スグレル）（ヌキンデル）

古句

一　日月と光を爭ふ。

二　美服すれば、人の指さんことを患ふ。高明は、神の惡に逼る。（張九齡）

【一】野獸は、奇なりと雖も、神前に供すべからず。雜學は、大政に施すべからず、となり。

【三】世に稀なる美事に喩ふ。▲旭の光のさす處を言ふ。

【四】極めて、稀にある意。

【二】人の目に立つ者は、害を招き、富貴に過ぐれば、神の咎を受く、との意。

三　白鶴、鷄群に立つ。

四　嶄然として頭角を見はす。（韓愈）

【メツボウ】滅亡〔参照〕（ホロビル）

【メデタイ】慶賀〔参照〕（ヨロコビ）

毛の部

【モ】喪〔参照〕（イミ）（シヌ）（ワカレ）

【モウシワケ】申譯〔参照〕（イイグサ）

古句

一　小人の過は、必ず文る。（論語）

【モクゼン】目前〔参照〕（メノマエ）

【モクテキ】目的〔参照〕（ノゾミ）（ココロザシ）

古句

一　糜を追ふ狗は、兎を顧みず。（漢書）

【一】大なる利を見込む者は、小なる利に、目をくれざる意。

二　日暮れて、道遠し。（史記）

三　鐵硯、未だ穿たず。

【モクロミ】目論〔参照〕（ケイカク）（ハカリゴト）（シゴト）

古句

一　算に遺策なく、畫に失理なし。

【モダエル】悶〔参照〕（ハンモン）（クルシミ）（シンパイ）

【モチイカタ】用方〔参照〕（ツカイカタ）

【モチマエ】持前〔参照〕（セイシツ）

【モテアソブ】玩〔参照〕（タワムレ）（バカニスル）

古句

一　「人を玩べ」ば德を喪ひ、「物を玩べ」ば志を喪ふ。（書經）

【モテナシ】饗〔参照〕（キャク）（オウセツ）（インショク）（サカモリ）（ヨウ）（リョウリ）

【二】日的遠くして、年老いたに喩ふ。

【三】宋の宋維翰の故事。失敗に遇ひても、猶、志の堅きに言ふ。

【一】▲君子を侮蔑するなり。△珍奇の僞に、耳目を役せらるゝなり。

一　五味を重ねて、前に方丈にす。（漢書）

二　食前方丈。（孟子）

三　尊客の前には、狗をも叱せず。（曲禮）

四　履を倒にして迎ふ。（魏志）

五　大方「振まひて興ある」よりも、興なくて、安らかなるが優りたるなり。客人の饗應なども、「序をかしき樣に取做したる」も、誠によけれども、只「その事となくて取出でたる」、いとよし。（徒然草）

【一】方一丈の場に、食饌を並べ立つる意。【二】意、（一）に同じ。【四】大に、人を優待する意。【五】▲興あらせんとして、色々にたくなむなり。△其の場合に、似つかはしき樣に、たくなむなり。×別段に、何といふことなしに、酒肴を取出すなり。

【モト】本〔參照〕（モトとスエ）

古句

一　君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、それ仁をなすの本か。（論語）

【モトスエ】本末〔參照〕（モト）（ゲンインとケッカ）

古句

一　▲「法の生ずるや、以て仁義を輔く」。今法を重くして義を棄つ。是冠履を貴びて、頭足を忘るゝなり。（淮南子）

二　影は、曲物の爲に直からず。響は、清音の爲に濁らず。（淮南子）

三　形狂れば、則ち影曲る。直ければ、則ち影正し。（列子）

四　其の心を正しうせんと欲する者は、先其の△「意を誠にす」。（大學）

五　末大なれば必ず折れ、尾大なれば掉はれず。（左傳）

六　▲「楊子、逵路を見て哭す。其の以て南すべく、以て北すべきが爲なり。▲「墨子、練絲を見て泣く。其の以て黄とすべく、以て黑とすべきが爲なり。（淮南子）

七　其の本を修むることを事とすべきを知らずして、其の末を治むることを務むるは、是その根を釋てゝ、其の枝に灌ぐ者なり。（淮南子）

八　▲千歳を見んと欲すれば、今日を審かにし、億萬を知らんと欲すれば、一二を審かにす。（荀子）

【一】▲法律は、仁義の道の、世に行はるる樣、これをたすくる爲のものなり。【三】行爲は、心の正邪の影なり、との意。【四】智慮の總名なり。▲明智の示す所に從ひて、私欲に動かされざる意。【六】本同じくして、末異なるを歎じたるなり。▲△共に、支那古代の道德家。【八】▲千年後の未來の意。

【九】▲根本に於て、僅少の過失を生ずる意。

【一】▲事を好むが爲に、禍にあふなり。△利を好む者は、心に足ることを知らずして、常に不足を感じ、心中苦痛のたゆることなし。

九　其の本を正せば、萬事理る。これを「毫釐に失す」れば、差ふに千里を以てす。（漢書）

一〇　君子は始を愼む。差ふこと若毫釐なれば、繆るに千里を以てす。（禮記）

一一　毫釐の差は、千里の謬りを致す。

一二　善く醫する者は、寢食を先にして、醫藥を後にす。（文中子）

西諺

一　清き水は、清き源より來る。（拉典）

【モトデ】本手〔參照〕（シホン）

【モノオシエ】物敎〔參照〕（キョウイク）（オシエ）（イマシメ）（イサメ）

【モノズキ】物好〔參照〕（シンキ）

古句

一　事を好む者は、未だ嘗て中らずんばあらず。利を爭ふ者は、未だ嘗て窮せずんばあらず。（淮南子）

二　▲家鷄を輕んじて、野雉を愛す。（法華苑）

三　無益の事を爲して時を移すを、愚かなる人とも、僻事する人とも謂ふべし。國の爲、君のため、止むことを得ずして、爲すべきこと多し。其の餘の暇幾何ならず。（徒然草）

【モミジ】紅葉〔參照〕（アキ）（ナガメ）（シカ）

古句

一　一夜の林霜に、葉盡く紅し。（溫庭筠）

二　▲「嵐に隨ふ落葉は、蕭瑟を含み」、△「石に濺ぐ飛泉は、雅琴を弄ぶ」。（朗詠集源順）

三　▲「堪へず」紅葉青苔の地。△「又是の涼風暮雨の天」。（白居易）

四　林間に酒を煖めて、紅葉を燒き、▲「石上に詩を題して、綠苔を拂ふ」。（白居易）

【二】普通のものに飽きて、新奇の物を愛するなり。▲家に飼ふ鷄なり。

【三】▲枯葉の、嵐にさそはれて、飛び散る音は、極めてさびし、となり。△高處より落つるたき水の、石にそゝぐ音は、琴を彈ずるが如き、優雅の趣きあり、となり。

【三】▲惑に堪へざるなり。△秋風冷かに、菲天雨を催す如き折には、更に一層の惑を催す、となり。

【四】▲綠苔を打拂ひて石上に座を占め、さて詩を考ふるなり。

【五】紅葉の林の形容。

五　黄纈纈の林は、寒うして葉あり。（白樂天）

六　秋は棠梨を染めて、葉半は紅なり。（王周）

七　秋葉に風吹いて、黄颯々たり。（張謂）

八　秋の山を見れば、織る人なき錦とおぼえ、紅葉の葉の嵐に散りて、曇らぬ雨と聞こゆ。（大堰川行幸和歌序）

九　露の時雨も時めきて、四方に色添ふ初紅葉。（謠曲花筐）

古歌

一　日を經つゝ、深くなり行く紅葉ばの、色にぞ秋の、程は知りぬる。（後拾遺集經衡）

二　梢にて飽かざりしかば、紅葉ばの散りしく庭を、拂はでぞ見る。（詞花集資通）

【モモ】桃

〔參照〕（ハル）（ハナ）（ナガメ）

古句

一　二桃、三士を殺す。

二　夜雨偸かに濕ひて、▲「曾波の眼」新たに嬌び、曉風綏かに吹いて、△「不言の唇」完咲む。（朗詠集紀納言）

三　春來りては、遍く是桃花の水なり。▲仙源を辨せず、何の處にか尋ねん。（王維）

四　山桃復野桃、日々紅錦の幅を曝す。（紀齊名）

【モンジ】文字

〔參照〕（ショ）

古句

一　文字鬱律として、蛟蛇走る。（蘇軾）

二　强ひて偏旁を尋ねて、點畫を推す。（蘇軾）

三　言は心の聲なり。書は心の畫なり。（揚子法言）

四　書は、姓名を記すに足るのみ。（史記）

五　眞は立つが如く、行は行くが如く、草は走るが如し。（東坡志林）

【一】齊の桓公、晏子の謀を以て、二桃を以て、三勇士を殺し、故事。

【二】▲美人の眼の意。桃花を指せり。△桃花の形容。

【三】▲桃源の仙郷を指せり。

【四】山野に、桃花の咲ける樣は、紅地の錦をさらしたるが如し、となり。

【一】文字に、氣品あり、筆勢よき樣の形容。

【二】文字の、讀み難くして、判じながら讀む意。

【四】項羽の言ひし所なり。學問の、深く究ずに足らざる意。

六　驚蛇の、草中に入るが如し。

【モンドウ】問答　〔参照〕（トイとコタエ）（コタエ）

西諺

一　發問は、學者となるの道なり。（英吉利）

【モンバツ】門閥　〔参照〕（イエガラ）

也の部

【ヤクソク】約束　〔参照〕（チカイ）（マコト）（シンヨウ）

西諺

一　約諾を爲すに速かなる人は、これを忘るゝことも亦速かなり。（英吉利）

二　約諾を重んぜざる人は、他人に向ひて、己を欺かんことを敎ふるに等し。（英吉利）

三　約諾して遲延せんよりは、寧ろ初めより否むに若かず。（丁抹）

【ヤクニン】役人　〔参照〕（オウヤケとワタクシ）（クライ）（ホウシウ）（ケンリョク）

【六】草書の、勢ある形容。

【一】問を發して疑をとけば、智をひろめ、識を求むるを得べし。

古句

一　毀なく、譽なく、「旅進旅退し」、位を竊んで祿を苟し、員に備りて身を全うす。（王西園）

二　官私曲を行へば、失ふ時に悔ゆ。（寇萊公）

三　凡そ其の位に居ては、其の道を直くせんことを思ふ。道苟も直ければ、死すと雖も回ぐべからざるなり。如しこれを回ぐれば、亟かに其の位を去るに若くは莫し。（柳宗元）

四　「官守ある者、其の職を得ざれば則ち去る」。「言責ある者、其の言を得ざれば則ち去る」。（韓愈）

五　君子其の位に居れば、其の官に死せんことを思ふ。（韓愈）

六　去就出處、何ぞ常あらん。惟「義にこれ歸す」。（韓愈）

七　官は「宦の成る」に怠り、病は少しく愈ゆるに加はる。（說苑）

八　名と器とは、人に假すべからず。（左傳）

【一】主義もなく、衆人に識もなく、つれて、進退するなり。無能の官人の、徒に祿位を貪るをそしれるなり。

【二】官職に在りて、其の職務を完うすることを得ざる者は、早く其の官を失ふなり。

【四】官職を去るべし、と職を去るなり。△直言を、其の君に奉るべき地位に在りながら、直言し得ざる者は、早く其の地位を去るべし、となり。

【六】官職を捨てゝ去ると、官職に据りあると、となり。△出でゝ官につくと、家に在りて、仕へざると、なり。×道理の示す所に從ひて、進退を決すべし、となり。

【七】得意の官職に進むなり。

【八】官位なり。▲官位に相當する、車服の類なり。

【九】俸給の爲に、身の自由を拘束せらるるを言ふ。

【一〇】▲道理の、行るるなり。

【一一】其の召使ふ者より、感謝せらるる程の慈悲ぶかき人は、國政にあづかれば、亦、其の民をあはれむべし。

【一五】▲官吏の多きに過ぐるは、人民の煩累とする所なり。

【一六】無能の小人官に在りて、徒に厚祿を食り受くるに喩ふ。

【一八】▲名利の念を去らざる俗人は、到底、仙人の仲間入は出來ず、となり。△凡庸の才は、高き官位を望むべからず、となり。

九　五斗米の爲に腰を折る。（晉書）

一〇　爵高き者は、人これを妬み、官大なる者は、主これを惡み、祿厚き者は、怨これに逮ぶ。（列子）

一一　國▲「道あれ」ば則ち仕へ、國道なければ則ち隱る。（史記）

一二　僮僕その恩を稱するは、以て政に從はしむべし。（文中子）

一三　任重くして道遠き者は、地を擇ばずして息ひ、家貧しくして親老いたる者は、官を擇ばずして仕ふ。（韓子外傳）

一四　文官錢を愛せず、武臣死を惜しまずんば、天下太平ならん。（宋史）

一五　獺多ければ魚擾れ、鷹多ければ鳥亂れ、▲有司多ければ百姓困む。（抱朴子）

一六　維鵜梁にあり。其の翼を濡はず。（詩經）

一七　公を以て私を滅すれば、民其れ允に懷く。（書經）

一八　▲「俗骨は、以て蓬萊の雲を踏むべからず」。△「庸才は、以て臺閣の月を攀づべからず」。（朗詠集橘直幹）

【一九】▲頭腦の、精明なるなり。△名珠の產地。×政務の裁決。◎劍の生地。

【二〇】▲無能の意。

【二一】▲官位のこと。無能にして、官位を占むる者の、罪惡を言へるなり。

【二二】治世には、出でて仕へ、亂世には、避いて退くなり。

【二三】▲利得收入の多少を、そろばんにはじくなり。△席次の上下や、俸給の多少を計算する意。×己の力量の、其の官職に適するや否やを考へずして、妄りに、前任者の失策を數へ立つるなり。

【二四】▲武官としては大將、文官としては大臣。

一九　▲精明は、△合蒲の珠に相似たり。×斷割は、◎昆吾の劍も如かず。（朗詠集白居易）

二〇　王者は、天に法りて官を建つ。故に明主は、敢て私を以て授けず。忠臣は、敢て虛を以て受けず。（王符）

二一　人の財を竊むをば、猶これを盜と謂ふ。況んや▲天官を偸んで、以て己に私するをや。罪を以て人を犯せば、必ず誅罰を加ふ。況んや乃ち天下を犯して、咎め無きを得んや。（王符）

二二　趨舍時あり。（司馬遷）

二三　▲「財賄の有無を商り」、△「班資の崇卑を計り」、×「己が量の稱ふ所を忘れて、前人の瑕疵を指す」。（韓愈）

二四　仕官して▲將相に至り、富貴にして故鄉に歸る。これ人情の榮とする所にして、今昔の同じき所なり。（歐陽修）

【二五】▲公卿殿上人に同じ。朝廷のおもたる官人。△立ちたる山林に遊れかくるる形容。×意、上に同じ。◎運のよきと、あしきと、●時に遇ふと、あはぬと、なり。

二五　▲「月卿雲客、」或は出仕を停められて「桃源の跡を尋ね」、或は官職を解かれて「×首陽の愁を懐く」。◎「運の通塞」、●「時の否泰」、夢とやせん、現とやせん。（太平記）

【ヤクメ】役目〔参照〕（ヤクニン）

【ヤシン】野心〔参照〕（ノゾミ）

【ヤスイ・タカイ】難易（参照）（カタイとヤスイ）

【ヤスミ】休〔参照〕（アンラク）（オコタル）（タノシミ）（キママ）

西諺

一　休まんには、先働かざるべからず。（以太利）

【ヤスラカ】安〔参照〕〔アンラク〕〔アンシン〕

【ヤセル】痩〔参照〕（ヨウボウ）

古句

一　痩せたること、天台山上の聖賢僧の、糧を休め粒を絶ちて、孤鶴の形

【一】▲五穀の窓。

【一】▲室人なり。△市人のこと。

【一】色事の、身を害ずる窓。

【三】▲陶潛は、門前に五株を植ふき。△支那にて、楸の名所。

なるが如し。（謝枋得）

【ヤツアタリ】八當〔参照〕（イカリ）（ケッキ）（ランボウ）

古句

一　▲室に怒りて、市に色す。（左傳）

【ヤツレル】窶〔参照〕（オトロエル）（ヨワル）（ビジン）（ビョウキ）

古句

一　蝶粉退き蜂黄褪す。

【ヤナギ】柳〔参照〕（ハル）（ナガメ）（キ）

古句

一　氣霽れては、風新柳の髪を梳る。（朗詠集都良香）

二　東岸西岸の柳、遲速同じからず。南枝北枝の梅、開落已に異なり。（本朝文粹）

三　青絲繰り出す、▲「陶門の柳」。白玉裝ひ成す、△瘦嶺の梅。（朗詠集菅三品）

【五】土塀の邊なる柳の、若芽をふきて、うす綠の色をなすは、何人の家か、となり。

【六】高い柳に、低い柳が、美麗なる建物の側に、不揃に植ゑられてある形容。

【七】▲渡船場のあたり。

【八】▲新芽のふきたる柳のこと。

【九】數本の柳の、力なげに、春風になびく樣の形容。

【一〇】▲桃李の花の、人をしたく悲哀の情を催さしむる所が、面白き所なり、の意。

【一二】柳の、眉の陽氣に感じて、芽をふき出して、しだれある形容。

【一四】門邊の柳も、岸邊の柳も、春風に吹かれて、新芽をふき出して、驛き

【一五】▲柳枝の、水面に垂るゝなり。△水面に柳絮のとびて、水面に散るなり。

【一六】▲漢時の宮殿。

【一七】△池の名。

【一八】▲柳は綠に、烟は青くして、其の色、相和す。

【一八】柳の、春風に吹かれて、綠の若芽をふき出したる窓。

【一〇】春の日光の、池の面を照らして、新芽をふきたる柳の姿を、水面に映じたる樣なり。

四　烟は柳色に添うて、看るに猶淺し。鳥は梅花を踏んで、落つること已に頻なり。（朗詠集巻三品）

五　墻柳誰が家ぞ、麴塵を曝す。（白居易）

六　柳色參差として、畫樓を掩ふ。（司馬禮）

七　▲陌頭の楊柳は、黃金の色。（李太白）

八　白片の落梅は、澗水に浮び、▲「黃梢の新柳」は、城墻より出づ。（白居易）

九　數株の楊柳、春に勝へず。（劉禹錫）

一〇　弱柳青槐、地を拂ひて垂る。（盧照鄰）

一一　憐むべし楊柳は、心を傷しむるの樹、▲「憐むべし桃李は、腸を斷つの花」。（劉延芝）

一二　春は枝條に入りて、柳眼低る。（元稹）

一三　柳に氣力無うして、條先動き、池に浪文ありて、氷盡く開く。（白樂天）

一四　門柳復岸柳、風麴塵の絲を綰ぬ。（朗詠集紀齊名）

一五　▲「水を拂ふ」「柳花は、千萬點」。樓を隔つる鬻舌は、兩三聲。（元稹）

一六　▲長樂の鐘聲は、花外に盡き、△龍池の柳色は、雨中に深し。（李嬌）

一七　梅花は雪を帶びて琴上に飛び、▲「柳色は烟に和し」て、酒中に入る。（章孝標）

一八　柳は風に欺かれて、綠漸く垂れたり。（諸曲關寺小町）

古歌

一　春の日の、かげそふ池の鏡には、
　柳の眉ぞ、まづは見えける。（後撰集讀人不知）

二　如何なれば、氷はとくる春かぜに、
　結ぼゝるらん、青柳の絲。（詞花集季遠）

三　春風の、霞ふきとく絕間より、
　亂れてなびく、あを柳のいと。（新古今集殷富門院大夫）

四　道のべに、清水ながるゝ柳かげ、
　　暫しとてこそ、立止りつれ。（新古今集西行）

五　淺緑いとよりかけて、白露を
　　玉にもぬける、春のやなぎか。（古今集俊通照）

六　近くてぞ色は勝れる、青柳の
　　糸はよりてぞ、見るべかりける。（拾遺集能宣）

【ヤバン】　野蠻　〔參照〕（ムガク）

【一】禮儀もなく、作法もなくにあつまりて、獸類の如く情誼もなく、一致もなく、鳥類の如く離散す、となり。

【二】水草のよき處を求めて移住し、定れる住居なく、鳥類のおどろき立つ如く、忽ちに他處に移轉し去る、となり。

【三】▲なめし皮の（うてはめ）。△毛織の幕。×なま肉。◎牛乳のしたぢ。

【四】▲（むしろ）をしきて、居るなり。△飛れ統ぶるなり。

【五】強迷不靈の蠻民は、德を以て撫し難し。宜しく力を以て御すべし、となり。

【六】▲支那北方の蠻族たる胡人は、常に、馬上に跨りて、他に家居を設けず、となり。

【七】▲野蠻の民の稱。△帝王政治の行はる、文明の國を意味す。

【八】▲入寇するなり。

【九】▲兵器甲冑を取よろひても、袵を上に、安臥するなり。△心地する如き人の意。

一　獸聚して鳥散す。（圭父傳）

二　泉甘く、草美にして、常處なし。鳥驚き、獸骸いて、爭うて馳逐す。
　　（歐陽修）

三　▲ゆこう（ぜいまく）韋韓毳幕、以て風雨を禦き、×（せんにく）羶肉◎（らくしゃう）酪醬、以て饑渴に充つ。（李陵）

四　畜に隨ひて（てんきょ）蔫居し、禽獸の（きんじゅう）行、虎狼の心、上古より未た攝（せつ）することを能はず。（終軍）

五　戎狄（じゅうてき）是膺（これよう）ち、荆舒（けいじょ）これ懲（こら）す。（詩經）

六　▲（こじん）「胡人は、鞍馬を以て家と爲し」、射獵（しゃれふ）を俗（ぞく）となす。（歐陽修）

七　▲（いてき）夷狄は、△（ちゅうごく）中國の治を以て治（をさ）むべからず。譬（たと）へば禽獸の如し。其の大治（だいち）を求むれば、必ず大亂に至る。（蘇軾）

八　題（ひたひ）に▲（きざ）雕み、齒（は）を黑くし、人肉を得て祀（まつ）る。（楚辭）

九　▲（きんかく）「金革を袵（しとね）とし」、死して厭（いと）はざるは、「北方の强（きょう）」なり。（中庸）

一〇　夷狄（いてき）の人は、貪（むさぼ）りて利を好み、髮（かみ）を被（かうむ）り袵（じん）を左にし、人面（にんめん）にして獸心（じしん）なり。（左傳）

【ヤヒ】　野卑　〔參照〕（ヤバン）

【ヤブサカ】　吝　〔參照〕（シワイ）

【ヤブレル】　敗（破）　〔參照〕（シッパイ）（イクサ）

【ヤマ】　山　〔參照〕（ヤマジ）（ヤマガ）（タキ）（ナガメ）

【一】幾層にも重れる山の岑が、青々として、空高く聳ゆる形容。

【三】▲林にかゝる霧（もや）の類。△夕方に至りて、山際に起る雲なり。山間の景の、終日の間に、種々に變化するを形容せるなり。

【四】▲東方に向ひて進むの意。

【五】▲大木などの生ひざるはげ山に、眞昼の秋日の、輝くなり。

【六】大氣の晴くもりにより、山々の景色に、變化あるなり。

【七】▲野生の花。△山間に於ける、春夏秋冬の景色なり、との意。

【八】▲遠山の形容。△漠布の、高く懸りて、白雲の中より落つるかと、怪まる、との意。

【一】▲苔むしたる巖の、削りたる如く、突出てあるは、何者の細工ぞ、となり。△藍を以て、染めなしたる如き青き淵は、誰が家の仕業にか、となり。

【二】▲支那に、五嶺あり。其の中の最大なるを、大瘦といひて、梅に名あり。

【四】▲青き山岑の形容。

【八】▲ゆる〳〵と、うねりくれる樣の形容。△ゆるやかにして、急峻ならざるなり。

【一九】樵夫の、木をきる音の、丁丁とひびくは、其の音なきよりも、一層もの淋びし、となり。

古句

一　層巒翠を聳かして、重霄に出づ。（王勃）

二　深山大澤は、龍蛇を生ず。（左傳）

三　日出でゝ林霏開け、雲歸り」て巖穴暝く、晦明變化する者は、山間の朝暮なり。（歐陽修）

四　連山は波濤の若く、奔走して「東に朝す」るに似たり。（岑參）

五　「荒山秋日午なり」。獨り上りて意悠々たり。（柳宗元）

六　陰晴に、衆壑殊なり。（王維）

七　▲野芳發きて幽香あり。佳木秀でゝ繁陰あり。風霜高潔に、水落ちて石出づる者は「山間の四時なり」。（歐陽修）

八　▲黛色は、迥に蒼海の上に臨み、泉聲は遙かに白雲の中に落つ」。

九　南千山を望めば、黛色の如し。（皇甫冉）

一〇　日を礙る暮山は、青うして簇々たり。天を浸す秋水は、白うして茫々たり。（朗詠集白居易）

一一　山復山、「何の工か青巖の形を削成したる」。水復水、「誰が家か碧潭の色を染出したる」。（朗詠集江澄明）

一二　勝地は、本來定主なし。大都、山は山を愛するの人に屬す。（白居易）

一三　五嶺蒼々として、雲往來す。但憐む大瘦萬株の梅。（朗詠　菅三品）

一四　空に浮ぶ積翠は、雲煙の如し。（蘇軾）

一五　山は高きを厭はず、水は深きを厭はず。（魏武帝）

一六　山峭しき者は崩れ、澤滿つる者は溢る。（晏書）

一七　山靜かにして太古に似、日長くして少年の如し。（唐庚）

一八　川は、▲委蛇を以ての故に能く遠く、山は、▲陵遲を以ての故に能く高し。（說苑）

一九　伐木丁丁として、山更に幽なり。（杜甫）

二〇　積土山を成せば、風雨興り、積水淵を成せば、蛟龍生ず。（荀子）

二一　幽花野草、其の名を知らず。風吹き霧濕ひて、澗谷に香し。（歐陽修）

二二　連峯天を去ること、尺に盈たず。枯松倒に懸りて、絶壁に倚る。（李太白）

二三　千巖萬壑は、▲「松檜響き」、懸崖巨石は、▲「流淙を飛ばす」。（歐陽修）

二四　山耶雲耶、遠くして知る莫し。煙空しく雲散じて、山依然たり。（蘇軾）

二五　山は、其の高を致して雲起り、水は、其の深を致して蛟龍生ず。（淮南子）

二六　山頭には、夜孤輪の月を戴き、洞口には、朝に一片の雲を吐く。（百聯抄解）

二七　それ山と言つば、塵泥より起りて、天雲かゝる千丈の峯、海は苔の露より滴りて、波濤を疊む萬水たり。（諸曲山姥）

二八　山青く山白くして、雲去來す。（百聯抄解）

二九　水廣き者は魚大に、山高き者は木修し。（淮南子）

【二三】▲松や檜の大木に、風の、吹き當るなり。△水玉の、飛び散るなり。

【二四】遥かに見ゆるは、雲か山かと疑ひ見る間に、漸く雲煙か晴れて、山の、依然と存するを見極めたるなり。

【二八】山の、雲かゝれば白くなり、雲去れば青くなるを言へり。

【一】昔より、富士の高峯より、煙の立ちのぼるを見れば、神の御心の中にも、にえ立つ思のおはせばなるべし、との意。

【二】▲木の葉の、落ち散りたる山なり。

【三】▲山中にこもりて、修業する行人（ぎやうにん）。

【四】▲山を、酒のさかなに見立て、又、鳥などの鳴くを、野邊の音樂といひなしたるなり。

三〇　春山は笑ふが如く、夏山は滴るが如く、秋山は洗ふが如く、冬山は睡るが如し。（郭熙）

古歌

一　千早ぶる、神も思のあればこそ、年經て富士の、山も燃ゆらめ。（拾遺集人丸）

【ヤマイ】病　〔參照〕（ビョウキ）

【ヤマガ】山家　〔參照〕（ヤマジ）（ヤマ）（スマイ）（カクレガ）

古句

一　明月時に至り、清風自ら來る。（王羲之）

二　▲空山に人を見ず。但人語の響を聞く。（王維）

三　時には道人と偶し、或は樵者に隨ひて行く。（章應物）

四　▲「山肴に野籟に」、雜然として前に陳ぬ。（歐陽修）

五　峰回り路轉じて亭あり。翼然として泉上に臨む。

【六】人類の住む裟婆とは、全く、かけはなれたる土地あり、となり。

【七】▲年の改れるをも、知らずに居る、となり。

【九】▲都會なれば、毎日夕方になれば、歌舞音曲などの樂みはあれど、の意。

【一〇】▲夜の明くること、の、遲き形容。

【一二】▲家の簷がはの、あたりに、白雲の懸かるにて、高山の上にある家居の形容なり。

【一三】▲人の名利心のこと。△盛者の衰へ、浮の、紅に變するが如き類をいふ。

【一四】▲俗ぼき物とては、一も見當らず、となり。

【一六】▲山中、隱者の居る所をいふ。

【一七】▲終日、茂れる樹の下に坐して、心を慰むる意。△清き泉に、身を洗ひ清めて、心を、すがすがしく保つ、となり。

【一八】▲(くる)にかゝる序詞。

【一九】▲蟬鳴き出して麥熟し、其の收穫もすめば、の意。

【二〇】▲西方は打開けて、眺めの遠きなり。西方極樂淨土に、緣をひけり。△眼を閉ち、心を沈めて、深く考ふるに便宜なり、となり。

六　別に、天地の人間に非るあり。（李太白）

七　山中には曆日なく、寒盡くれども「年を知らず」。（太上隱者）

八　白雲地に滿ちて、人の掃ふなし。（魏野）

九　▲「城中は、日々に歌鐘起れども」、山上は、惟松柏の聲を聞くのみ。（沈佺期）

一〇　林深く霧暗くして、▲「曉光遲し」。（蘇軾）

一一　青山屋上に在り。流水屋下に在り。（蘇軾）

一二　青松路を夾んで生じ、▲「白雲簷端に宿す」。（陶潛）

一三　飛泉の雨は、▲聲聞の夢を洗ひ、落葉の風は、△色相の秋を吹く。（朗詠集高相如）

一四　▲「更に俗物の人眼に當る無く」、但泉聲の、我が心を洗ふあり。（朗詠集白居易）

一五　石に觸るゝ春雲は、枕上に生じ、峰に啣まれたる曉月は、窓中に出づ。（朗詠集橘良幹）

一六　▲山阿寂寥たり。（孔德璋）

一七　高きに昇りて、遠きを望み、▲「茂樹に座して、以て日を終へ」、△「清泉に濯いて、以て自ら潔くす」。（韓愈）

一八　折々に、心なけれど訪ふものは、賤が爪木の斧の音、梢の嵐、猿の聲。これ等の音ならでは、▲「正木の葛青つゞら」、來る人稀なる所なり。（平家物語）

一九　曆も無ければ、月日の立つをも知らず。只自ら花の散り、葉の落つるを見ては、春秋を辨へ、▲「蟬の聲麥秋を送れば」、夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。（平家物語）

二〇　林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。正木のかづら跡を埋めり。谷繁けれど、▲「西は晴れたり」。△「覩念の便」なきにしもあらず。（方丈記）

二一　嵐、妄想の夢を破り、流水清く流れて、浪、塵埃の垢を濯くらん。

（平家物語）

二二 山堆くして、「▲慈山の梢を表はし」、谷靜かにして、「商山洞の苔を敷けり」。岩泉咽びて布を引き、嶺猿叫びて枝に遊び、人里遠くして囂塵なし。（太平記）

二三 遥かなる苔の細道ふみ分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ筧の雫ならでは、露音なふものなし。（徒然草）

二四 雲の往き來し、早き心地して、月の晴れ陰ること、定め難し。（徒然草）

二五 たま〳〵言問ふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、袖を濕す村雨の音。（謠曲蝉丸）

二六 ▲「松風蘿月に言葉をかはす賓客」も、去りて來ることなし。（謠曲江口）

二七 山嵐は、朝に庭を掃ひ、溪月は、夜燭を擧ぐ。（茶花物語）

【二二】▲釋迦の、教法を說きし、印度の靈鷲山の眺めも、かくやと思はる、となり。△支那の昔、四皓とて、四人の老賢者のかくれたりし商山洞の有様も、斯くありけんと思はる、となり。

【二四】山里は、雲たちまちに起り、又忽ちに收る。されば、月のあらはれ、又かくるゝも、定め難きなり。

【二六】風流を愛する客、の意。

古歌

一 山里は、秋こそことに佗しけれ、鹿の鳴く音に、目を覺しつゝ。（古今集忠岑）

二 日ぐらしの、鳴く山里の夕暮は、風より外に、訪ふ人もなし。（古今集讀人不知）

三 秋は來ぬ、紅葉は宿に散りしきぬ、道ふみ分けて、訪ふ人もなし。（古今集讀人不知）

四 我宿は、雪ふりしきて道もなし、踏分けて訪ふ、人しなければ。（古今集讀人不知）

五 山里は、物のさびしき事こそあれ、世の憂きよりは、住みよかりけり。（古今集讀人不知）

六 雪とのみあやまたれつゝ、卯の花に冬こもれりと、見ゆる山里。（後拾遺集道濟）

七 訪ふ人も、暮るればかへる山里に、

八　思ひやれ、訪ふ人もなき山里の、
　　諸共にすむ、秋のよの月。（後拾遺集素意）
　　かけ樋の水の、水ぼそさを。（後拾遺集上東門院中將）

九　日も暮れぬ、人も歸りぬ、山ざとは、
　　峰の嵐の、音ばかりして。（後拾遺集頼實）

一〇　山里は、野べの早蕨萌え出づる、
　　折にのみこそ、人は訪ひけれ。（金葉集正永）

一一　山里の、春の夕暮きて見れば、
　　入相のかねに、花ぞ散りける。（新古今集能因）

一二　自ら音するものは、庭の面に
　　木の葉吹きまく、谷の夕かぜ。（新古今集清輔）

一三　山陰に、住まぬ心は如何なれや、
　　惜しまれし入る、月もあるよに。（新古今集西行）

一四　山ざとに、訪ひ來る人の言ぐさは、
　　この住居こそ、淡しけれ。（新古今集慈圓）

一五　春來てぞ人も訪ひける、山里は
　　花こそ宿の、あるじなりける。（拾遺集公任）

一六　尋ねつる、宿はかすみに埋れて、
　　たにのうぐひす、ひとこゑぞする。（拾遺集範永）

一七　鶯のこゑなかりせば、雪消えぬ
　　山里いかで、春を知らまし。（拾遺集朝忠）

一八　山がつと人はいへども、郭公
　　まづ初聲は、われのみぞ聞く。（拾遺集是則）

一九　住む人も、なき山里の秋の夜は、
　　月の光も、さびしかりけり。（拾遺集範永）

二〇　山里は、冬ぞさびしさ勝りける、

【二〇】草も枯れ、訪ひ來る人もなし、と思へば、との意。

【一】谷の流の形容。

【二】▲山勢の、いろいろに變化するなり。

【五】峰には風ふき、雲結び、谷には、岩間の流の、さびしき音す、となり。

【十】▲面前に、高山の峠つ形容。▲馬に乘りて、高峰の路を過ぐる趣の形容。

【九】▲木の葉の落散りて、さびしき山のこと。

【一〇】▲艸木のしげる樣の形容。

【一二】▲危げなる棧橋を、遮らんとすれば、足もとに、猿の鳴きごゑの聞ゆるなり。

【一四】▲木の葉の露の爲に、衣の濕ふなり。

【一五】▲山の樣子を見るに、尙、この奥にも、山々の連りある如し、となり。▲松杉の、盛に茂るなり。

【ヤマザト】山里　〔參照〕（ヤマガ）

【ヤマジ】山路　〔參照〕（ヤマガ）（リョコウ）（ヤマ）（タキ）

古句

一　▲「人目も草も、かれぬと思へば」。（源宗于）

二　潺々として、兩峯の間より瀉ぎ出づ。（歐陽修）

三　幽花野草、其の名を知らず。風吹き霧濕ひて、澗谷に香しくして、流水盤廻して、▲「山百轉す」。（韓愈）

四　林深うして、山路黑し。（朱熹）

五　山路に日暮れぬ。耳に滿つる者とては、樵歌牧笛の聲のみ。澗の戸に鳥蹄りぬ。眼を遮る者とては、竹烟松霧の色のみ。（朗詠集紀齊名）

六　風雲悽として、其れ憤を帶び、石泉咽んで下に愴む。（孔德璋）

七　溪冷かにして、泉聲苦え、山空しうして、木葉乾る。（高適）

▲「山は、人面より起り」、▲「雲は、馬頭に傍うて生ず」。（李太白）

八　泉聲は危石に咽び、日色は青松に冷かなり。（王維）

九　古木に寒鳥鳴き、▲空山に夜猿啼く。（魏徵）

一〇　▲欝紆として高岫に陟り、出沒して平原を望む。（魏徵）

一一　谷靜かにして、纔かに山鳥の語ひを聞き、▲梯危うして、斜に峽猿の聲を踏む」。（朗詠集江相公）

一二　餘りに山を遠く來て、雲又跡を立ち隔て、入りつる方も白波の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし。（謠曲石橋）

一三　谷深く、石滑かに、羊腸の路を踏んで上れば、雲霧窈溟たり。（太平記）

一四　山路もとより雨なうして、▲「空翠常に衣を濕す」。瞻上ぐれば、萬仞の青壁刀して削り、瞰下せば、千丈の碧潭藍に染めり。（太平記）

一五　▲「山は、奥ある景色」にて、溪路はるかに、▲「松杉黑く」、苔滴りて、卯月の天、今尙寒し。（松尾芭蕉）

一六　頃は、二月始めのことなれば、峯の白雪むら消えて、花かと見ゆる

所もあり。谷の鶯音づれて、霞に迷ふ所もあり。登れば、白雪皓々として聳え、下れば、青山峩々として岸高し。（平家物語）

一七　緑に見ゆる梢には、春の情を殘すかと疑はれ、澗谷の鶯舌こゑ老いて、初音ゆかしき郭公、物知り顔に告げ渡る。（平家物語）

古歌

一　遠ちこちの、たづきも知らぬ山中に、
　おぼつかなくも、呼子鳥かな。（古今集讀人不知）

二　行末は未だ遠けれど、夏山の
　木の下かげは、立憂かりけり。（拾遺集躬恒）

三　▲「秋霧の」、立たまく惜しき山路かな、
　紅葉の錦、をり積りつゝ。（拾遺集讀人不知）

【ヤマとカワ】　山川　〔參照〕（ヤマ）（カワ）（ミズ）（ナガメ）

古句

【一】▲（おび）の如くに、ぐるぐるめぐるなり。△山と山との重り合ひて、入りくむなり。×薄暗くして、物すごきなり。

【二】▲仙人なり。

【三】▲（立たまく）の序詞。

【四】▲山勢の、色々に變化するなり。

【五】山と川との間に、はさまるなり。

【六】山にかこまれ、川に横ぎらるゝ形容。

【七】▲丈の長き竹なり。△岩石にせかるゝ、たきつ瀬のこと。×流水に、山影林影竹影などの、互に映り合ふなり。

一　河水▲縈帶して、△「群山糾紛し、」×「黯として慘悴たり」。（李華）

二　山は高きに在らず。▲僊有れば則ち名あり。水は深さに在らず。龍有れば則ち靈なり。（劉禹錫）

三　山川相繆りて、▲鬱乎として蒼々たり。（蘇軾）

四　流水盤廻して、▲「山百轉す」。（韓愈）

五　山河を表裏にす。（左傳）

六　山河を襟帶にす。

七　崇山峻嶺茂林脩竹あり。又清流激湍ありて、×「左右に映帶す」。（王勃）

古歌

一　七重八重花は咲けども、山吹の
　實のひとつだに、無きぞ悲しき。（後拾遺集兼明親王）

二　限りありて、散るだに惜しき山吹を、

三　▲「いはぬ色」に咲く山吹も、よし野川
　　移り行く春の、影ぞ亂るゝ。（荷田春滿）

【ヤモメ】　寡婦　〔參照〕（ヒトリネ）（オンナ）（フウフ）

古句

一　▲比目鴛鴦、眞に羨むべし。雙び去り雙び來るに、君は見えず。（唐照鄰）

二　孤燈挑げ盡して、未だ眠を成さず。（白居易）

三　▲「鴛鴦の瓦冷えて、霜華重く」、▲「翡翠の衾寒うして、誰と與共にせん」。
（白居易）

四　▲寒蛩を愁へ聽いて、淚衣を濕す。（張仲素）

五　獨り空房に宿して、淚雨の如し。（李太白）

六　夜深うして、忽ち夢る少年の事。夢に啼いて、▲「粧淚紅うして闌干たり」。
（白居易）

（三）▲山吹の花の色は、（くちなし色）といふより、言へるなり。

【一】▲（ひらめ）魚なり。

【三】▲屋上の瓦に、霜の白くおきたる形容。△美麗に温かき衾に寢れても、獨り寢ぬるが、寒き心地す、となり。

【四】▲（ひぐらし）。夕方に鳴く蟬なり。

【六】▲化粧したる美人の顏に、血淚の流るゝ形容。

七　深宮の中に向ひて、春の日の暮れ難きことを歎き、秋の夜の長き恨に沈む。（太平記）

八　▲「翠帳紅閨」に枕並べし床の上、馴れし衾の夜もすがらも、△「同穴の跡ゆめもなし」。（謠曲班女）

西諺

一　富める寡婦は、一眼は泣き、一眼は△笑ふ。（荷葡牙）

古歌

一　▲「なよたけの」夜長き上に、△「初霜の」
　　おきゐて物を、思ふ頃かな。（古今集忠岑）

二　夜半に鳴く、聲に心ぞあくがるゝ、
　　我が身は鹿の、妻ならねども。（金葉集越後）

三　秋ならで、妻よぶ鹿を聞きしがな、
　　折から聲の、身にはしむかと。（金葉集行家）

【八】▲美々しき部屋のこと。△死ぬとなれば、諸共に死にたて、同じ穴に葬られんと、契りし言葉の跡は、更にたのみとならず、となり。

【一】▲夫の死を、悲しむなり。△財產の自由なよろこぶなり。

【一】▲（夜）にかゝる序詞。△（おき）にかかる序詞なり。

【三】秋鹿の、妻よぶこゑの、身にしみて悲しく聞こゆるは、秋といふ時節の爲

か。はた、我が心がらにや。秋ならぬ他の時節に於いて、聞き試みたし、となり。

【二】▲何のいはれもなく、侮辱を加ふるなり。

由の部

【ユイゴン】遺言　〔参照〕（コトバ）（シヌ）

古句

一　鳥の將に死なんとする、其の鳴くこと哀し。人の將に死なんとする、其の言ふこと善し。（論語）

【ユウガタ】夕方　〔参照〕（ユウグレ）

【ユウキ】勇氣　〔参照〕（ユウシャ）（ケッシ）（イクサ）（グンジン）（タイショウ）（ダイタン）

古句

一　威の爲に惕れず、利の爲に疚しからず。（韓愈）

二　大勇者は、卒然とこれに臨めども驚かず。▲「故なくしてこれに加ふ」れども怒らず。（蘇軾）

三　勇を貴ばずして、忍を貴ぶ。これ實に一字千金の兵法なり。（晉書）

四　勇を好みて學を好まざれば、其の蔽や亂。（論語）

五　匹夫辱められて、劍を拔きて起ち、身を挺で、鬪ふ。これ勇と爲すに足らざるなり。（蘇軾）

六　勇は逆德なり。▲兵は凶器なり。（國語）

七　水行に蛟龍を避けざるは、漁父の勇なり。陸行に兕虎を避けざるは、獵夫の勇なり。白刃前に交はるも、死を視ることを生の如きは、烈士の勇なり、窮するは命あり、通ずるは時あるを知り、大難に臨みても懼れざるは、君子の勇なり。（莊子）

八　▲「金革を袵とし」、死して厭はざるは、「北方の强」なり。（中庸）

九　死を輕んじて暴す。これ小人の勇なり。（荀子）

一〇　以て死すべし、以て死するなかるべし。死すれば勇を傷る。（孟子）

一一　▲「勇力世を振はす」には、これを守るに怯を以てす。（孔子家語）

一二　君子、勇ありて義なければ亂を爲し、小人、勇ありて義無ければ盜を爲す。（論語）

【六】▲いくさ道具。

【八】▲甲冑兵器を身にまとひても、身、臥床にある如し、となり。△蠻人の愛する强。

【一〇】生死、いづれを取るべきか、疑はしき場合には、死すべからず、となり。

【一一】▲世人をして、其の勇に惑じて、奮起せしむるなり。

一三　慈なるが故に、よく勇なり。（老子）

一四　勇を好むは危術なり。（淮一子）

一五　高棟に登り、危檐に臨みて、目眴がず、心懼れざるは、工匠の勇なり。深泉に入りて蛟龍を刺し、黿鼉を抱いて出づるは、漁夫の勇なり。戰に臨みて先登し、骨を暴し、血を流して辭せざるは、武夫の勇なり。廣廷に居て色を作し、辯を端しくして、君の嚴顏を犯し、前に▲「乘軒の賞」ありと雖も、未だこれが爲に動かず、後に△「斧鑕の誅」ありと雖も、未だこれが爲に懼れざるは忠臣の勇なり。（臣軌）

一六　手に▲萬鈞を提げて、後に多力見はれ、難に處し患を踐みて、後に貞勇出づ。（劉子新論）

【一五】▲車に乘りて、宮門を出入することを得る、厚き待遇の恩賞。△死刑のこと。

【一六】▲多大なる重量のこと。

西諺

一　爲善の道を知り、制欲の勇氣ある者は、學ばずと雖も、大に學びたるに齊し。（シセロ）

二　平穩の時の獅子は、戰時の鹿なり。（拉丁）

三　自信は、勇氣の根源なり。（英吉利）

古歌

一　虎にのり降る矢を越えて、青淵に
　みづちとりてん、劍太刀もが。（萬葉集境部王）

二　千萬の仇に向ひて、▲「走り猪の
　かへり見せぬを、心ともがな」。（橘千蔭）

【ユウグレ】　夕暮　〔參照〕（アサとバン）（ヨル）（サビシイ）（ナガメ）

古句

一　日、桑榆に近し。

二　亭々として碧流暗く、日入りて孤霞繼ぐ。（常建）

三　樹林陰翳し、鳴聲の上下するは、遊人去りて、禽鳥の樂しむなり。（歐陽修）

【二】▲事なき時に、勇ある如くに見ゆる者は、まさかの場合には、臆病なる者なり。

【三】▲勇往直進する走猪の如き、武勇を得たし、となり。

【一】日の、山の端に沒せんとする形容。

【四】▲夕暮の、さびしき色のこと。

【六】暮れ方に、朱簾を捲きて、西山の雨を眺むるなり。

【一二】日の、西山に沒せんとする形容。

【一三】▲見渡す限りの、廣りたる空のこと。

【一四】▲山の、群立つ形容。△水の、廣廣としたる形容。

四　林昏うして、▲楚色來る。（常建）

五　牧人は犢を驅りて返り、獵馬は禽を帶びて歸る。（王績）

六　朱簾暮に捲く、西山の雨。（王勃）

七　春寒くして、野陰風景暮る。（杜甫）

八　日昧々として、其れ將に暮れんとす。（司馬遷）

九　夕陽山に在りて、人散亂す。（歐陽修）

一〇　日落ちて江湖白く、潮來りて天地青し。（王維）

一一　薄暮冥々として、虎嘯き、猿啼く。（范仲淹）

一二　景翳々として、以て將に入らんとす。（陶潛）

一三　▲「十里の黃雲」、白日曛れ、北風雁を吹いて、雪紛々たり。（高適）

一四　日を礙つる暮山は、青うして簇々たり。天を浸す秋水は、白うして△茫々たり。（白居易）

【一六】▲昔梁の孝王の時、めかれし折に、植ゑられし竹園も、今は荒れ果てゝ、日暮には、鴉の、塒もとむる場處となれり、となり。△見渡す限り、ひつそとさびしく、只二三軒の家あるのみ、との意。

【一八】▲水面の、廣く遠くして、煙たちて見ゆるなり。

【一九】太陽の、半は沒し、半は青山の上に現れあるなり。

【二〇】▲明日の晴天は、夕日の赤きにより、確知らるゝ。林に、赤き夕日の輝くを、昔へ寒冷を增すは、これ、明日の晴天の前兆なり。△日暮に、

【二一】廣々と連る沙原の、秋の日暮れて、物さびしきを、言へるなり。

【二四】すべての物事は、定めなし、との意。

一五　城外風悲んで、暮れんと欲するの天。（王昌齡）

一六　▲「梁園の日暮、亂飛の鴉」、△「極目蕭條たり、三兩家」。（岑參）

一七　秋天漠々として、昏黑に向ふ。（杜甫）

一八　萬里蒼茫として、▲煙水暮る。（韓愈）

一九　青山は猶嘶む、半邊の日。（李太白）

二〇　▲「林表には霽色明かに」、城中には「△暮寒增したり」。（祖詠）

二一　日落ちて、長沙秋色遠し。（李太白）

二二　暮れて行く日も山の端に、入相の鐘の音の、浦わの浪に響きつゝ、いづれも物凄し。（謠曲巴）

二三　眺めやる其方の空は、白雲のはや暮れそむる遠山の、嶺も木深く見えたり。（謠曲融）

二四　鐘もはや聲々に、▲「諸行無常」と告げ渡る。（謠曲夜討曾我）

二五　秋は夕暮。夕日花やかにさして、▲「山際いと近くなりたる」に、烏の、

ねどころに行くとて、三つ四つ二つなど、飛び行くさへ哀なり。（枕草紙）

【二五】▲夕日の、山ぎはに沒せんとするなり。

二六　雲海沈々として、青天已に暮れなんとす。孤島に夕霧隔てゝ、月海上に浮べり。（平家物語）

古歌

一　ひぐらしの、鳴く山里の夕暮は、
　　風より外に、訪ふ人もなし。（古今集讀人不知）

二　夕暮のさびしきものは、朝顏の
　　花をたのめる、宿にぞありける。（後撰集讀人不知）

三　さびしさに、宿を立出でゝ眺むれば、
　　いづこも同じ、秋の夕暮。（後拾遺集良經）

四　風吹けば、蓮の浮葉に玉こえて、
　　涼しくなりぬ、ひぐらしの聲。（金葉集俊頼）

五　鶉なく、まゝの入江の濱風に、
　　尾花なみよる、秋のゆふぐれ。（金葉集俊頼）

六　夕暮は物ぞ悲しき、鐘の音を
　　明日も聞くべき、身とし知らねば。（詞花集和泉式部）

七　さびしさは、其色としも無かりけり、
　　まき木たつ山の、秋の夕暮。（新古今集寂蓮）

八　心なき、身にもあはれは知られけり、
　　鴫たつ澤の、秋の夕暮。（新古今集西行）

九　見渡せば、花も紅葉もなかりけり、
　　浦のとまを尾の、秋の夕暮。（新古今集定家）

一〇　竹の葉に風ふき弱る、夕暮の
　　物のあはれは、「秋としもなし」。（新古今集宮内卿）

一一　山寺の、入相の鐘のこゑ毎に、

【一〇】▲秋とのみは限らず、との意。

今日も暮れぬと、聞くぞ悲しき。（拾遺集讀人不知）

【ユウシャ】勇者　〔參照〕（ユウキ）（ダイタン）

古句

一　柔も亦茹はず、剛も亦吐かす、▲矜寡をも侮らず、△彊禦をも畏れず。（詩經）

二　長は七尺に滿たずと雖も、心は萬夫に雄たり。（李太白）

三　吾が膝は鐵の如し。豈賊の爲に屈せんや。（一統志）

四　▲桓々として虎の如く、貔の如く、熊の如く、羆の如し。（書經）

五　智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず。（論語）

六　志士は、溝壑に在るを忘れず、勇士は、其の元を喪ふを忘れず。（孟子）

七　勇者は、死を怯れて名を滅すことをせず。（魯仲連）

八　骨騰り、肉飛ぶ。（吳越春秋）

九　泰山前に崩るゝも、▲色變せず。（蘇軾）

【一】▲鰥寡に同じ。無力の者なり。△强敵のこと。

【四】▲武勇なる樣の形容。

【六】志ある者は、艱難を期し、勇士は、死を期す、との意。

【八】勇者の、疾走する樣の形容。

【九】▲顏色なり。

一〇　猛虎の猶豫するは、▲蜂蠆の、螫を致すに若かず。△騏驥の跼蹐するは、駑馬の安步するに如かず。×孟賁の狐疑するは、庸夫の必ず至るに如かず。（史記）

西諺

一　鷲は、蠅を捕らず。（英吉利）

二　幸運は、勇者を愛す。（拉丁）

古歌

一　千萬の軍なりとも、▲「ことあげせず」捕りて來ぬべき、男とぞ思ふ。（萬葉集盡歷）

【ユウジン】友人　〔參照〕（トモ）

【ユウレイ】幽靈　〔參照〕（スゴイ）（サビシイ）（フシギ）

古句

一　▲「鬼哭啾々」として、聲天に沸く。（王翰）

【一〇】▲蜂の類。人を螫し害す。△日に、千里を走る馬。×まのろき馬。◎支那、古代の勇者。

【一】▲何の若もなく、或は、（彼此言はずに）の意。

【一】▲亡魂の、かなしみ泣く形容。

【五】▲苦難に堪へずして、死して、尚、この世に執心をのこす亡魂。△戦争などにて殺されて、怨恨命を失ひて、怨恨の晴れざる亡者。

【六】▲化物（ばけもの）のこと。

二　新鬼は煩寃し、舊鬼は哭し、天陰り雨濕へば、聲啾々たり。（杜甫）

三　往々鬼哭し、天陰れば則ち聞ゆ。（李華）

四　山河草木震動して、光り滿ち來る鬼の眼、たゞ日月の照り輝きて、面を向くべき樣ぞなき。（謠曲大江山）

五　▲「苦を守る幽魂」は、夜月に飛び、△「屍を失ふ窮魄」は、秋風に嘯く。（謠曲生田敦盛）

六　▲化生の姿を現はし、或は巖に火焔を放し、又は虛空に炎を降らし、角は枯木、眼は日月、面を向くべき樣ぞなき。（謠曲紅葉狩）

七　空かき曇る雨の夜の、鬼一口に食はんとて、歩みよる足音、振り上くる鐵杖の勢。（謠曲安達が原）

【ユカイ】愉快〔參照〕（タノシミ）（アンラク）

【ユキ】雪〔參照〕（アラシ）（コウリ）（フユ）（サムサ）

古句

【一】▲さても面白し、の意。△雪の、樹梢にかゝれる景色を指す。

【二】梅嶺の雪景の形容。

【三】▲鵝毛を織りて、製したる衣なり。雪の、衣に降りかかれる形容。

【六】▲雪神。△風神。

【七】▲見渡す限り、空の曇るをいふ。

【八】▲人の罪業も、懺悔すれば消滅す、と言へり。

一　▲隣むべし、冬景は春花に似たり。（白居易）

二　梅嶺に梅開く、一萬株。（白居易）

三　雪は鵝毛に似て、飛んで散亂し、人は▲鶴氅を被て、立ちて徘徊す。（白居易）

四　雪は林頭に點じて、見るに花あり。（管公）

五　地白くして、風色寒く、雪片大きさ手の如し（李太白）

六　▲滕六をして雪を降らしめ、△巽二をして風を起さしむ。（幽怪錄）

七　▲「十里の黃雲」、白日曛れ、北風雁を吹いて、雪紛々たり。（高適）

八　冬は雪をあはれむ。積もり消ゆる樣、▲「罪業にたとへつべし」。（方文記）

古句

一　雪ふれば、冬籠りせる草も木も、春に知られぬ、花ぞ咲きける。（古今集貫之）

二　降る雪は、消えても暫し止らなん、

三　花も紅葉も、枝に無き頃。（後選集讀人不知）
　烏羽玉の、夜のみ降れる白雪は、
　照る月影の、積るなりけり。（後選集讀人不知）

四　花ならで折らましものは、難波江の
　あしの若葉に、降れる白雪。（後拾遺集範永）

五　駒とめて、袖うち拂ふ陰もなし、
　佐野のわたりの、雪の夕暮。（新古今集定家）

六　春立ちてなほ降る雪は、梅の花
　さく程もなく、散るかとぞ見る。（拾　集躬恒）

【ユサン】遊山　〔參照〕（アソビ）（ハナミ）（サカモリ）

【ユズル】讓　〔參照〕（ドウジョウ）（アワレミ）（ジタイ）

古句

一　己立たんと欲しては、人を立て、己達せんと欲しては、人を達せしむ。（論語）

二　辭讓の心なきは、人に非ざるなり。（孟子）

【ユダン】油斷　〔參照〕（オコタル）（ヨウジン）（フヨウイ）（マヌケ）

古句

一　憂苦に生きて、安樂に死す。（孟子）

二　初めあらざるなし。克く終りある鮮し。（詩經）

三　禍は固り多く隱微に藏れて、人の忽せにする所に發す。（史記）

四　天下の難事は、必ず易より作り、天下の大事は、必ず細より作る。（老子）

五　洞庭深しと雖も、これを負む者は北ぐ。（文選）

六　千丈の堤も、螻蟻の穴を以て漏り、千尋の屋も、突隙の煙を以て焚く。（淮南子）

七　人、山に躓くことなくして、垤に躓く。（淮南子）

【二】▲己辭して、先、人に得さするなり。

【一】禍難の、安心の中に生ずるなかれ。

【五】▲支那の大湖。

【六】▲煙突。

八　蟻孔も河を噴き、溜沈も山を傾く。（傳玄）

九　官は、▲「官の成る」に怠り、病は、少しく癒ゆるに加はる。（說苑）

一〇　藏を慢るは、盜を誨ふるなり。容を冶すは、淫を誨ふるなり。（易經繫辭）

一一　小隙も舟を沈め、小蟲も身を害す。（列子）

一二　積羽舟を沈め、群輕軸を折る。（戰國策）

一三　大寒にして裘を求む。

一四　戰勝ちて將驕り、卒惰る者は敗る。（漢書）

一五　▲齧蝨は柱梁を仆し、蚊蝱は牛羊を走らす。（說苑）

一六　糠を舐りて米に及ぶ。（史記）

一七　禍は懈惰に生じ、孝は妻子に衰ふ。（韓詩外傳）

一八　人性の簡にする所は、幽微に存し、人情の忽にする所は、孤獨に存す。（徐侏長）

【九】▲官位の榮達なり。

【一一】輕き物も、積れば、舟をも沈沒せしめ、車の軸（しん）をも折るに至る、となり。

【一五】▲木を蝕する小蟲なり。

【一六】小を輕んじて油斷すれば、大害に及ぶをいへり。

【一八】人は、微細にして目に立たざる程のこと、或は、人の見ざる所にありて、とかく、疎略に流れ易きものなり。

一九　▲涓流は窄しと雖も、浸く△江河を成し、×爝火は微かなりと雖も、卒に能く野を燎く。（後漢書）

二〇　▲死灰再燃す。

二一　▲叢輕は軸を折り、▲羽翮も肉を飛ばす。（漢書）

二二　泰山の▲霤は石を穿ち、▲「殫極の綆」は▲幹を斷つ。（枚乘）

【ユックリスル】寬裕　〔參照〕（ユルヤカ）（ジンブツ）（ドリョウ）

古句

一　綽々として餘裕あり。（孟子）

【ユミ】弓

古句

一　三尺の劍光は、氷手に在り。一張の弓勢は、▲「月心に當る」。（朗詠集）

古歌

一　取る人の、心をさへに引立てし、

【一九】▲ちょろ〳〵流の小川。△支那の揚子江、黃河の如き大川。×ともし火。

【二〇】▲冷えたる灰のこと。

【二二】▲（一二）を見よ。△鳥の翼なり。

【二二】▲すりきれたる釣瓶の繩なり。

【一】ゆつくりとして、ゆるみのある形容。

【一】▲弓を、滿月にしぼりたる形容。

二　取るまゝに猛き心も、おのづから
　　ふり起さるゝ、梓弓かな。（後鈴屋集春庭）

三　みとらしの梓の弓は、神代より
　　我が大君の、守りなりけり。（北が花千蔭）

【ユメ】夢　〔参照〕（ヨル）（ネムル）（オモイ）

古句

一　熊羆、夢に入る。

二　書思ふ所あれば、夜其の事を夢る。（列子）

三　夜深くして忽ち夢る、少年の事。夢に啼いて、▲「粧涙紅うして闌干たり」。
　　（白居易）

古歌

一　うたゝ寝に、戀しき人を見てしより、

【一】男子を生む前兆と云ひてあり。

【三】▲化粧したる美人の頬に、血の涙のはら〳〵と、流るるなり。

二　命にも、優りて惜しくあるものは、
　　見果てぬ夢の、覺むるなりけり。（古今集恋巻）

三　うたゝ寝の夢なかりせば、別れにし
　　昔の人を、また見ましやは。（金葉集顯季）

四　夢にのみ、昔の人をあひ見れば、
　　醒むる程こそ、別れなりけれ。（金葉集永縁）

五　思ひつゝ、ぬればや人の見えつらん、
　　夢と知りせば、覺めざらましを。（古今集小町）

【ユルカセ】忽　〔参照〕（ユダン）（オコタリ）（フヨウイ）

【ユルヤカ】寛　〔参照〕（ユックリスル）（ドリョウ）（ジンブツ）

古句

一　寛は、以て猛を濟ひ、猛は、以て寛を濟ふ。（左傳）

二　寛猛相濟ふ。

三　川は、▲委蛇を以ての故に能く遠く、山は、▲陵遲を以ての故に能く高く、道は、優遊を以ての故に能く化し、「徳は、純厚を以ての故に能く豪なり」。（說苑）

四　人は天地の靈なり。天地は限る所なし。人の性何ぞ異ならん。寛大にして極らざる時は、喜怒これに障らずして、▲「物の爲に煩はず」。（徒然草）

【三】▲うねりくねる樣の形容。△ゆるやかに、急峻ならぬ樣の形容。×ゆるゆかなる樣の形容。◎徳を修むるに、心を專にすれば、漸次に人をなす、となり。

【四】▲外物の爲に、精神を勞せざるなり。

古歌

一　吉野なる、夏見の川の川淀に、
　鴨ぞ鳴くなる、山かげにして。（新古今集沒原王）

輿の部

【ヨイとワルイ】善惡（參照）（ゼンとアク）（ゼン）（アク）

古句

一　玉石、匱を同じくす。

二　玉石混淆す。

三　絲麻ありと雖も、▲管蒯を棄つること無かれ。△姬妾ありと雖も、蕉萃を棄つること無かれ。（左傳）

四　君子は、水を鏡とせずして、人を鏡とす。水を鏡とすれば、則ち面の容を見、人を鏡とすれば、則ち▲「吉と凶」とを知る。（晏子）

【ヨウ】醉（參照）（サケ）（インショク）（サカモリ）（ハナミ）（モチナシ）

古句

一　思もなく、慮もなく、其の樂み陶たり。（劉伯倫）

二　兀然として醉ひ、恍爾として醒め、靜聽すれども雷霆の聲を聞かず、熟視すれども泰山の形を見ず、寒暑の肌を切り、嗜慾の情に感するを覺えず。（劉伯倫）

三　紅光面に入りて、春風和す。（馬之才）

四　玉山、將に頹れんとす。

【二】意、上に同じ。

【三】▲靴を造るに用ふる所。△貴族の美姬。×衰弱せる醜女の意。

【四】▲徳の善と、惡とのこと。

【一】善と惡とを、混同する意。

【四】酔ひて、たふれんとする樣の形容。

【ヨウイ】容易　〔参照〕（タヤスイ）

【ヨウイ】用意　〔参照〕（ヨウジン）

古句

一　天の未だ陰雨せざるに及びて、牖戸を綢繆す。（詩經）

【ヨウガイ】要害　〔参照〕（イクサ）（マモリ）（シロ）

古句

一　一夫關に當れば、萬夫も開くなし。（李太白）

【ヨウジョウ】養生　〔参照〕（クスリ）（インショク）

古句

一　居は氣を移し、養は體を移す。（孟子）

二　安くして調攝せざれば、病む時に悔ゆ。（寇來公）

西諺

一　其の▲「足を溫かにし」て、其の▲「頭を冷かにせ」よ。（英吉利）

【一】鳥の、降雨に先立ちて、能く巣口を閉ぢ塞くがごとし。

【二】一人の武夫、要害の關門を守り固むれば、千萬の武夫をもつてするも、これを破り難し、となり。

【三】人は、其の居處、境遇によりて、氣質を變じ、又、養生すれば、體質も變ず、となり。

【四】▲孜々として、身體を勞する意。△情に熱中せずして、能く、理の示す所を考ふるなり。

二　▲「口を冷かにし」て、身を暖かにするは、長壽の法なり。（ジョウジ、ハーバート）

三　晝食の後には、暫く靜座せよ。晩餐の後には、一哩を歩め。（英吉利）

四　百人の醫師を迎へんより、寧ろ一回の晩餐を休め。（西班牙）

【ヨウジン】用心　〔参照〕（ツツシム）

古句

一　治に居て、亂を忘れず。

二　奔車の上には仲尼なく、覆舟の下には伯夷なし。（韓非子）

三　君子は、安けれども危きを忘れず、存すれども亡を忘れず。（易經繫辭）

四　安きに居て、危きを思ふ。（左傳）

五　重寶を懷く者は、夜行せず、大功に任する者は、敵を輕んぜず。（戰國策）

六　君子は、安きにも危きを忘れず、治にも亂を忘れず。（易經繫辭）

【二】▲食物をひかふる意。

【三】君子、危きに近よらざる類なり。

七　小隙も舟を沈め、小蟲も身を害す。（列子）

八　▲千金の子は、堂に垂せず。（英諺）

九　用意周到。

【八】其の墜落せんことを恐れて、堂縁に近づかぬなり。

【九】用心の、細密に行きとゞく意。

西諺

一　晴天にも、外套を忘るゝこと勿れ。（西班牙）

二　▲類火の、隣家に及べる時は、已に自家を警戒すべき時なり。（英吉利）

三　老練なる鷲鳥は、狐と遊ばず。（英吉利）

四　老犬の吠ゆる時には、警戒せよ。（日耳曼）

【ヨウチ】夜討　〔参照〕（イクサ）（テキ）

古句

一　夜、營を斫る。

【三】▲外より、燒けのびて來たる火事。

【ヨウボウ】容貌　〔参照〕（ビジン）（カオイロ）（ミカケ）

古句

【一】夜襲するなり。

一　巖々として、孤松の獨立するが如し。

二　風采颯らず。

三　風丰を想望す。

四　高潔にして、琨玉秋霜の如し。

五　皎々として、玉樹の、風前に臨むが如し。（杜甫）

六　眉目畫くが如し。（後漢書）

六　冶容好を求むるは、君子の醫とする所なり。（班固）

八　君子の「▲道に貴ぶ」所の者三あり。「▲容貌を動かしては、斯に暴慢に遠ざかり」、×「顏色を正しては、斯に信に近づき」、◎「辭氣を出しては、斯に鄙倍に遠ざかる」。（論語）

九　形容枯槁す。（屈原）

一〇　容貌正しきが故に、情性治り、情性治るが故に、仁義存し、仁義存するが故に、盛德著る。（徐偉長）

【一】人並すぐれて、氣品の高き形容。

【二】容貌の醜陋にして、引立たぬ樣なるにいふ。

【三】如何に美しき容貌かと、想像して待ち居るなり。

【四】高尚潔白にして、毫も、けがれのなき樣の形容。

【五】人品高潔の形容。

【八】▲道德修養の上にて、重んずるなり。△暴慢のふりを、容貌にあらはさゞる樣につとむるなり。×不信用を招く如き、打とけ過ぎたる顏色を、慎むなり。◎野卑なる言語を發せざる樣に、注意するなり。

【九】容貌の、いたく衰弱したる樣の形容。

【一一】▲容貌の、輝くばかりにうつくしきなり。

【一二】▲ふるまひの、尊尚なる形容。△氣の落ちついて、だやかなるなり。

【一四】▲容貌の、かしけ極るなり。

【一五】▲蛾眉は、美人の眉しき（まゆ）なり。美人の、容貌の美に詩るも、暫時のことなり、との意。△忽ちの間に、白髮の老媼となりて、ほつれ毛のみ多きに至る、となり。

【一七】▲大人になりたる女。△乙女の意。

【一九】▲寶品を、秘藏する意。△君子は、敢て、其の德をはべに現はさんとせず。故に、俗眼よりは、愚とも見らるゝなり。

【二〇】▲△共に、孔門の高弟。

一一　古來容光は、人の羨む所なり。（劉廷芝）

一二　「顧視清高」にして、「氣深穩なり」。（杜甫）

一三　容色溫然として、怒らず。（蘇軾）

一四　愁苦辛勤して、「顦顇し盡きぬ」。（白居易）

一五　「婉轉たる蛾眉も、能く幾時ぞ」。「須臾に鶴髮亂れて、絲の如し」。（宋之問）

一六　暮去り朝來りて、額色故りぬ。（白居易）

一七　其の狀貌は、乃ち婦人女子の如し。（蘇軾）

一八　眉目、畫くが如し。（後漢書）

一九　良賈は、深く藏して虛しきが如く、君子は盛德ありて、「容貌は愚なるが如し」。（史記）

二〇　孔子曰く、吾言を以て人を取らば、これを子羽に失せん。貌を以て人を取らば、これを宰予に失せん。（論語）

【二一】▲茅の新芽の、軟かなるなり。△脂肪の、かたまれるをいふ。×木幹中の蟲。白くして長し。◎（ひさご）の實。白くして、よく整列す。◎蟬に似て、額の廣きをいふ。

【二三】▲頭髮の、しらがとなれる形容。△蘂（ずゐ）なり。×眉の毛の、つやを失ひたるなり。

【二二】▲顏面の、みにくき意。

二一　手は柔荑の如く、膚は凝脂の如く、頸は◎×蝤蠐の如く、齒は◎瓠犀の如く、◎螓首にして蛾眉なり。（詩經）

二三　▲「頭には霜蓬を戴き」、嬋姸たりし兩鬢も、肌にかじけて墨亂れ、艶々たりし×「雙蛾も、遠山の色を失ふ」。（謠曲卒都婆小町）

二三　名を聞くより、即面影は、推量らるゝ心地するを、見る時は、又、かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。（徒然草）

二四　女は、髮のめでたからんこそ、人の、目たつべかんめれ。（徒然草）

西諺

一　男子の年齡は、其の心に在り。女子の年齡は、其の顏に在り。（以太利）

二　▲「顏の赤き」は、心の黑きに勝る。（荷蘭）

三　美貌と才智とは、相伴ふこと鮮し。（日耳曼）

古歌

一　形こそ、深山がくれの朽木なれ、

【二】美しき花の、春雨にあたりて、忽ち其の色のさめたるが如く、我容貌も、うかとして居る間に、いたく衰へはてたり、となり。

【五】▲人の慾望中、生活の慾と、色慾とより大なるはなし、となり。△人の、大惡を犯すも、皆死を惡み、貧苦を厭ふより起る、となり。

【六】▲禽獸を集め飼ひて、樂しむなり。△猥褻なる音樂。×仁德を害するなり。◎淫亂に導くなり。

【三】▲利に向ひて、進むなり。△利を、取り入るゝなり。

【四】曹操の故事。人の慾望の、限りなきにいふ。

二　花の色は移りにけりな、徒に
　　心は花に、なさばなりなむ。（古今集けんけい）
　　我が身よにふる、ながめせしまに。（古今集小町）

【ヨク】慾　〔參照〕（リョク）（ヨクバル）（ノゾミ）

古句

一　敖は長ずべからず、欲は縱にすべからず、志は滿たすべからず、樂は極むべからず。（典禮）

二　寡言なれば、則ち謗を省き、寡欲なれば、則ち身を保つ。（景行錄）

三　日月明かならんと欲すれば、浮雲之を掩ひ、河水清まんと欲すれば、沙石之を穢し、人性平かならんと欲すれば、嗜欲これを害す。（淮南子）

四　欲は縱にすべからず。欲を縱にすれば、災を成す。（張蘊古）

五　▲「飲食男女は、人の大慾存し」、△「死亡貧苦は、人の大惡存す」。（禮記）

六　內色に荒むこと勿れ。外▲「禽に荒む」ことなかれ。得難きの貨を貴ぶこと勿れ。「亡國の音」を聽くこと勿れ。內に荒めば×「人性を伐ね」、外に荒めば人心を蕩す。得難き貨は侈り、亡國の音は淫す。（張蘊古）

七　水の性は清けれども、土壤これを沮し、人の性は安けれども、嗜欲これを亂る。（孔叢子）

八　水の性は清を欲すれども、沙石これを穢し、人の性は平を欲すれども、嗜欲これを害す。（文子）

【ヨクバル】慾張　〔參照〕（ヨク）（ノゾミ）（リョク）（ショウジン）（ヨクメ）（シワイ）

古句

一　右手に圓を畫き、左手に方を畫く。（韓非子）

二　足るを知る者は富み、足るを知らざる者は、富むと雖も貧し。

三　廉潔の者は、▲「自ら進む」に途なく、貪苛の者は、△「取り入る」〻に徑多し。（南史）

四　隴を平げて、復蜀を望む。（後漢書）

五　棺を鬻く者は、歳の疫せんことを欲す。（漢書）

六　老時は、血氣既に衰ふ。これを戒むること、利得にあり。（論語）

七　慾多ければ身を傷り、財多ければ身を累す。（老子）

【六】老人は、利欲の念ふかきものなり。

【七】▲多すぎると思ふなり。△少すぎると思ふなり。

西諺

一　獨り天國に行かんことを欲する者は、決してこれに達すること能はず。（英吉利）

二　人は、自己の財産を過多視することなく、又、自己の才能を過少視することなし。（英吉利）

古歌

一　事足れば足るにも慣れて、何くれと
　　足るが内にも、猶歎くかな。（三卿集定信）

二　梅が香を、櫻の花に匂はせて、
　　柳のえだに、咲かせてしがな。（中原政時）

【ヨクボウ】慾望　〔參照〕（ノゾミ）

【ヨクメ】慾目　〔參照〕（ヨク）（ヨクバル）（リヨク）

古句

一　人、其の子の惡を知るなく、▲「其の苗の碩なるを知るなし」。（大學）

西諺

一　人は、皆自己を視ること重く、自己を以て、社會に必要なるものと信ず。（ジョンソン）

【ヨコシマ】邪　〔參照〕（ココロ）（アク）（イツワリ）（ドクフ）（ザンゲン）

古句

一　民貧しければ、則ち姦邪生ず。（漢書）

二　大奸は忠に似たり。大詐は眞に似たり。（呂海）

【ヨステビト】世捨人　〔參照〕（テラ）（シュッケ）（ランセイ）

【一】▲我が田畠の苗の、如何によく發育したりとても、尚、小なる如くに思ふなり。慾目を以て、見ればなり。

【一】▲名利の外に、高く止りて、心の潔白なる意。△天子破の如きは、の如きは、れたる藁ぐつを藁つるが如し、との意。

【二】山林に隠遁する意。

【三】▲薪を拾ひて、暮に、雪の積れる様は、如何にも寒げに、寒れたり。△幽谷の水をくみて、月光を便りに、歩み来る有様の、如何にも痩せ衰へたる形容。

【五】▲寒暖に臨じて、衣物が著換するなどのことなし、の意。△衰へやつれて、骨ばかりとなれり。

【六】▲木々の葉の、紅葉しはじめてより、鹿の、しきりに鳴きて、聲をごらしたるなり。

【七】▲花を愛する念のみは、去り兼れたれば、花は、定めしれば、心弱きこと、笑ふなるべし、となり。

【一】▲世の中の、狭き形容。△人生の、短形容。

【二】花のみは、年々、同じ色に咲き出づれど、人は、歳々、老いゆきて、もとの身たあらず、となり。

【三】▲老衰の形容。

【五】▲世の中を渡ることの難儀なり。

一　▲「物外に亭々として、霞外に皎々たり」。千金を芥にして眄みず、▲「萬乗を屣にして、其れ脱するが如し」。（孔穏璋）

二　鳥獸と群を同じくす。

三　▲「暮山の薪を拾ひては、雪を戴くに膚寒く」、△「幽谷の水を掬んでは、月を擔ふに肩痩せたり」。（太平記）

四　松風溪水の清き音を聞きて爽かなる耳の、富貴榮花の卑しきことを聞きては、汚れたる心地す。（太平記）

五　暗々たる庵室に徒に眠り、▲「衣寒暖に與へざれば」、膚は▲「髑骨と衰へたり」。（謡曲景清）

六　蒼苔路滑かにして、僧寺に歸り、▲「紅葉に聲乾れ」て、鹿林にあり。（温庭筠）

古歌

一　世を捨てゝ山に入る人、山にても
なほ憂き時は、いづち行くらん。（古今集朝恒）

二　世の中を、思ひ捨てゝし身なれども、
▲「心弱しと、花に見えぬる」。（後拾遺集能因）

【ヨノナカ】世中　〔参照〕（ハカナイ）（ウンメイ）（ウツリカワリ）

古句

一　▲「蝸牛の角上」に、何事をか爭ふ。△「石火の光中」に、此の身を寄す。（白居易）

二　年々歳々、花は相似たり。歳々年々、人は同じからず。（宋之問）

三　川は、水を閲べて川を成し、水滔々として日は度る。世は、人を閲べて世を爲し、人冉々として行き暮る。（文選）

四　人生は、朝露の如し。（漢書）

五　▲「行路の難」は、山よりも難く水よりも險し。獨り人間の夫と妻とのみならんや。近代の君臣も、亦此の如し。（白居易）

六　行路の難は、山に在らず水にも在らず。秖人情反覆の間に在り。（白居